
佐和山物語
さわやま
あやかし屋敷で婚礼を
九月文
Aya Kutsuki
角川ビーンズ文庫

佐和山物語
あやかし屋敷で婚礼を

九月　文

BEANS BUNKO
15554
角川ビーンズ文庫

佐和山物語

あやかし屋敷で婚礼を

九月　文

15554

角川ビーンズ文庫

目次

序章　慶長七年二月一日
朔 7

第一章　慶長十年五月五日
西のキツネと東のタヌキ 10

第二章　慶長十年二月二十七日
モノノケ屋敷においでませ 52

第三章　慶長十年二月二十八日朝
時迷い人 76

第四章　慶長十年二月二十八日深更
深き闇の底 115

第五章　慶長十年二月二十九日朝
未だ夜明けは遠く 153

第六章　慶長十年二月二十九日夜
名前を呼ぶ声 173

断章　慶長十年三月一日暁
時の狭間 200

終章　慶長十年三月一日夕刻
たどりつく場所 206

あとがき 221

佐和山物語

あやかし屋敷で婚礼を

登場人物紹介

あこ

明るくて気丈な、大名家のお姫様。特技は武術。真直ぐすぎる性格ゆえ、暴走することも。



イラスト／久織ちまき


采女直重
直継の守り役。直継の一族らしく美形だが、穏やかで人当たりがいい。仕事中毒気味?
井伊直継
あこの許婚。16歳にして井伊家当主。人とは思えぬ美貌の持ち主。強い「祓い」の力を持つ。
たま
見た目より大人な内面を持つ、謎めいた童女。趣味は直継の嫁いびりで、あこを目の敵に!!

本文イラスト／久織ちまき

序章

慶長七年二月一日

朔

灯火が揺れた。
襖の両端に立つ燭台、その合間をなにかが通ったかのように、炎は異なる方向になびいた。
（――来た）
少年が面を上げると、襖の前に座する青年と視線がぶつかった。
青年もまた気づいていたが、少年を見据えたまま首をふった。動いてはなりませぬ、と。
しかし、と少年は音にすることなく訴える。青年の口は引き結ばれたままだ。二人はしばし、無言でたがいの意思を探りあう。だがそれは襖の奥からの激しい咳の音にさえぎられた。
「父上！」
少年は思わず腰を浮かす。
青年は「なりませぬ！」と畳に片膝を立て、少年の行く手を阻んだ。
「なれどっ！」
「殿のご命令です。――お控えくださいませ」
青年の瞳が静かに少年を射貫く。灯火に照らされた瞳にいつもの穏やかさはない。つとめて平静を装った声音に、少年は苛立たしげに腰をおろした。
庭には山桜が咲きはじめたとはいえ、雪が残る夜は冷えこむ。しかも今夜は朔、闇の深みか

ら冷気が這い出てくる。だが少年は湧きあがる焦燥に寒さを忘れた。

（なぜ、父上は……！）

父が病床について三月あまり、見舞いはおろか、寝所に近づくことさえ許されなかった。

それが今日許されたのはなぜなのか——その答えは、すでに心のどこかで知っていた。

少年の務めは室内の気を清浄に保つこと。入りこんだ怪は父が祓う。いま少年にできるのは暁を待つことだけだ。

ただ待つだけの夜はあまりに長く、あらためて夜闇の深さを思い知る。

青年は幾つの夜をこうして過ごしてきたのだろう。頬は憔悴の色が濃く、目は畳の一点を見据えたまま動かない。年が明けて以来、悪化の一途をたどる主の病状に、己の身を顧みる余裕もないのだろう。健常な者ですらこうなのだ。ましてや病の床にある者が怪を祓うなど——

そのとき、ひとつの名が少年の脳裏をよぎった。

はっと顔をあげると、襖の向こうに肩で息をくり返す父の姿を見た気がした。

（まさか——さきほどの影は！）

「治、部か……！」

のどを削るような声音に、ふたりの視線がぶつかった。

「兵部殿っ！」

室内の母の叫び声を聞くまでもなく、少年は襖を開け放つ。

寝所には白小袖姿の男がいた。それが父だと気づくまでにしばしの時が必要だった。

少年とよく似た細面の顔、ただでさえ細い身からは肉が落ち、結わえた髪は乱れている。そこには戦場を駆けていた頃の生気に満ちた面影はない。乱れ落ちた髪の合間からはくぼんだ眼だけが強い意志を持ち、爛々と輝いている。

その瞳は少年に――否、少年の前にいる黒い影に向けられていた。

「治部よ、けして渡さぬぞ……！」

月なき夜闇そのものの色をした影は、身を起こすこともままならぬ男をあざ笑うかのように揺らめく。そしてひとしきり笑うと、影は男に向かって一直線に伸び、胸元にすべりこんだ。

「父上！」

少年は駆け寄ろうとしたが、男はそれを拒むように少年に対して掛け布を投げつける。

男は、両手をついて喀血をくり返した。身体中の血という血をすべて吐きだすかのようにはげしく咳きこみ、床にあざやかな朱が広がる。そして部屋の中心に広がる血の池のなか、絶え絶えの息の合間から言の葉を紡ぎだした。

「まもれ、近江、の、国つ……神……！」

その瞬間、血が炎のように燃え上がり、血も、闇も、灯も、光となって、はじけて消えた。

永遠に。

第一章　慶長十年五月五日　西のキツネと東のタヌキ

『……ま…も……近…の……国……』

ゆら、ゆらと漂う眠りの底で、あこは声を聞いた。

（――だれ？）

目を開いて周囲を見わたすが、視界はいまだにゆらゆらと揺れている。

（まだ夢？）

茫としたまま瞬きを数回くり返すと、ようやく意識がはっきりしてきた。

（あ、駕籠ね）

駕籠の揺れにあわせて身体が揺れている。視界が揺れていたのも当然だ。心地よい揺れに、いつしか眠りに落ちていたらしい。

手ぜまな駕籠の内で、あくびをひとつ。

駕籠の中はとにかく暇だ。なにもすることがない。書を読むにも視界が揺れるし、書き物などもってのほか。四方には松や紅葉に小鳥があそぶ蒔絵がほどこしてあるが、それをながめるのも三日で飽きた。外の景色を楽しもうにも中山道は山間ばかりで、降りつづく雨に視界は閉ざされている。

だが長かった旅も今日で終わりだ。今朝醒井宿を発ち、目的の屋敷まで三里ばかり。午には着くと聞いている。

（どのあたりまで来たのかしら）

あこは脇息から身を起こし、すだれを上げる。だがまぶしさのあまり、あわてて手を離した。

「止めて！」

内からの声に駕籠はすぐさま止まり、その場に下ろされる。

「いかがなされました？」

駕籠のかたわらから侍女の声がする。はきとしたこの声はしのだ。

実家から付いてきた侍女のひとりで、年はあこよりひとつ上の十七才。だがその年であこの身のまわり全般を仕切っている。いまも駕籠からもっとも近い場所にいたはずだ。

「履物を用意して！」

「は、はい！」

あこの勢いに押されるまま引き戸が開けられ、あこはそろえられた草履に爪先をとおした。足元がぬかるんでいたので、羽織っていた打掛は駕籠にのこして立ちあがる。

「んん～っ」と思いきり伸びをすると、新緑の合間から緋色の小袖に眩い光が降り注いだ。

「あこさま、なにかございまして？」

「だってすごくいい天気じゃない」

予想外の答えに、しのは「は？」と首をかしげる。

「空よ空！　抜けるような青い空！　これこそ天晴れ五月晴れよ！　道中ずーっと天候に恵まれなかったけれど、今日になってやっと晴れたわ。こんなに天気がいいのは何日ぶり――」

「あこさま!!」

青天の下にしのの雷が落ちた。

「いったい何事かと思えばそのようなことですか！」

「え、だってすごく大事なことじゃない。道中、雨でずいぶん難儀したし、畑だってこうも降りつづけたら、せっかく出てきた芽も台無しに――」

「そのようなことを申し上げているのではございませんっ！」

しのは青筋をたてて立ち上がり、半身を引いて駕籠の後ろに跪く家人たちを示す。

「家人の前で気ままにふるまわれるなど！　ご自身のお立場をおわきまえくださいませ！」

「……そんなのもう、今さらじゃない？」

見わたすと家人たちは顔を伏せ、笠が小刻みに揺れている。笑いをこらえているのだろう。

（だってねぇ）

江戸を出てからはや半月、江戸屋敷に勤めていた者は元より、この旅ではじめて見知った家人たちにもあこの気性は知れている。きっと国元に帰れば、酒の席で噂することだろう。この旅であこがしでかしたあれやこれやを語るだけでも、話の種は尽きないはずだ。

それはしのも理解していたのだろう。苦々しげに「百歩譲って当家の者にはよしとしましょう」と妥協した。

「ですが、ここはもうお相手のご領内です。どこに人の目があるか――」
「あ、ワラビ！　ねぇしの、ワラビよワラビ！　あ、蕗も！」
「あ～こ～さ～まぁぁ～～～」
しののおどろおどろしい怒声に時が止まった。家人はしのの頭に角を見たにちがいない。
遠巻きにする周囲の視線にしのははっと我にかえり、ばつが悪そうに咳払いをすると、場を仕切りなおした。
「よろしいですか。あこさまはこれから大名家のご正室となられるのですよ」
「それはわかっているわ」
江戸から半月あまり、雨の中山道を上ってきたのはそのためだ。
「それをワラビだ蕗だなどと！　自覚が足りません、自覚が！」
「だって母上だって、戦の折には山菜取りに――」
「もう行かれません！」
鳴りやまない雷にあこは首を縮こめる。
「関ヶ原の戦から五年、御家の家禄がどれだけ増えたとお思いです。あこさまのお父上はもうれっきとした一国の主、十万石の大大名なのですよ」
「そういえば、そうね」
「お輿入れ先はさらに上の十八万石、しかも藤原家の流れを汲む名門ですよ。上様のご上洛とかさなり、このような仕儀とあいなりましたが、白無垢でなくとも輿入れ用の女駕籠でなくと

も輿入れ行列でなくとも！　これは御家を結ぶれっきとしたお輿入れです！　嫁ぐからにはもはや婚家の女、ゆめゆめ御家の名を貶めるようなことのなきよう、お気をつけくださいませ」

目鼻立ちのしっかりしたしのは、眉を吊りあげていても美女だ。諭す言葉はよどみなく、竹柄をあしらった若草色の小袖が凛とした彼女を引き立てる。これで家内の重臣の娘とくれば、縁談がひっきりなしだったのもうなずける。

（しのみたいにすれば姫っぽくなれるかしら？）

「あこさま、ちゃんと聞いていらっしゃいますか」

しのはじっと観察しているあこを睨めつける。

「わかってるわよ。お屋敷に入ったら気をつけるわ。あっ、あれがお屋敷なんじゃない？」

山道脇の木々の合間から隣の山が見える。その山間には武家屋敷の屋根が連なっていた。

「佐和山の大手門側のようですわね。これから向かう愛宕のお屋敷は山の裏手だそうですわ」

「あれが佐和山……」

さほど高さのないなだらかな山だ。今まで越えてきた山と違いがあるようには思えない。城がなければその名が天下に鳴り響くことはなかっただろう。

五年前の関ヶ原の合戦のとき、佐和山には西軍の将、石田治部少輔三成の居城があった。

石田治部は関ヶ原の戦に敗れ、主を欠いた佐和山城は東軍一万五千の兵に囲まれて三日ともたずに落城し、炎上した。城に残っていた兵は三千足らず、だが死者の数は、女子どもを含めるとそれを越えるといわれている。

あこにとって石田治部は祖父の仇だ。だが敵となったは世の流れ、仏となれば罪はない。
あこが城の失われた山頂に視線をうつして手を合わせると、侍女や家人もそれにならった。
「まだしばらくかかりそうね。ここで休憩をとらない？」
「まさかあこさま、ワラビ取りをするおつもりでは……」
そんなわけないじゃないと笑ってごまかしたものの、つきあいが長いと勘も鋭い。
「朝からずいぶん歩いたみたいだから、ちょっと休まないと。ね？」
しのはあこの顔をうかがっていたが、「すこしだけですよ」としぶしぶ認めた。

「ふぁーあ……」
あこは路傍の岩に腰かけ、大きく伸びをした。
頭上の木々は雨に濡れ、葉は太陽の光を受けて青々と輝いている。澄んだ空気は体内をめぐり、みずみずしい活力を与えてくれた。
（ここが江州……）
江州は山深い地だ。あこは江戸育ちなので、はじめての山城暮らしには不安があった。だが湿った草木がはこぶ風は心地よく、背後をふり返ると、土手のように盛り上がった街道脇のそこかしこにワラビが見てとれた。中には伸びきったものもある。

（うん、ここなら暮らしていけそうだわ）

しのは目くじらを立てていたが、父が家督を継ぐ以前は家人総出で山菜取りにいったものだ。戦つづきで田畑は荒れ、山菜でも取りにゆかねば食卓に色を添えることができなかった。だが五年前の関ヶ原の合戦を機に大きな戦はなくなり、百姓が戦に駆り出されることはなくなった。街道脇に生えるワラビや蕗が手つかずで残っているのは人手がないためではない。取る必要がないからだ。もしくは取っているほど暇ではないということ。つまり、江州の民にとっては、山深くの山菜を取るよりも田畑を耕したり商いをするほうが稼ぎになるのだろう。

商いの物の往来は町を富ませる。あこが生まれた年、主君家康は東海から関東に領地替えとなり、あこは自身の成長とともに江戸の町が発展してゆくさまを見てきた。

（もう、四年になるのね）

江州。その名を身近に感じるようになったのは四年前、関ヶ原の戦の翌年のことだ。

あこの父は江戸屋敷に戻るなり、開口一番告げた。

『あこ、輿入れ先が決まったぞ。お相手は井伊殿のご嫡男だ』

そのとき十二才だったあこは、主家の内情にくわしくなかったが、その名は知っていた。

井伊殿――井伊直政。主家である徳川家で五指に入る重臣だ。関ヶ原の合戦ののちに大坂を見据える要衝を任されたことからも、信頼の厚さがうかがえる。

『ぜひぜひにとお話をいただいてな。井伊殿は上様のおぼえめでたく、上州三万石に加えて江州十五万石。嫡子殿はまだ元服しておられないが、年回りはそなたとおなじだそうだ』

話はとんとん拍子に進み、婚礼は翌年、十三の春と決まった。――けちがついたのはその後だ。十三で嫁いでいるはずが、今年で十六。三年の間に三度、婚礼が延期となった。

まず一度め、嫁ぐはずの年に当主直政が亡くなった。直政は関ヶ原の戦後処理の激務がたたって体調を崩し、さらに戦で得た傷が悪化したため佐和山で静養中だった。嫡子である許婚が喪主となり、婚礼は翌年に持ち越しとなった。

あけて翌年、主君家康が征夷大将軍を拝命して江戸に幕府を開くことになった。公儀も幕臣も多忙を極め、婚礼どころではなくなった。これが二度めの延期だ。

婚礼の延期は一度でも外聞が悪い。だがそれが二度もつづくとなると、

――なにか祟られてるんじゃないの!?

そう思ったのはあこだけではないらしい。

天下が決するまで両家とも多くの戦に臨み、怨恨も多い。特に敵将の居城を賜った井伊家は、入城直後に当主が病死したこともあり、石田治部の祟りだとまことしやかに噂されていた。

噂だけでも不名誉だというのに、噂のままに遺命を白紙にしてはそれこそ家の恥だ。次こそはと、両家は膝を突きあわせて日程を詰めた。そうして予定していた三度めの今年。

（まさか上様が将軍職を退かれるとはねー……）

家康が将軍職を辞したことにより、その位は嫡子秀忠に宣下されることは疑いがなく、諸大名はこぞって秀忠の上洛に従った。あこの父もすでに京に入っている。江州は京への途上にあるため井伊家は秀忠の宿所を命じられ、またもや婚礼は延期となった。

吉事も凶事も三度つづけばもはや偶然ではない。しかしなにかが婚礼を祟っているのだとしても、日程に邪魔が入るだけで、あこに危害がおよんだことはなかった。

——ならば、障りがあるのは「ご婚礼」ではなく「お輿入れ」にちがいありますまい。

いずこの坊主がとんちをきかせたものやら、あこは輿入れせずに家に入ることとなった。花嫁の乗る女駕籠ではなく、あこも白無垢の婚礼衣装ではなく小袖姿のまま、十万石を超える大大名同士の婚礼にもかかわらず付き従う家人の数が極端にすくないのはこういう理由だ。

あくまでこの旅路は京へ上るためのもの、その道中で許婚の家に立ち寄るだけのこと。あとは父の上府にあわせて形ばかりの花嫁行列が出立するという算段だ。この行列がまたなにかに邪魔されたとしても、あこはすでに婚家に入っているし、嫁入り道具は日を改めて運べばよい。

（どう考えても、苦しい言い訳だと思うんだけど……）

だが、なにかを避けるためにはよく使われる手だ。

西の方角が悪いといわれれば南西にゆき、途中で小用を済ませて北に向かう。結果として西に行っていても、方違えという言い訳で障りを回避する。平安の世から八百年、人はそうしてなにかを避けて暮らしてきた。裏を返せば、それほどなにかを恐れているということだ。

あことて一生一度の輿入れにけちをつけられたくない。江戸からの道中ずっと雨つづきだったことも、これも祟りの一環かと気になっていた。だが城下に入る今日にこの青天。

梅雨の時季なので、増水を懸念して中山道を取ったのも幸いした。中山道は山道がつづくが、東海道にくらべて川が少ない。東海道ならば川の渡しに手間どっていたことだろう。

（終わりよければすべて良しってね）

やわらかな皐月の風が、くすぶる想いをさらって駆け抜けてゆく。

幼心に夢見ていた輿入れの形とは違うし、こんな屁理屈がまかりとおって大丈夫かとも思う。だが、まぁ人生こんなものだろうと悟るくらいには大人になった。三度の延期のたまものだ。

（……やっと来たのね。江州に）

まったく見知らぬ地だ。しかしそれまで想った年月を思い返すとなつかしさすら感じる。本当はもっと早くに来たかった。できれば三年前に、直接会って伝えたいことがあった。しかし今さら言ってもせんのないことだ。三年が経ち、もうその言葉は必要ないかもしれない。いや、必要ないほうがいい。――この想いは自分ひとりの心の中にあればいい。

あこは頭をふって余分な気持ちを追い出した。

「あー、遠駆けしたら気持ちいいでしょうねー。どうせ花嫁行列じゃないんだし、醒井まで馬で飛ばしてきたらよかったわ」

「まぁ、花嫁が馬で駆けつけるなんて！」

まさか背後に人がいたとは思わず、あわててふり返る。そこにいたのは、侍女のかやだった。しのの妹だけあって顔立ちは姉そっくりだ。姉のように『前代未聞です！』とつづくと思ったが、かやは両手を胸の前で組み合わせると、目を輝かせた。

「かっこいいです！」

（――へ？）

「姫さまならきっと花嫁姿でもお似合いです！　姉さまが姫さまと一緒に遠駆けなさるお姿、ああ、どんなに凛々しいことでしょう！」

白無垢でどうやって馬に乗るのよ、という指摘はかやの耳にはとどいていない。

「姉さまの騎馬姿もステキですけど、薙刀をふるわれる姿が一番好きです！」

（ていうか、人の話、聞いてないし）

かやの想像の世界ではさぞかし素晴らしい姉さま像がめぐっていることだろう。

しのとかや。実家から連れてきた侍女は二人だけだ。当初はしの一人の予定だったのだが、かやの中に『姉さまと離れればなれ』という選択肢はなかったらしい。侍女とするには幼いが、知らぬ間に付いてくることになっていた。

（まぁ、にぎやかなのはいいんだけどねー）

難点なのは、あこがしのを独占していると、かやが恨みがましい目で見ていることだ。

いいかげん姉離れしないものかとそっとため息を漏らすと、かやが顔をのぞきこんできた。

「姫さま、浮かないお顔ですね？　せっかくのご婚礼ですのに、うれしくないのですか？」

（こういうところにはよく気づくんだけどね……）

あこは観念して素直に「そうね」と認めた。しのが理詰めなのに対し、かやは勘でものを言う。だからこそ気付くこともあるのだが、姉に関してだけは例外らしい。

「だって、どのようなお相手なのか気になるじゃない？」

姉離れしてみない？　とは面とむかって聞きづらいので、たとえば異性などに興味はないも

のかと探りを入れてみる。しかしかやは握り拳をつくってみせた。
「頼りのない御方でしたら、姉さまにびしびし叩きなおしてもらいましょうね！」
「いえ、あの、そういう意味じゃ……」
その言葉はかやの耳にはとどいていない。通りのかっぱらいを投げ飛ばしただの、迫ってきた家人を箒で伸したただの、姉の勇姿を熱く語るかやに、あこはがくりと首を落とした。
（ああ、やっぱりダメそう……）
「でも、お相手はお公家さまでしたっけ？　あんまりきびしくできないかもしれませんねぇ。そのぶん雅な方だといいんですけど」
どこぞの萩中納言などというあやしい由緒とはちがい、井伊家はれっきとした藤原氏だ。しかし任地に下って数百年もたてば地侍もおなじ、公家の血などあてにしていない。
あこは、「外見なんて……」と口にしかけたが、
「でも大御所さまのお孫さまなら、やっぱりタヌキですかね？」
その一言で撃沈した。
三河武士は総じて骨が太く背が低い。腹の出た家康はしばしばタヌキに喩えられる。あこの家も三河の出なので三河者の体型は見慣れているが、十六才でタヌキ腹は勘弁してもらいたい。
（タヌキねーよく見るとかわいいんだけどねーでもねー……）
「ああ姫さま！　ご心配なさらずともあとから綺麗なお召し物もたくさん届きますから！　煌びやかな婚礼道具が届けばまた気分も変わりますよ！」

乾いた笑いをこぼすあこを、かやは精一杯なぐさめようとする。だが、なぜ着物。
（普通はそうなのかしら）
生家は長らく男児に恵まれず、一人娘だったあこは「婿を取って共に家を守れ」と男児のように武芸や学問を教えられた。香炉より刀、茶筅より手綱を手にしている時間が長かったせいか、着物にはあまり頓着しない。反物の見立ても侍女まかせだ。
「わたしは着物より馬がほしいわ」
「かやは繕いものが得意ですから、たくさん馬に乗られても大丈夫ですよ！」
なにかちがうと思ったが、指摘するのはやめた。いや、指摘できなかった。
耳の奥がきんと鳴る。それと同時に胸の奥底がざわつきはじめ、鼓動が速まる。
「姫さま、なにか……」
かやも伊達に武家の娘ではない。その気配を感じとり、声を落とす。
（なんなの、この感じ……）
胸の奥のざわめきはやがて実際の音となった。——地鳴りだ。
かやが揺れに足を取られてよろめき、あこはとっさに抱き寄せる。周囲を見渡すと、大地は舟に揺られるように大きく揺れている。地崩れのおそれはなさそうだ。しかし。
「え!?」
あたりを見渡していたあこは、薄桃色の衣に目をとめた。見上げると街道脇の土手に人影がある。女童だ。十ばかりの女童は、信じられないものでも見るかのように天を仰いでいた。

「そんなところにいたらあぶないわ！　下りてきなさい！」
あこの呼びかけに女童の視線が向けられる。と、あこは女童に目を奪われた。
（綺麗な子……）
白い肌に黒目がちな大きな瞳。紅を刷いているわけでもないのに、その唇はおどろくほど赤い。髪は胸元で切りそろえ、肩のあたりで色紐で結わえて前に垂らしている。
小花紋様を散らした薄色の小袖には汚れひとつない。百姓ではない。武家の子だ。
（どうしてこんなところにひとりで？）
木々が大地の揺れにしたがいざわりざわりと葉を揺らし、女童の顔に木漏れ日を落とす。
（え、緑……？）
光を受けた女童の瞳は、黒ではなく深い緑色だった。あこは江戸で異人を見たことがあるが、このような色合いを見るのははじめてだ。
山が鳴動するかのように地揺れはさらに強さを増し、女童はふたたび天を仰いで表情を険しくすると、袖を翻して茂みの奥に姿を消した。
「ちょっと待って！　道はこっちよ!?」
しかし女童が戻る気配はない。あこは小袖の裾を押さえると土手を駆け上がった。
姫さま!?　と叫ぶかやの声を尻目に、あこは茂みに分け入る。だが左右を見渡しても草木がざわめくばかりで女童の姿は見あたらない。
「どこに行ったのかしら……」

大樹の枝がざわざわと揺れ、つづいて訪れた旋風にあこは髪を押さえる。その瞬間、頭上で閃光と轟音がはじけた。

「きゃあああっ!!」

思わずその場にしゃがみこんで、耳をふさぐ。

(なんでいきなり雷!? 山の天気っていつもこうなの!? いやいやいやぁ!!)

あこは強く目を閉じてぶんぶんと首を振る。しかし、しばらく時がたっておそる目を開けると、頭上からかやがのぞきこんでいた。——どうやら落雷は一度だけだったらしい。

「姫さま、大丈夫ですかぁ?」

「え? ええ、大丈夫よ。地鳴りも収まったみたいだし」

あこは失態などなかったかのように平然と立ちあがる。しかし「そうですね。収まってよかったですね。姫さま、雷がお嫌いですから」とさっくり指摘されてしまった。

「そ、そういえばさっきの子はどうしたのかしら。見かけなかった?」

「かやが来たときにはもういなかったですよ。あんな恰好で奥に行ったと思えないですけど……あの、姫さま、なんかおかしくないですかぁ?」

「なにかって?」

「いやぁな感じがしません……?」

かやはあこの袖口をつかんで周囲を見渡す。かやの気弱な声に、あこの血の気がひいた。

かやはなにかと勘が鋭く、嫌な予感は結構当たる。佐和山とくれば戦にまつわる怪談の類は

尽きないし、現にこの婚礼も祟られているとの噂つきだ。
（さっきの娘も、まさか狐とか妖とか……？）
目の色といい顔立ちといい、普通の娘には見えなかった。先の戦で命を落とした武家の娘の幽霊か、それとも狐か。子どもの妖といえば座敷わらしかもしれない。
（そんなにこの婚礼を邪魔したいわけ!?）
物の怪だか祟りだか知らないが、天災をおこしてまで歓迎してくれるなんて上等だ。
「きっと奥に獣道でもあるんでしょ。気にすることはないわ」
そうですかぁ？　とかやは半信半疑だったが、
「考えてもしかたないわ。そろそろ戻りましょ」
あこがふり返ると、そこにはちゃんと先ほどの街道があった。狐は人をさらうと聞くが無事だったようだ。思わず駆けのぼってしまった土手は思ったより高さがあった。雨で足元が悪くなっているし、さてどうして下りたものか。そう思案していると、かやが声を上げた。
「姫さま、あれを！」
かやの興奮した声につられて指さす先を見やると、木々の合間からさざなみが見えた。
（うわ……）
街道の向こう、山道が開けた先には光が広がっていた。波が陽光を撥ね返して輝いている。
隣でかやが「おおきいですねぇ」と感歎の息を漏らした。
「もしかしてあれが琵琶湖？」

古は淡海とも記された近江の湖は海のように広く、白く霞む視界の果てまでつづいていた。
「もっと近くで見たいわ。寄っていけないかしら？」
江州の名の元にもなっている琵琶湖は、佐和山のすぐ近くだと聞いている。
「みんな見たいに違いありません！　ぜひ寄っていきましょう！」
ふたりはおたがい手を取って土手を下り、一行へと戻ってゆく。
――誰もいなくなった土手の上では、やわらかな若葉がさやさやと揺れていた。

「やっぱり気持ちいいわねー」
あこは湖岸の砂浜に降りたつと、空を仰ぎ、湖面をわたる風に結わえた髪を遊ばせた。
鬱蒼とした山道がつづいたせいか、湖の上に広がる青空はまた格別だ。
「このままお屋敷まで歩いて行きたいくらいだわ」
「まぁ、大名家の姫が徒で訪いするなど！」
すかさずしのの小言が飛んでくる。琵琶湖へ寄ると告げたときも、真っ先に反対したのはしのだった。説得の末にしぶしぶ認めたものの、それからの道中、小言つづきだ。
「このようなお姿を、御家の方に見られでもしたら――」
「いい笑いものですわ、でしょ？　わかってるわよ。だからあまり近づかないようにしている

じゃない。それにしてもすごい数の工人ね。新しいお城でも建てるのかしら？」

湖岸線の先、琵琶湖に突き出す形にそびえる山の裾野は、工事の者たちでごった返していた。先ほどの地震でくずれ落ちたのか、砂浜には丸太のままの材木が転がっている。積み上げ直す者、二人がかりでのこをひく者、かんなを滑らせる者など、工人は千人を下らない。さらには彼らに水や間食をふるまうために女が立ち働いている。

（たしかにこんな状況なら、ワラビを取ってるヒマなんてなさそうね）

遠目に眺めていると浜から強い風が吹きぬけ、あこはあわてて髪を押さえた。

「やはり山国は冷えこみますわね。お風邪でも召されたら一大事、駕籠にお戻りくださいませ」

言われてみれば朝に宿を出たときより風が冷たい。山をひとつ越えたせいかもしれない。

「大丈夫よ。歩いているうちに身体も温まるでしょうし、もうすこし見ていきたいわ」

「またそのようなことを。ご到着が遅くなれば先方も気をもまれましょうに……あら？」

しのの目線につられて工人たちを見やると、ざわめきを割って駆ける音が聞こえた。

栗毛の馬が四頭ばかり、松原を駆けてくる。

（良駿だわ。木曾馬かしら）

工人たちは手を止めて、馬の行く手を遮ることのないよう道をあけて砂浜の上に跪く。

どこに行くのかと見ていると騎馬はこちらに向かってきて、あこたちの前で手綱をひいた。

「何者っ!?」

先頭にいた青年が馬上から誰何する。身なりからして狼藉者ではない。武家の子弟だ。

しのはあこをかばうように一歩前に出た。身分を証すことは容易い。だが多くの工人が見ている中で生家の名を出せば、彼らの面目をつぶすことになる。

（どうすればいいのかしら……）

あこは馬上の四人に目を走らせると、後方にいた浅葱色の小袖姿の青年が留まった。

四人はいずれも若く、年は二十に達していない。だが、後方にいた青年のぴんと伸びた背筋、そして落ち着きはらった眼差しは、四人のなかでもきわ立って見えた。

首筋がすっきりと、鼻梁もとおっている。三河武士とは大ちがいだ。

（あの人が、一番身分が高そうだわ）

扇を取り出して、口元を隠して流し目で訴える――などという方法が取れればいいのだが、あこは適任とは言いがたい。

（お願い、気づいて～!!）

祈るような眼力が通じたのか、青年はあこを見やった。見下ろす視線に驕った様子はない。ただ目で何事かと静かに問いかける。そしてあこの後ろの駕籠に気づくと、すぐさま下馬した。

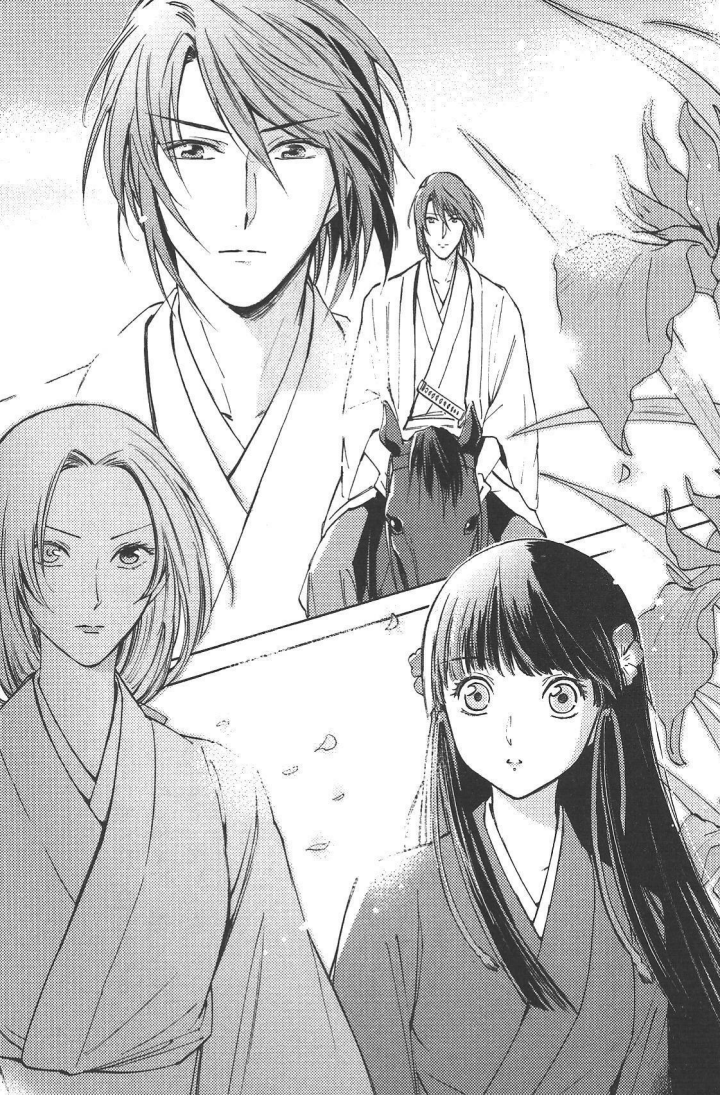
「采女さま？」

誰何した青年がふりかえる。

「控えよ。――鳥居家の姫とは知らず、ご無礼いたしました」

采女と呼ばれた青年に命じられ、三人は次々に馬を下り、砂地に片膝をつく。

――竹に宿り雀の紋。陸奥磐城平十万石、鳥居家の家紋だ。



輿入れの女駕籠とは違い黒漆塗りだったが、青年が見誤ることはなかった。

青年は過分におそれ入るでもない。かといって無礼でもなく、他家の者に接し慣れている。家人の中でも身分ある者なのだろう。しのが袖口で口元を隠して「しのびゆえ」と漏らすと、青年は残りの三人に場を収めてくるように告げ、三人は一礼して駆けもどっていった。

「そなたは？」

青年はしのの誰何に気を害した様子もなく、淡々と答える。

「井伊家家臣、井伊采女直重と申します」

「井伊？」

江州にいる井伊家の男は、先代の嫡子である当主だけだ。ほかに井伊姓に連なる者はいない。

「実父は家老鈴木石見守にございますが、泰安様……先代様に御目をかけていただきまして」

近親の縁もあり猶子になったと青年は告げた。清涼泰安大居士というのは直政の法名だ。

「そのような話、聞いておりませんわ」

しのの物言いには険があったが、采女はやわらかな微笑を返した。

「内々の話ですから、ご存じないのも無理もありません」

（うわー……）

最初に目に留めたときから美形だとは思っていた。さきほどまではこちらの身分を知らずにいたために瞳に鋭さもあったが、今の一点の翳りもない微笑にはしのも言葉をなくした。

（しのまで黙らせるなんて！）

しのに想いを寄せる者は鳥居家家人に大勢いた。それらの求婚すべてを一刀両断にしてきたしのをひるませる笑顔。井伊采女直重、おそるべしだ。

「このあたりは普請の人出が多うございます。物騒ですので屋敷までお供いたしましょう」

采女はあこに視線を向けて告げた。

あこも侍女ふたりも小袖姿、ごく普通の武家の女の旅装束だ。色や柄こそちがうが、布や染めの質に大差はない。三人のなかで一番姫らしいのは、あこではなくしのだろう。しかも普通は大名家の姫が徒とは思うまい。だが采女が見誤ることはなかった。

（立ち位置でわかったのかしら。それともしのの動きから？）

自分に一番気品があったからなどと自惚れてはいない。そのくらいの自覚はある。家紋から鳥居家の一行と見抜いたことといい、あなどれない人だ。

いかがいたしますかと視線を向けるしのに、あこはひとつ頷いた。

「ぜひお願いするわ」

途中、城下で小休憩をとり、あこは小袖を着がえ、打掛を羽織った。表向きはただの訪問だが、旅装束のまま許婚の家を訪れるわけにはいかない。

佐和山を登り、駕籠が下ろされたときには午時をすぎていた。輿入れであれば奥座敷まで駕籠で入るのだが、訪問という形を取っているので駕籠は屋敷の門前で開かれた。

「御足元にお気をつけください」と、しのに手を取ってもらって駕籠から降りる。——が。

（え？）

あこの目の前にあったのは壁だった。山から見えた屋敷の白壁ではない。茶色の格子模様だ。

（なんでこんなところにカベ？）

壁をなぞるように視線をあげると、自分を見おろす双眸と目が合った。

（人!?）

カベ、もとい巨漢が口を開くと人の好い笑みがこぼれる。男はその場に片膝をついた。

「ようこそお越しくだされた。某は木俣清左衛門と申す」

木俣清左衛門守勝。許婚の守役だ。元は徳川家の直臣で、直政が若いころに目付役につけられたと聞く。今も家康の信頼厚い能臣と聞いていたが。

（熊よ熊！　どう見ても熊！）

年の頃は五十ばかり、髪質が固いらしく髷の先はぴんぴんと撥ねている。上げた面には立派な髭をたくわえているが、ひいき目にみても長髪と無精髭の境目といったところだ。

守勝が立ち上がると、あこの背丈は胸元にもおよばなかった。体格も手伝ってますます熊に見える。だがその瞳に熊のような鋭い眼光はなく、あっけらかんとした人柄が表れていた。

「おお、采女か。知らせてくれて助かったぞ」

守勝は、駕籠に付き従っていた采女に声をかける。

「偶然、道中ご一緒になりまして」

「左様か左様か」と鷹揚に頷くと守勝は腰をかがめ、「ささ」とあこを奥へと誘った。

守勝が先導すると、床板がみしみしと悲鳴をあげた。先に采女を見たためか、守勝の恰幅のよさが目につく。上背があるためさほど太く見えないが、骨の太さは三河武士と張るだろう。

（まぁたしかに、みんなが采女殿みたいなわけないわよね……やっぱり許婚はタヌキかしら）

婚礼は家同士で決め、相手の顔も知らぬまま嫁ぐのが普通だ。期待していたわけではないものの、あこは甘い期待をため息とともに吐きだした。

守勝に「こちらでお待ちくだされ」と通されたのは、中庭に面した部屋だった。

庭に花はないが、通り雨があったらしく草木が瑞々しく輝いている。なかでも目をひいたのは芍薬だ。江戸屋敷を出立する前、開きかけた花を見届けられなかったのが心残りだったのだが、ここではまだ蕾すらない。山は冬が長いと聞いている。たしかに心なしか肌寒い。

「では某は右近殿をお呼びしてまいりますゆえ」

守勝が辞すと、あこは采女と部屋に残された。しのとかやは荷物の手配で側を離れている。

ちょうどいい機会だと、あこはなな前にひかえる采女に向きなおった。

「采女殿、さっきはありがとう。おかげで助かったわ」

「いえ、こちらこそご無礼を。琵琶湖に寄っておられるとは考えがおよびませず」

「わたしが見たいとわがままを言ったの。あまりに綺麗だったから、つい」

すると采女は、やわらかな笑みを浮かべた。

「お気に召していただけて、なによりです」

（あー、やっぱりこの人、美形だわ）

元々の顔のつくりもあるが、穏やかな人柄がにじみでている。声も落ちついており、名家の一門だというのにおどろくほど腰が低い。

「直政さまのご猶子とおっしゃったわよね。ということは殿の義兄上にあたられるのかしら」

「いえ、めっそうもございません。先代さまより右近さまを補佐申しあげるように仰せつかり、まことに僭越ながら御家の名をいただきました」

「右近さま？　そういえば木俣殿も右近殿をお呼びしてくるって……」

たしか許婚は右近大夫の職を賜っているが、世間的には仮名を用いるのが通例だ。先代の直政も侍従職を賜っても兵部少輔で通した。家督と共に仮名も継いでいるものと思っていたが。

「そのことでしたら右近さまが、兵部では先代とまぎらわしかろうとおっしゃいまして」

「その呼び名を断ったってわけ？」

「ええ。三回忌を終えたとはいえ、やはりいまだに先代の影響は大きゅうございますので」

跡を継ぐということは先代のすべてを受け継ぐということ、それを呼び名ひとつに気づかいを見せるとは、気苦労が多いようだ。佐和山十八万石、しかも治国に長けたという石田治部の後任だ。元服したての子どもが差配できる地ではない。政は重臣がしきっているのだろう。

「重臣の方々は、やはり先代さまから？」

「ええ。評定の中心は、木俣さまをはじめ我が父鈴木石見、中野さま、川手さま、目付役の椋原さまなど、みな年は木俣さまとそう変わりません」

「そう。采女殿のように年の近い方がいてくれてよかったわ」

采女は二十才前といったところ、老臣が舵取りをしている中で采女はよい話し相手だろう。恐縮ですと采女が頭を下げる。そのとき遠くから守勝の声が聞こえた。

「殿ー、いずこにおわしまするかー」

「どうしたのかしら？」

あこが廊下に出てみると、守勝の姿はないが巨体から発せられた声が屋敷中に響いている。

私が見てまいりましょう、と采女が廊下に出たそのとき、庭から声がした。

「――騒々しい。何事だ」

少年の細さが残る声、しかし年に似合わぬ落ち着きがあった。

庭に視線を落とすと芍薬のかたわらに人影があった。わずかに着くずれた白の衣、細身の肩から流れ落ちる艶やかな黒髪。顔立ちは幼さが残るが、落ち着きはらった瞳が年を曖昧にする。

（この感じ、どこかで見たおぼえが……）

細い面に白い肌、切れ長の瞳。部分ごとに目が留まり、全体を捉えようにもはっきりしない。幽霊かと思うほど立ち姿に現実味がない。風が吹けば、幻のように消えてしまいそうだ。

（幻……そう、あの女の子だわ）

衣をひるがえし、茂みの奥へと忽然と消えてしまった女童。人間離れした美しさとまとう清浄な気が女童とよく似ていた。だが衣からのぞく精悍な首筋は、細いといえどもあきらかに男性のものだ。背丈も女童よりは高いし、年はあことそう変わらない。

（座敷わらし兄、とか？）

そのとき少年の胸元で、なにかがうごめいた。
白の衣にまぎれて気づかなかったが、少年は猫を抱いていた。白一色の猫は長い尾を優美にくねらせながら、翡翠の瞳であこをじっと見つめている。
（この色、どこかで……）
「右近さま」
（……へ？）
采女の声に、あこは我が耳を疑った。
（右近さま、って……この人が？）
許婚――井伊右近大夫直継。
采女に言われてはじめて、あこはこの存在が幻ではなく本物の「人」なのだと気がついた。
（え……えっ、え――!?）
知らずその場にへたりこんだあこは、目を見開いてまじまじと観察した。
まず目が留まったのは、目線の高さにあった腹だ。寝衣はすとんと落ちて引っかかっていない。白の衣は寝衣の白小袖だとはじめて気がついた。もう午だというのに寝起きらしく、髪は結わえていなかった。身体の線はすっきりと、首は細く、二重あごでもない。無論、丸い耳もなければふさふさの尻尾もない。
（これが大御所さまの孫!?　うそでしょ!?）
タヌキの想像図が、がらがらと音をたててくずれ落ちてゆく。

（タヌキがキツネに化けた!?）

いえいえキツネが化けてタヌキになるのかしら、いや、見た目が人なんだからキツネが化けた姿で、タヌキはいったいどこに!?

（ていうか、わたしより綺麗なんじゃないのその肌!!）

本当に許婚ならば年はあことおなじ十六才、男でも吹き出ものがでる年頃だ。だがその肌は、極上の絹のようになめらかだ。

「……何奴」

直継は目を眇め、観察をつづけるあこを見つめた。采女は廊下に膝をついて頭を下げ、あこもあわてて居ずまいをただして手をつく。

「こちらは鳥居左京亮さまの姫君にございます」

「鳥居？」

なぜ鳥居家の姫がという口ぶりだった。しかし、ややあってから、思い出したかのように「ああ、そのような話もあったか」と付けくわえた。

（……なにそれ）

「延期になったと聞いていたが、また予定が変わったのか」

言いながら、直継は白猫の背のうえで、細い指を優艶にすべらせる。表情には出さないものの、またの一言に嘲笑の響きを感じたのは気のせいだろうか。

（どっちの家の都合で延期になったと思ってるのよっ）

「これ以上の延期は外聞があろうと、姫がお先にいらっしゃった由にございます」
「外聞か。いまさら気にしたものでもなかろうに」
すでに延期は三回め、外聞の悪さは隠しようもないから耐え忍べということか。
(それもあなたの家の都合でしょうが!!)
「采女、そなたは聞いていたか？」
直継の問いに采女は無言だった。鳥居家からは文が行っていたし、醒井宿から使いも出した。井伊家からの返書もあったはずなのに、なぜふたりに伝わっていないのだろう。
(けれど、到着を知ってて寝坊されたよりはマシかしらね)
考え直したところで状況はなにも好転していないのだが、あこは無理やり自分を納得させる。
「こちらも上洛や築城でごたついているからな」と直継はため息をつき、あこに向きなおった。
「そなた……」
言いかけたところで直継の言葉が止まった。姿恰好は気だるげだが、視線が鋭さを増す。心の奥までも射貫くような視線に、あこの心臓が跳ねた。
(え、なんなの？　あ……瞳が……)
あこの中のなにかを見据えようとする瞳。それは静謐の森の奥にひっそりとある湖のような、深い緑色だった。
(この色、どこかで……)
「……そなた、今すぐ山を下りよ」

「え……え!?」
直継の瞳に見入るあまり、あこは一瞬、言葉を取りそこねた。
「どうして!?」
「理由が必要か？」
「あ、あたり前じゃない！　はるばる江戸から来たっていうのに、はいそうですかって簡単に納得するわけには――……」
その言葉は尻すぼみに消えた。直継が縁側に近づいてきたためだ。
（な、なになになに……!?）
直継は廊下に腰を下ろすと猫をはなし、身体をひねるようにしてあこに向き合った。あこは反射的にあとずさる。触れるか触れないか――寝衣をとおして熱が伝わってきそうな距離だ。鼓動が高鳴り、あまりの緊張感に身体が逃げだしそうになる。
（なんなのよこの状況は～～!!）
直継は猫を撫でていたのとおなじ優雅さであこの頬に触れる。その指先からなにかが入り込んだかのように、体の奥にぴりとしびれが走った。
（え、いまのは……？）
直継はもう一方の頬に唇を寄せたが、ささやかれたのは色めいたこととは無縁の言葉だった。
「――佐和山は鬼の棲処ぞ。今ならまだ間に合う。心まで惑わされぬうちに山を下りよ」

直継は庭を後にし、事情の飲みこめないあこは呆けたままその場に取り残された。

（鬼って……なに？）

鬼――人の形を取りながら人ならぬ者、異形の者、幽霊や怨霊の類を鬼と呼ぶ。また、異国の者など、見慣れぬ外見を持つ者を鬼と呼ぶこともある。江戸で見た異人は鼻が高かったり赤ら顔をしていたり身の丈が異様に大きかったりと、これが鬼かと思ったものだ。しかし。

（そういう意味なら右近殿のほうがよっぽど鬼っぽいじゃない！）

目鼻立ちが整いすぎていることを除けば、直継の顔立ちはこの国のものだ。瞳もかすかに緑がかっているだけで、ほぼ黒に近い。

（けれどあの顔！　あの肌！　あの首筋……!!　あ～～もうっ！）

さきほどは心の準備が追いつかず、頭も身体も硬直して身動きひとつとれなかった。が、五官はしっかり働いて、直継の様子をはっきりと捉えていた。

目や鼻梁や首筋など見たものは細部まで、ささやかれた言葉は鼓膜をくすぐる声質まで、寝衣に薫き染められた香りまであこの頭はちゃっかり記憶していて、思い返すだけで暴れそうだ。

（なんであの状況でちゃんと覚えてるの!?）

あのような顔は絵師が腕をふるった襖絵にも見たことがない。眼福も度を超すと毒だ。

（でもあれは絶対、無意識よね……）

直継は見られることにあまりに無関心だった。あこが自分を見てどう思ったかなど、かけらも関心を持っていない。直継は外見が武器になるなど考えたこともないのだろう。補佐役の采女はあれほど人当たりがいいのだから、感化されてもおかしくないだろうに。

（たしかにあの顔で笑顔を振りまいたら卒倒する人が出そうだけど。そういえば直政さまも）

直政の当世具足は赤一色、染めの赤か敵の血か見分けがつかないほどの勇猛な戦ぶりから「赤鬼」の異名を馳せていた。だがその実、赤の胄で隠した面は相当な美男子だったと聞いている。その手の趣味がなかった家康との関係まで噂されたほどだ。

（これが貴種ってものなのかしらねー）

家格のちがいは覚悟してきたが、許婚が神がかった美形だとは予想していなかった。采女が近親だという時点で察するべきだった。

ふりかえると采女は無言で背後に控えていた。采女の面も涼やかだが、まだ人の範疇だ。（器量は良さも悪さも三日で慣れるというけれど、毎日あの顔を眺めていたらそのうち鏡で自分の顔を見られなくなったりして……）

笑えない現実にため息をつくと、采女は「なにか？」と問うた。

「采女殿は、鬼って知ってる？」

その言葉が出た瞬間、采女の目がすっと細められた。

「あ、突拍子もない話でごめんなさい。でもさっき、右近殿がそうおっしゃったから」

「――右近さまが、なにか」
さきほども采女はすぐ側に控えていたが、直継のささやきは聞こえていなかったらしい。
「佐和山は鬼の棲処だっておっしゃったわ。今ならまだ間に合うとかなんとか……」
そうですかと答える采女の声音は沈んでいる。なにかを知っていることはあきらかだった。
「聞かせてもらってもいいかしら」
「姫は山に住まわれたことは？」
「いいえ、ないわ」
江戸は高台や丘、谷などの高低差はあるがこれといった山はない。
昔の江戸は神田山という山だったが、均してその土で中洲を埋めたため、おおむね平らだ。
しいていうなら、天気の良い日にはるか遠くに富士が見えるくらいだ。祖父の領地の矢作には山があったが、何度か足をはこんだ程度で住んだことはない。
「山には僧もおりますが、狩りで暮らす山の民もおります。所によっては風葬の慣わしもあり、山は霊地であるとともに死の穢れのある地でもあります。そのことはご理解いただけますか」
あこは中山道の道すがら、手を合わせた寺社や神木を思い出し、「ええ、まぁ」と答えた。
「山は神と接する場所、命の始まりと終わりをつなぐ場所と信じられております。生の地であるとともに死の地、生死が渾然一体となり、生者と死者の境目が曖昧な場所です。佐和山では先の戦で多くの命が失われました。魂や魄、念や怨など、この地はかつてないほど混沌としております。今まで姫が目にされたことのないものを見かけるやもしれません。しかるべき方策

はこちらで模索しますので、その間、それらに相対しても平静であるようお心がけください」
「もの？　ものっていったい……」
その言葉のつづきはあわただしい足音に遮られた。
見やると年若い侍女が転がるように駆け寄ってきて、落ちつきなく手をつく。采女が眉をひそめて「何事ですか」と問うと、侍女は恐縮のあまり身を縮こませた。
「お話し中に申しわけございませぬ。あ、あの、東梅院さまがこちらに……」
（東梅院さま？　って……ええっ!?）
東梅院――主君徳川家康の娘にして先代直政の正室、そして直継の生母だ。
采女にも予定外の訪れだったのだろう。采女は「恐れ入りますが……」とあこに部屋に入るようにうながしたが、こちらへやって来る足音は近く、あこはその場に手をついた。
衣擦れの音はあこの前で止まり、ふわりと都めいた香りが鼻腔をくすぐった。
「何者ぞ」
直継の生母ということは三十才は超えているはずだ。尋ねる声音は凛として、命じることに慣れたものだったが、ずいぶん年若くも感じた。
「陸奥磐城平城主、鳥居左京亮さまの姫君にございます」
采女の言葉につづいてあこが挨拶を言上しようとしたが、口を開きかけたところで止まった。
なにかが頭上をかすめて飛んでいった気がしたのだ。
無礼と知りつつ、あこはわずかに頭をあげて背後を探ると、廊下には扇子が落ちている。

（さっきから落ちていたかしら……？）

先ほどまでは塵ひとつ落ちていなかったはずだ。ということは誰かが落とした——もしくは。

はっと顔をあげると、尼僧があこを見下ろしていた。身の丈はおそらくあこより低い。尼装束を通してもわかる華奢な身体つきに、年のわりに幼い顔だち、髪は肩先で切りそろえられ、年若くして仏門に入ることになった境遇が痛々しかった。

「その方、いかようにして入り来やった!?」

「いかようにって……え、あの……」

尼僧に突然声を荒らげられ、あこはとまどった。

形のよい眉は吊りあがり、呼吸は乱れ、おおきく肩で息をくり返している。事情を聞いていなかったにしろ、客人に対して取る態度ではない。

——なにかおかしい。

そう思った次の瞬間には、東梅院は懐から錦の袋を取りだした。紐を解き、鞘を抜きはらう。

（懐剣!?）

「東梅院さま！」

割って入った声と床を蹴る音に、振りあげた刃が空で止まった。

采女はふたりの間に身を入れ、あこをかばうように両手を斜め下に広げる。

瞳はただ東梅院を見つめている。みずからの頭上にある刃は眼中にない。

「——東梅院さま、お納めください」

その声音は穏やかなものだったが、ぴんと張り詰め、揺らぎがない。
ふたりはしばし無言で見つめあい、そのままどれほどの時が流れたか。
ふつ、と糸が切れたように東梅院の視線がはずれ、支えをなくしたかのように身が傾いだ。
「東梅院さま!!」
あこは思わず声をたてたが、采女はあわてる様子もなく東梅院を抱きとめた。そして廊下に控えていた侍女に「床の用意を」と告げ、東梅院の身を抱きあげて連れてゆく。
あこが部屋に入って待っていると、采女はほどなく戻ってきた。
「あ、ありがとう、采女殿。おかげで助かったわ」
「いえ、私がいたりませず、申しわけございませぬ。お怪我などございませんか」
おかげさまで、と答えたものの、まだ動悸はおさまらない。
さきほどから心臓が酷使されどおしだ。当主は神がかった美形だわ、美声で鬼が出ると脅されるわ、扇子は投げられるわ懐剣は向けられるわ……
(この屋敷はいったいどうなっているわけ!?)
「采女殿、東梅院さまのお加減は?」
「今はお休みになっています。仏堂から出ていらっしゃるとは思い至りませず」
申しわけございません、と采女は頭を下げた。
「いいのよ、そんな。……でもわたし、なにかお気に障るようなことしたかしら」
遠まわしに東梅院の状況を探る。采女はすぐさま否定はせず、あこは東梅院が気の病である

ことを察した。こういうことは初めてではないのだろう。

「――采女、そなたがついていながらこれか」

ふ、と室内に溶けこむ声音。その声音は忘れようにも数年は忘れられそうにない。

(出たわね、歩く人外魔境!!)

あこが身構えるようにしてふり返ると、直継は寝衣ではなく、藍染めに小紋の小袖姿だった。髪は一分の乱れもなく結い上げている。武士の一般的な装いだが、その華は隠しようがない。舞手のような色あざやかな華ではなく、大輪の白い花――

(そう、芍薬だわ)

まだ咲いていなかった芍薬の花。もっぱら女に喩えられる花だが、直継の姿はそれに似ていた。芍薬の妖といわれたほうが納得できる。

(わ、わたしはただ芍薬に見惚れていただけよ。べつに右近殿のことなんか……!)

自分に言い訳をしてしまうくらい、目が惹きつけられていたこともまた事実だ。

「そなたらしくないな」

「采女殿は悪くないわ。東梅院さまが取り乱されて、采女殿はかばってくださったのよ」

「いつものことだ」

その言葉はあまりに自然にこぼれ、聞き逃すところだった。

(いつもって、どちらが?)

東梅院が取り乱すことか、それとも采女がかばうことか。気の病はさまざまで、時折なにか

が憑いたかのように取り乱す者もいれば、慢性的にそのような状態の者もいる。しかし東梅院は家康の養女として直政に嫁いだ。昔から病があったわけではないはずだ。

「采女の説明不足だ。ここにはものがいると聞かなかったか」

「お話ししてもらっている最中だったのよ。もの、ってなんなの？」

それが説明不足なのだと、直継はため息を漏らす。

（全部他人任せにしておいて、なによその態度！）

だが、怒りの炎はつづく直継の言葉に跡形もなく消え去った。

「ものといえば決まっているだろう。もののけだ」

（……もののけ？）

もののけ。モノノケ――物の怪。

「もの、物の怪っ!?　な、なにを、言って、右近殿……はは」

あこは笑って済まそうとしたが、直継の表情は緩まない。

「山地は元々、死者の還る場所だ。ものが出やすい。しかも先の戦では相当の死者が出たしな。いまもそこに」

あこは廊下に出て、直継が指さす方向を見やる。だが先ほど東梅院が立っていた廊下にはなにも見当たらない。

「……べつになにもないじゃない」
「見えないか」
そう呟くと、直継は右手の二指で空に字を書いた。
（光……？）
白い指の軌跡が鱗粉のように光を放つ。その光はやがて形をなし、あこの眼前を飛び去った。ぼっと音がたったのがその直後のこと。なにもなかったはずの場所に鳥の影が現れ、白の炎に包まれた。
大きさは烏ほどで羽は赤青緑の極彩色、胴と尾羽がながく、蛇のようにも見える。見まちがいでなければ鳥の顔は人面だ。それは猫の絶叫のような声をあげて、炎と共に消えた。
「い、いまのはなんなの……？」
「ものを浄化した。以津真天という」
（ひゃ……百鬼夜行……？）
「ものは人に憑く。動物や物にも憑くがな、人の惑う心に宿りやすい。小物であれば見えぬし、こうしてすぐに人から離れる。だが中には人に宿らずとも強い力を持つものもいる」
直継はそこで言葉を止め、あこを見つめる。あこは黒の瞳の奥に、緑の光を見た。
「今のそなたは存在が不安定だ。ものが好んで近づいてこよう。気をつけよ。母のようになりたくなければな」



直継が去ったあとも、あこはしばらく呆然とたたずんでいた。

（いまのは夢……？）

狐に化かされただけだ。そう思おうにも東梅院が刃を振りあげたことも、直継の指先から光が生じたことも、なにもない場所から炎が上がったことも、すべて現実だった。

「突然のことで驚かれたでしょう。大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

「お疲れでしょうから、今日のところはおやすみください。お部屋にご案内します」

先導する采女についてゆくものの、入り口からここまでやってきた道順すら忘れていた。先ほどの衝撃で記憶が飛んでしまったらしい。

（どうせなら右近殿の記憶を消したいわ……）

あの容姿も、あの声も、あの力も。なにからなにまで心臓に悪い。

ここに来てから不思議なことが起こりどおしだが、事の元凶はすべて直継のような気がする。

直継を見たとき、自分が異界に入りこんだ気がした——そう、狐に化かされたかのように。

あの外見は人の範疇じゃないと思っていたが、本当に普通の人間ではなかったらしい。

（ああ、五月だってのに桜まで咲いているわ）

廊下を折れた直後に、山桜に気がついた。江戸では三月半ばには散っている。いくら山国とはいえ、これは遅すぎる。

（これも幻かしら）

緩やかな風に、花びらが舞っている。あこが手を出してみると、そのうちのひとつが手のひらに落ちた。やわらかな重みがある。——本物だ。

「……采女殿、江州はずいぶん花が遅いのね」

「そうですか？　例年、二月から三月のこのあたりの時季ですが」

（このあたり？　だって今は）

芍薬に花がついていなかったことを思い出す。てっきり山の春は遅いのかと思っていたが。

（——まさか）

あこの足が止まる。逃げ出したい衝動に駆られる。けれど、どこへ行けばいい？　どこからずれてしまったのだろう。どこにいけば昨日までの日常があるのだろう。

「姫？　いかがなされました？」

「ねぇ、采女殿。今日は……何日？」

「お身体の調子でも……？」

よほど蒼い顔をしているのだろう。采女が心配そうにのぞきこんだが、「ほら、長旅だったから暦をわすれちゃって」とごまかした。

「左様にございますか。今日は二十日あまり七日ですね。二月の二十七日です」

——冷たい春風が、あこの頬をなでて駆け抜けていった。

第二章　慶長十年二月二十七日　モノノケ屋敷においでませ

（鬼……熊……狐……人外魔境……）

通された部屋に入るなり、あこは畳の上にくずれ落ちた。

佐和山にまつわる噂は聞いていた。この婚礼が祟られているという声もあった。しかし。

（婚家がモノノケ屋敷だなんて聞いてないわよ！）

亡霊だけならまだしも、もののけはいるわ、座敷わらしはいるわ、屋敷の主は狐狸妖怪だわ。

（しかもなんで二月なの!?）

吹きこむ風が肌寒いとは思っていた。山国だからではない。二月の春風だったからだ。

五月は初夏、梅雨があければ本格的な夏が始まるが、二月といえば冬の気配が梅の香りと共に去る頃だ。

（江州だけ月の流れがちがうとか？）

暦はいまも京の陰陽寮が司っているというが、宣命暦になって八百年、算出方法も世に出まわり、勝手に暦を作っている学者もいる。だがせいぜい閏月の入れ方を間違うくらいで一ヶ月以上は狂わない。それに江州から京まで馬を飛ばせば半日だ。間違いなどすぐに気づく。

（ああ、じゃあやっぱり狐……？）

狐が人を化かす話は聞いたことがある。山で迷って数日歩き回り、下山してみると下界では

何年も経っていたというのだ。逆に、何ヶ月もかかって下山したというのに、下界では一日も経っていなかったという話もある。

醒井宿を出たとき、たしかに五月だった。道中にワラビが生えていたのがその証拠だ。

（いつ化かされたのかしら）

思い返してみたものの、ここにきて以来、思い当たることが多すぎる。

（最初に肌寒さを感じたのは、琵琶湖の浜風だったかしら……いえ、ちがうわ）

背中に冷たいものを感じたのは中山道の山の中、女童を追いかけたあとだ。

（あのときの子ども!?）

狐はいきなり人間を化かすことはできない。化かせるのは、狐の領域に足を踏み入れたときで、前人の踏みしめた道を逸れてはならないと言われるのはそのためだ。

あのときあこは、女童を追って道から山に足を踏み入れた。あのとき——おそらく雷が鳴ったときに狐の罠にはまったのだ。雷は「神鳴り」ともいい、神の怒りと言われている。

（ま……まずいわ）

醒井宿を出たのが五月五日、今日が二月二十七日だとすると丸二ヶ月も隔たりがある。

今日の時点では井伊家に訪いの文は出されていない。井伊家にしてみればあこは予定外の客なのだから、迎えの準備がなされていないのも当然だ。

「ああもう！　どうしろっていうの!?」

あこは怒りに任せて、ばん、と手のひらを畳に叩きつけると、視界の端でなにかが動いた。

はっと視線を上げると、なにかがすばやく葛籠の陰に隠れる。
『小物であれば見えぬ』
(ばっちり見えてるんですけど!?)
『中には人に宿らずとも強い力を持つものもいる。気をつけよ』
(どうやって気をつけろっていうのよっ!)
まだ生身の獣なら対処のしようもある。だが、実体のないものを相手にどうしろと。
あこは、葛籠の端、畳の角、天井の隅、とすばやく目をはしらせる。すると、部屋の隅を流れるように駆けぬけていく影があった。
「あ……ねずみ、ね……」
それは握りこぶしほどの大きさのねずみだった。屋敷の中ではめずらしくはないが、あこの見知るものより幾分大きい。犬のように尖った牙が、栗鼠のように口から突き出ている。
(やっぱりあれもモノノケ……?)
はははは……と乾いた笑いがこぼれ、あこはがっくりうなだれた。
「もう! 右近殿のバカ!」
脅すだけ脅して、あとは知らぬとばかりに姿を消すなど、無責任にもほどがある。
(せめて出くわしたときの対処法くらい教えておいてよ!)
そのとき背後に気配がして、あこは反射的にふり向く。廊下にあったのは見慣れた顔だった。
「あら、あこさま。どうなさいましたの?」

「しの……よね？」
曖昧な問いかけに、しのは「はい？」と答えつつも怪訝な表情をみせる。
「どうかなさいましたの？」
「い、いえ、なんでもないわ」
（なに馬鹿なことを聞いてるの！）
なにが正しいのかわからないと、なにもかもがあやしく見えてくる。
「殿へのご挨拶はとどこおりなく？」
「え、ええ、まぁ」
あこは笑ってごまかした。あの状況がとどこおりなかったかどうかは、この際、無視だ。
「姫さま、ずいぶんお疲れのご様子ですねぇ？」
「そ、そんなことないわよ、かや」
かやに顔を覗きこまれ、目を逸らすのも不自然かとあこは笑顔でこたえたが、顔が引きつっていることは自分でもわかった。
「荷ほどきは終わったの？」
「一段落つきましたので小休憩に。右近さまはしっかりした方でよろしゅうございましたね」
「え？　お会いしたの!?」
（どっちの恰好のときに!?）
「ええ。先ほどお部屋に足をお運びくだされて、長旅を労ってくださいました」

しのの感想は好意的だ。着替えた後だったにちがいない。あこに対しては愛想のかけらもなかったが、直継の所作はどうやらしのの目に適ったようだ。

「性根を叩き直す必要はなさそうですね！」

「ま、まぁね」

正室腹の長男で、生まれながらの跡継ぎだ。甘く育てられているようなら性根を叩き直してやるわと江戸で豪語していた。だが、直継は年相応、いや年齢よりも大人に見えた。

（たしかにしっかりしているのよね）

人間ばなれしている直継に「年相応」ということ自体がおかしな気もするが、年長者の采女への臆せぬ態度やモノノケを前にしても動ぜぬ落ち着きようを見ても、普通の十六才ではない。

そのときあこが思い出したのは、剣術の師だった。剣の達人は往々にして心を鎮める術を会得していて、剣を向けて対峙していてもとらえどころがない。まるで幻か鏡を相手にしているかのように、自分の焦りばかりが見えてしまう。それとおなじ静けさを直継に感じた。

「それにしてもお綺麗な方ですね。采女さまにもびっくりしましたけれど、本当に大御所さまのお孫さまなんですかね？　実は狐に化かされてるなんてことも……」

しのが「これ、かや」と叱責する傍らで、あこは『狐』という一言に肝を冷やした。

「姫さまの御相手ということは私たちの主も同然、滅多なことを口にしてはいけません」

しのは采女の笑顔には不覚をとったが、見目にだまされる性質ではない。

（あー、その主が午まで寝ていたなんて知ったら、薙刀を持ち出すかもねー）

豊かな黒髪をひとつに束ね、袂を結んで薙刀を振るう姿はあこでも見とれる。姉さま一番のかやが絶賛するのも無理もない。腕もたしかで、いままで成敗された不埒者も多い。

（ほんと、右近殿のあの恰好が見られてなくてよかったわ……）

直継の小袖姿も見事だったが、気だるげな寝起きの様子のほうが本性だろう。

わずかに襟元が着くずれて、首筋から胸元にかけて白い肌が垣間見えて――

（いやぁっ！）

「あこさま、どうなされました!?」

突然頭を抱えて突っ伏したあこに、ふたりが駆けよる。

「な、なんでもないわ。ごめんなさい」

（どうしてそんなところまで覚えているわけ!?）

「でもお顔が赤いですよ？　お熱がないですか？　寒気とかしません？」

「大丈夫よ、かや。べつに寒くないから」

心臓ははげしく脈打ち、顔は火照って、逆に熱いくらいだ。

「そうですか？　かやはなんとなく肌寒いんですけど……」

「そういえば、まだ山桜が咲いていましたわ。さすが山国ですわね」

夜はさらに冷えこむかもしれませんわね、厚めの衣もお出ししましょうかと告げるしのに、あこは乾いた笑いを返すことしかできなかった。

（は、はは……いつまでごまかせるかしら……）

そのとき、廊下を横切る影があった。
（なになに!?　またモノノケ!?）
あこは思わずあとずさり、しのが「あこさま?」と問う。
「い、いまなにか、廊下を……！」
「廊下ですか?」
「かや、気をつけて！」
あこのただならぬ様子に首をかしげながらも、かやは廊下に顔を出す。
「あー、猫ですねー。ねずみ捕りをしてたみたいですよ」
（猫?　もう、びっくりさせないでよ）
「真っ白だなんてめずらしいですねぇ」
あこが廊下に出てみると、白猫は得意げに前足を舐めていた。おそらく直継が抱いていた白猫だ。翡翠の瞳に見おぼえがある。その足元には、餌食となったねずみが転がっていた。先ほど見たねずみだ。鋭い牙をむき出しにして、目を見開いたまま息絶えている。
「山のねずみってこんなに大きいんですか?　目つきも怖そうですし」
「近づいちゃダメ！」
鋭い声に「え?」とかやはふり返る。あこはつとめて平静に「穢れに触れないほうがいいから」とごまかした。
「ほらほら、猫もこっちにおいでー」

あこはその場でしゃがみ、手をひらひらと振って見せる。獲物をくわえて見せびらかしにきたらどうしようかとも思ったが、ねずみが息を吹きかえして猫に噛みつきでもしたら大変だ。

しかし白猫はちらっと一瞥しただけで無視し、悠然と前足を舐めつづけていた。

（なんか馬鹿にされているような……その態度、飼い主に似てない!?）

腹立たしさをおぼえて、足を踏み鳴らしてどかどかと近づいてみたが、白猫は逃げようともしない。優美なしぐさでふてぶてしいあたり、飼い主そっくりだ。

脇から両手をまわして抱き上げると、白猫は「うにゃっ!?」と鳴いた。

「散歩でもしてくるわ」

「なりません。他人様のお屋敷を散歩だなんて」

「お山を見てくるだけよ。気晴らしにちょっと、ね」

この屋敷にいると、どこにモノノケがいるかと気になってしかたない。

「なりません。お国元に到着のお文もしたためなければいけませんし」

「それは後でちゃんとやるわ！　代筆はしなくて大丈夫だから！」

文など出された日には、化かされたことが知れる。外部との接触はなるべく断たなければ。

「ではせめて、かやをお連れください」

「いえ、大丈夫よ。お屋敷の周りを見てくるだけだから」

「かやもお散歩に行きたいですー」と甘えた声を上げたが、

「すぐに戻るから、しのとかやは陽の出ているうちに荷解きをがんばって！　ね？」

侍女ふたりは不承不承といった体だったが、頭を下げてあこを送りだした。

あこは門を出ると、あらためて屋敷をふり返った。

愛宕屋敷は佐和山の中腹よりやや下にある。山を下りるには四半時とかからない位置だ。

十八万石の大名の屋敷はどれほどかと思っていたが、門構えは普通の武家屋敷と変わりない。部屋数は多いがそれは政庁を兼ねているからだ。居住の場としては鳥居家の江戸屋敷より狭い。

（まぁ、お城がないんじゃ仕方ないわよねぇ）

佐和山城は関ヶ原の合戦の後に炎上し、いまは跡形もない。おそらく琵琶湖の湖畔に造っていたのが新しい城だろう。ここは仮住まいとばかりに建て直す様子もなかった。

城の普請中のせいか、付近に人影はない。屋敷の門番すらいない。どうやら登山口を閉ざすことで山自体への立ち入りを禁じているらしい。そのような方策が取れるのも山城ならではだ。

あこは左右を見渡して、山道を登ることにした。夕刻までまだしばらくある。一本道のようだし、陽のあるうちに戻れば大丈夫だろう。

（うう、でもちょっと寒いかも）

二月に小袖一枚では心許ない。吹き抜ける山風にあこは首をすくめ、温石がわりとばかりに白猫を抱きしめた。山道の茂みに目をこらしてみたが、ワラビは見つからない。

「やっぱり二月じゃ生えてないわよねぇ……」

それどころか寒梅が咲いていた。これが見つかったときには『山国だから』などという言い訳が通用するだろうか。戻った時間はおよそ二ヶ月、勘が鋭ければ今晩の月を見上げただけでも異変に気づくかもしれない。

（そもそもここって、現実の世界なの？）

許婚がものを祓う力を持っているなどと聞いたことはない。直継も采女も、もしかしたらしのやかやまで、みな狐がなりすましているという可能性もある。

（それを疑いだしたらきりがないわね）

直継は整いすぎた造作の上に表情をのぞかせない。狐と言われたほうがまだ納得できる。だが化かしている立場なら、『山を下りよ』とは言わないだろう。

（じゃあ、あの右近殿は本当の許婚なの？）

化かされたのが時間だけだとすれば、あこはちゃんと目的地に着いている。二ヶ月程度なら化かされたままでも不自由はない。

二月といえば、三度めの婚儀の延期が決まったころだ。またかと家中に嫌な空気がながれ、あこは毎日気晴らしに江戸の町に足を運んだ。「大名家の姫のなさることではございません！」としのに叱られていたのもいい思い出――と考えたところで、あこはたと気がついた。

（え、いまが二月ってことは江戸にもわたしがいるの？　わたしが二人いるってこと？）

現状、自分はこの世界にいても不自由はない。だが、江戸にいる自分が江州に来たらどうな

るか。おなじ顔、おなじ名前の、自分がふたり――

（それってわたしがキツネにされちゃうんじゃないの!?）

どちらが本物かという話ではない。どちらも本物だ。仮にふたりが顔を合わせたとき、一方が狐の化けた姿、もう一方が嫁とされたとしても、人々は噂するに違いない。やはりあの婚儀は祟られていたのか、嫁御に狐が憑いていたにちがいない、と。

「ま、まずいわ……」

『ゆめゆめ御家の名を貶めるようなことのなきよう、お気をつけくださいませ』

しのが口酸っぱく言っていたように、武家にとって名を汚されることはもっとも恥ずべきことだ。いわれなく貶めれば、その場で斬り捨てることも許されている。三度の延期で、ただでさえこの婚礼にはよからぬ噂が立っているのだ。狐憑きの噂は両家の名に障る。

だがあこに狐が憑いていたとなれば、あこを斬れば家の名は保たれる。そして一族の別の娘を嫁に迎えれば、鳥居家との縁談をという直政の遺命に背くこともない。命より名を重んじるのが武家社会だ。しかも娘ひとりの命で事が収まるなら、実家のほうから申し出かねない。

（両家同意の上で斬られるってこと――？）

あこはようやく事の重大さに気がついた。自分がふたりいると知られる前に、なにがなんでも狐のまやかしを解いて、元の世界に帰らなければならない。

（えっとえっと、狐に化かされたときは油揚げを供えるのだったかしら!?　それともキュウリ!?　尻こだま!?）

それは河童だ。

あわてて解決策を考えはじめたが、ろくに頭が回らない。とにもかくにもモノノケ屋敷から逃げることが先決かと思ったが、はたと昔話を思い出した。

狐に化かされたことに気づいた樵は、その場から逃げ出したものの、どれだけ走っても山を下りられない。村の人間がおなじ切り株のまわりをぐるぐる回っている樵に気がついて、声をかけてやっと狐から解放されたという話だ。その話に従えば、狐の術中にある自分は江州から出られない。仮に出られたとしても江戸にはもうひとりの自分がいる——八方ふさがりだ。

（じゃあどうしろっていうのよ!?）

「なんなのよこのモノノケ屋敷は〜っ!!」

あこが青空に向かって叫ぶと、胸元の白猫が驚いたように身じろぎした。

せっかくの晴れ間に喜んでいたというのに、ここに来て以来おかしなことばかりだ。

（そういえば、こんなに晴れているのに通り雨があったって……）

あこが城下で打掛に着替えている合間だったらしいが、

（晴れ間に雨が降るのってたしか……）

——狐の嫁入り。

あこはがっくりと肩を落とした。そこまでお膳立てされてはもう逃げられない。

「だれが狐よ!?　たしかに嫁だけど狐じゃないわよ！　モノノケ屋敷はそっちでしょうが！」

しかしその答えは意外と近くから返ってきた。

「モノノケ屋敷がイヤなら、とっとと出ていきなさいな」
きょろきょろと見回すが人影はない。子どもの声がしたような気がしたのだが――
(ああ、また幻聴かしら)
「どこ見てるのよ。察しが悪いわね」
「あっ……」
あこの胸元から白猫が逃れて飛び出す。くるりと一回転すると白猫は人へと姿を変えた。
年は十ばかりの女童だ。背丈はあこの肩より低く、胸元で切りそろえた髪を色紐で結わえている。面は色白だが、唇には健康的に血がかよっている。整いすぎた容姿が誰かと似ていた。
(この子、どこかで見たことが――)
「あ～っ!!　あのときの座敷わらし!」
「人聞きの悪いこと言わないで。だれが座敷わらしよ」
「子どもの妖は座敷わらしって相場が決まってるでしょ!」
「どこの相場よ。江戸の相場なんて知ったことじゃないわ」
女童は、相手にしていられないとばかりに、すべらかな髪をはらった。見た目は十才でも、その仕種は腹立たしいくらいに女だ。
「あなたがキツネの正体ね!?　わたしを化かしてどうする気!?」
「人のせいにしないでくれる?　勝手に乗りこんできたのは誰よ」
「勝手にって、ここは井伊家のご領地でしょ?」

「そう、主さまの領地よ。呼ばれてもいないのにくるんじゃないわよ、この押しかけ女房」
「押しかけ女房ですってぇ……？」
その一言に、あこの中のなにかが切れた。
「ご公儀公認の許嫁になんて言いぐさ!?　あなたこそ何様よ！　化け猫の分際で！」
「失礼な子ね。年長者への礼儀ってものを学んで出なおしてきなさいな」
「年長者ってどれだけ生きた猫又だか知らないけれど、今のあなたはどう見ても十才児よ十才児！　右近殿はただでさえバケモノじみてるんだから輪をかけないでくれる!?」
「主さまに向かってバケモノってなに。あんたみたいな下郎に主さまのなにがわかるのよ」
「これからわかるために来たのよわたしは！　元の世界に返しなさいよ！」
あこの剣幕に、話にならないわねとばかりに女童は鼻を鳴らし、そっぽを向く。
（なによこの子〜〜！）
あこは頭に血が上り、女童を捕まえようとした。が、伸ばした腕はするりと空をつかむ。
（えっ、かわされた……？）
あこは袖を押さえてふたたび手を伸ばす。だが女童は、ひらり、ひらりと風に舞う木の葉のようにかわした。あこが唖然としていると、女童の艶やかな唇が笑みを形作った。
「ふふん、くやしかったら捕まえてみなさいな」
（この……っ）
あこは両手を広げて抱きすくめるように捕まえようとしたが、

「えっ、うわ、わ……っ！」

女童は突如姿を消した。両手は空を切り、あこは勢いあまって青草が茂る土手につっこんだ。

「いったたた……」

背後からくすくすと笑い声が聞こえる。

「あーら、もう終わり？　わたしが狐だというなら、さしずめあなたは猪ね」

（も～この化け猫っ！）

あこは身を起こして手に付いた土を払い、そっぽを向いて山頂に向かって歩きだした。女童はすこし距離を置いてあこの後を付いてくる。あこが足を止めれば女童も止め、また歩き出せば女童もついてくるといった按配だ。分かれ道でわざとらしく方向を変えてみたりしたが、女童がはなれる様子はない。

（やっぱりね）

狐は人を化かしっぱなしにはしない。化かす狐にもなんらかの理由があるのだ。

（わたしになにかしてほしいことでもあるのかしら）

だがここで、なにが目的なの？　などと親切に聞いてみるつもりはない。土手に突っ込んだときについた手は、草木をひっかけて皮膚が裂け、いまだにひりひりと痛んでいる。

（頼みたいことがあるなら自分から言いなさいな）

あこはぴたりと足を止め、背後の女童に向きなおった。

「どうしてついてくるのよ。わたしひとりで行くわ」

「わたしだって、主さまの頼みでなければ、だれが好きこのんで付いていくものですか」
（主さま？　主さまって右近殿よね。あの人、猫とも話ができるわけ？）
突拍子もない想像だが、直継ならば普通の猫相手にも淡々と語りかけていそうだ。しかし許婚のことを他の女の口から聞くのは癪だ。あこは足を返し、歩みを進めた。
いつしか陽が傾いたと思ったら、あたりは急に薄暗くなった。道の周囲は木ばかりで、頭上から射さなければ光は届かない。
（あーもうっ、ここどこ!?）
化け猫をふり切ろうとして、考えもせずに道を曲がったのがいけなかったらしい。
愛宕屋敷のまわりをぐるりと回って戻ってくるはずだったが、周囲は暗くなる一方だ。
「ねぇ、いいかげん迷ったことを認めたら？」
無言でついてきた女童は、勝ち誇ったかのように声をかける。ついてきていることは朽ち葉を踏む音で気づいていた。だがおなじ距離を置いているなら、ふり返ってももう表情は見えないだろう。黄昏時は逢う魔が時ともいう。山に足を踏み入れたくない時間帯だ。
（でも、こっちには猫又が憑いているんだもの。これ以上、怖いものなんてないわよ）
あたりを見渡すと、木陰に屋敷の灯が見えた。ほっと肩をなでおろす。思ったより屋敷の近くに戻ってきていたようだ。しかし見覚えのある門構えではない。茂みのむこうは小高い丘になっているのか、屋敷は見上げる高さにある。どうやら裏道に出たらしい。
「あこさまー？」

すでに屋敷に戻っていると思っているのか、屋敷ではしのが捜していた。
（ああまずいわ……えっと、ここから近道できないかしら）
山道から逸れることになるが、この程度の土手ならば登れそうだ。
「そっちに行かないほうがいいわよ」
女童の声は深い闇の奥から聞こえた。まるで神託のように。
山道を外れることに恐怖はある。今日二度めなのでなおさらだ。
（でもあなたが化かしてるんでしょうが！）
女童の言葉を無視してあこが茂みに足を踏み出すと、ぱき、と枯れ木を踏む音がした。昼に雨が降ったためか、枯れ葉は水をふくんでふわふわする。
（でもこれくらいなら――）
そして踏み出した瞬間、あこの足元がなくなった。
ふ、と内臓が浮きあがる感覚。下から吹き上げる風に、首元がぞわりとする。
（落ちる……っ）
「あぶない！」
その声とともに腕が脇にまわされる。そこにがくんと体重が乗って落下が止まった。
（その声――）
「采女……殿？」
「お怪我はございませんか」

「え、ええ……」

すると、安堵の息があこの首筋に落ちた。

あこは足を揺らしてみたが、足を下ろす地は見つからない。采女に抱きかかえられるようにして山道にもどり、ようやく身体を解放された。まだ動悸がおさまらない。

「お気をつけください。そこは崖です」

「え……ええ!?　だってあそこに屋敷が！」

「屋敷はそちらではありません」

あこは先ほどまでいた茂みに目をこらしてみたが、屋敷の灯りは見えなかった。暗闇に包まれて崖も見えないが、先ほどの浮遊感は嘘ではない。

（また、化かされたの……？）

今さらながらに、背筋が凍る思いがした。

「お話ししておけばよかったですね。ものは人を惑わします。出歩かれない方がよろしいかと」

「ありがとう采女殿……ずっとついていてくれたの？」

「いえ、山の方で諍う声が聞こえたので気にかかりまして」

馬で駆けてきたのだと采女は告げた。見やると、見覚えのある栗毛の馬が、木につながれないままに山道の草を食んでいる。

（え？　でも、あの子と諍っていたのって一時くらい前で……）

だが馬体は汗ばみ、今ついたばかりといった風情だ。女童を見やると涼しい顔をしている。

（またこの子に化かされたわけ!?）

化かされたのはあこか采女か。それはわからないが女童がなにかをしでかしたに違いない。

「この地の山道はたいそう入り組んでおります。どうかひとり歩きはお控えください」

「ごめんなさい」

すると女童は、膝をつく采女に背中から覆いかぶさるようにして、「もっと叱ってやってくださいな」などと甘えている。

「あなたが付いておられながらどういうことですか」

采女は苦言を呈する。采女は誰にも丁寧な言葉を使うが、女童に対するそれは貴人に対するものだった。

「ちゃんと言ったんですけどぉ、まったく聞いてくれなかったんですぅ」

まさに猫なで声だ。しかし采女は慣れているのか、ため息で聞き流した。

「初衣さま、悪ふざけがすぎます。右近さまの命ですからお任せしましたが――」

「あぁん、たまって呼んでくださいな」

甘えるような口ぶりだったが、口端をもたげた妖艶な笑みに威圧感があった。そこにあったのは怒りだ。采女もまた失言に思い当たったのか息を飲み、申し訳ございませぬと頭を下げた。

「いいのよ。わたしと采女殿の仲だもの。次からはちゃんと、ね？」

「では、たまさま、私は姫を送っていきますれば」

「わたしだって采女殿と一緒にいたいのにぃ。でも先に主さまの所にもどっているわね」

女童は甘ったるい声をのこし、一瞬にして姿を消した。その場に葉っぱの一枚でも残っていれば確実に狐だ。

（なんなの、あの子……）

「ねぇ采女殿。あの子、たまっていうの？　それとも初衣？」

「今はたまさまとお呼びしたほうがよさそうですね。もう一方は先代さまがお呼びになっていた御名です。諱ではありませんので、私が口にしてもお許しいただけていたのですが」

言の葉には言霊が宿る。名は人そのものを表すもの、名を呼ぶことは相手を縛ることだ。公の場か目上の者でもないかぎり、面と向かって本当の名を口にすることはない。直継を右近と呼び、直重を采女と呼ぶのもおなじだ。あこの名も呼び名にすぎない。

「彼女はモノノケじゃないの？　てっきり狐か猫又かと思っていたんだけれど」

猫又は、猫の一生を終えたときに尾が割れ、二尾となって霊力を得た妖だといわれている。

采女は、「ちがいます」と即答した。じゃあ右近殿の側女？　とも思ったが、普段は猫姿なのだから愛人ではなく愛猫か。

「当家のことをお話ししておいたほうがよさそうですね」

道すがらお話しいたしましょうか。そう言って、采女はあこを馬に乗せ、手綱を引いた。

ひさびさの馬上の感覚がうれしかったが、小袖姿なので残念ながら横乗りだ。

「当家が遠州、井伊谷の出であることはご存じですか」

「ええ。ずいぶん古くからつづく御家だそうね。藤原家のご一門だとか」

「ええ。藤原家の始祖鎌足公、その子孫である共資公が任を受け、遠州に下られたのがおよそ六百年前、そのときに生を享けたのが井伊家の祖、共保公です。以来、共保公の末裔が宗主となり、井伊谷の地を守ってきました」

（今から六百年前っていうと、頼朝公以前ってこと？）

源頼朝が鎌倉に幕府を開いたのがおよそ四百年前。六百年といえば、八幡太郎源義家公の頃からつづく家だということだ。

「このあたりを近江と呼ぶのに対し、浜松のあたりは遠江といい、大きな湖がございます。井伊谷はその川上にあり、代々水神を祀ってまいりました。ですが今川家に仕えていた先々代さまが非業の死を遂げられ、先代直政さまが井伊谷を離れねばならなくなったとき、ご神体を移すことになりました。井伊谷の祀る天白磐座の水神青竜、それが初衣さまの本性です」

「えっ、青竜!?　す、水神さま!?」

井伊家の由緒を聞いていたはずが、あの女童につながるとは思ってもみなかった。

水神はどれほど小さな村でも祀られている。水の恵みは農作物の出来を、つまりは命を左右するからだ。日照りや洪水が起きると作物が取れず、餓死者が出る。村では子返しを行い、ときには一揆に発展する。水神の中でも青竜はかなり有名で、京で大々的に行われている神泉苑の雨乞いも、竜への祈念の儀式だ。

（その水神さまがあんな小娘？　でも、たしかに目が翡翠みたいだった……ってことは、神さまに嫌われてるってこと!?　わたし、なにかやらかした!?）

「元々井伊家は、水神の力を得て穢れを祓う家でした。先代直政さまは歴代稀にみる力の持ち主で、家康公のお側にて存分にその力を発揮なされました。戦場には死者の念が溜まりますので、直政さまが浄化を……」

「それ以上、話す必要はない」

割りこむ声があった。

いつしか屋敷の前に着いていた。陽は落ち、屋敷の周囲にはかがり火が焚かれている。門の前に直継がいて、直継の袖には先に帰ったたまがまとわりついていた。

（やっぱり似てる……）

最初に会ったときにも思ったが、やはりふたりは雰囲気がよく似ていた。身にまとう空気に人間らしさがない。硬質な空気は神社に詣でたときに感じるものに似ている。

そのせいもあって、たまが直継にじゃれつく姿は、恋敵というよりも妹が兄に甘えているように見えた。しかしどちらにしても嫁となる身としてはいい気がしない。

（猫又の小姑なんていらないわよ！）

あこは采女に手を取ってもらって下馬し、直継に頭を下げた。

「帰参、遅くなりまして」

「謝罪はよい。怪我などないか」

（気遣ってくれるの？）

感情をのぞかせない声音は、気遣いというより確認だ。しかし直継の口からその言葉が出た

だけでもうれしかった。

「ええ、大丈夫よ。采女殿が――」

助けてくださったから、という言葉はつづかなかった。あこが頭を上げると、直継の目は自分ではなく采女に向いている。「ご無事にございます」と采女が答え、直継はうなずいた。

(安否なら本人に聞きなさいよ！)

噛み付こうとしたところ、不意に直継の視線がこちらに向いて、あこはたじろいだ。

「山は危険だと言ったはずだが」

「それは、ちょっと、小用があって……」

あなたの袖にまとわりついている猫又、もとい水神に化かされたせいだ、とは言えない。佐和山に来るまで五月でした――などと、いかにモノノケ屋敷といえども通じるとは思えない。尻すぼみになったまま続きを言えずにいると、直継はため息をついた。

「采女に送らせる。そなたはこのまま山を下りよ」

「えっ!?　そんなことできないわ！」

婚礼前に家を追い出されるなど、末代までの恥だ。こちらには帰るに帰れない事情もある。

(江戸で自分と鉢合わせちゃったらどうするのよ!?)

「どうして？　理由を言って」

「知る必要はない」

「言ってくれなきゃ必要かどうかわからないじゃない。知られて困る理由でもあるわけ？」

（こっちは命がかかっているのよ!?）

直継は無言であこを見つめる。あこもまた唇を引き結び、視線に耐えた。

真正面から見つめているはずなのに、かがり火に照らされた直継の瞳からは想いが読めない。感情がないわけではない。たしかに心の奥でなんらかの想いが渦巻いているはずなのに、直継はまったく表に出さず、瞳の奥は水鏡のように凪いでいる。

「そなたの存在はものを刺激する。また命を危険にさらすことになりかねない」

「勝手に出歩いたことなら謝るわ。でも、もののけの棲まう山にいて危険なのは、右近殿だっておなじでしょう？」

「そなたは自分の身を守ることだけを考えていればいい」

「そういうわけにはいかないわ。わたしひとり安全な所に身を隠したって仕方ないじゃない」

直継は、要を得ないあこへのいらだちをため息に変えた。

「危険だからといって、当主が城を離れられるはずがなかろう。それに当家は大事を前に多忙だ。四六時中そなたの身を案じてやれるほど、私も采女も暇ではない」

「え……それってどういう……」

言葉を紡ぐ直継の瞳に、揺らぎはなかった。

「鬼に食われぬうちに山を下りて江戸に帰れ。そして金輪際この地に近づくな」

第三章　慶長十年二月二十八日朝

時迷い人

暁降の時は、好きになれない。

夜に眠りについた家がそこここから目ざめはじめ、動き出す人の気配に心がざわめく。それがいつもの一日のはじまりだ。

だが昼の熱気を予感させるその朝、鳥居家江戸屋敷は開門を求める声で目ざめた。

祖父が守る伏見城が、主君家康の不在を突いて石田方に攻められた――その報は半月ほど前にもたらされていた。以来あこは仏堂にこもり、伏見城の祖父の無事と、会津征伐に向かう父の武運を祈りつづけた。

その日以来、毎日のように伝令が来た。だが、このような早朝に来たのは初めてだ。

夜通し馬を駆け、息せき切らせた伝令の声は、障子に閉ざされた仏堂にまで響いた。

「伏見落城！　彦右衛門さま御首級は大坂に掲げられた由ッ！」

――そのとき自分がなにを思ったか、覚えていない。

翌朝、手水の盥を持ってきたかやは、あこの顔を見るなり目を見張った。

「姫さま、どうなされたんですか」
（あーあ、やっぱりわかっちゃうのね）
予想はしていたが、そんなにひどい顔をしているだろうか。まぶたが腫れて視界が狭い。
「右近さまに叱られでもしたんですか？」
「いいえ、そんなんじゃないわ」
昨夜、直継は門の前で待っていた。家人たちに話を聞かれぬよう、気を回したのだろう。
だが直継とあこの間でなにかがあったことは、すでにかやの耳に届いている。侍女が目ざといのはどこの家でもおなじだ。
（さすがに話の内容までは聞いていないんでしょうけれど……）
じゃああの子に嫌がらせでもされたんですか？　などとかやは話しつづけていたが、あこは耳の奥に残る声音に引きこまれた。
――江戸に帰れ。
どくんと鼓動が跳ね、おそろしい速さで血が体中をめぐりはじめる。
昨晩、直継の口からその言葉を聞いたとき、あこの中で時が止まった。言われたことはわかっていた。ただ、それに対する自分の心がわからなかった。
『――どうした』
形のよい眉をひそめて直継に問われるまで、あこは自分がどのような表情をしていたのか知らない。魂が抜け落ちたようにただ空になった身体の中で、直継の声だけがこだましていた。

『右近さま、姫は今日到着されたばかりでお疲れのご様子、そのお話はまた日を改めて』

采女がとりなしてくれなければ、あこは言葉もなく立ち尽くすしかなかっただろう。

部屋にもどって、「ねぇ姫さま、しばらく見ないうちにこんなに細くなってたんですねー」と月談義をしていたしのとかやにも、気のきいた言葉を返せなかった。

――疲れたの。早いけれど休ませて。

病に見えるくらい顔色が悪かったのだろう。あこは夕餉も取らずに床についた。とはいえ、すぐに寝つくこともできず、直継の声が耳の奥で延々とくり返された。

一晩考えてわかったことはひとつ。――直継にとって自分は不用だということだ。

「中山道のお山で見かけたあの子、お屋敷の子だったんですね。殿さまの遠縁だそうですよ。そういえば殿さまと雰囲気がよく似て……姫さま？」

「あ、ごめんなさい。ぼんやりしちゃって」

知らず、帯にはさんだ懐剣に手を添えていた。気弱になったときのくせだ。

「あまり思い詰めない方がいいですよ。夫婦はケンカするほど仲がいいっていいますし」

慰めているのだろうが、夫婦でもなければケンカでもない。一方的に切り捨てられただけだ。

「力が出ないのはお腹がすいているからですよ！　さっさと着替えて朝餉にしましょう！」

焼き魚がすっごくおいしかったんですよ！　昨晩も煮魚が出ましたし。さすが湖国ですよね。

あこはずっとかやの声に耳を澄ましていた。そうしないと耳の奥から直継の声がよみがえってくる。顔を洗っている間も着替えている間も、かやの矢継ぎ早の声がありがたかった。

「あら、しのは？」
身仕度をととのえて隣の部屋にゆくと膳の用意はあった。だが給仕をするしの姿がない。
「姉さまなら、お炊事のお手伝いで厨に」
「よく入れてもらえたわね」
厨は城主の口に入るものを扱う。立ち入ることができるのはよほど身元のしっかりした者だけだ。正室の侍女とはいえ、そうそう入れる場所ではない。
「人手が足りなくて、賄い方の人たちももうばたばたですよ。竈を全部使って、大釜三つ分もお米を炊いたんです。握り飯を作るだけでも大変ですよー」
「あ、もしかして普請の人たちの？」
「ええ、そうです。最近はどこのお屋敷でもこんな状況らしいですよ。彦根山に新しいお城を造るとかで、昼はほとんどみんな出はらってるようです」
ほどなく「かやさーん、ちょっとー」と廊下から声がかかり、「はーい、ただいまー」と小走りで向かう。家に入ったのは昨日の今日だというのに、そつなく立ちまわっているようだ。おいおい家のしきたりも学べるだろうし、ふたりについては心配なさそうだ。
（問題はわたしというわけね）
ひとり残された部屋で、膳を前に一礼する。ひとりでの食事はひさびさだ。
（ここしばらく、ずっと母上と一緒だったものね）
とはいえ、あこにはあまり母との思い出がない。母は生家が西軍方だったため、江戸屋敷に

入らなかったのだ。母が江戸にきたのは関ヶ原の戦の後、生家が徳川に臣従してからだ。それまで離れて暮らしていたツケとばかりに、箸の使い方から椀の上げ下げまでびしばし直された。

並んでいるのは一汁三菜、吸い物に川魚の焼き物、大根と油揚げの煮付け、青菜のおひたし。飯は玄米だ。あこは焼き物に次いで椀を口元に寄せた。

(あ、お出汁がちがう……昆布かしら)

三品とも実家と味付けがちがうが、上品な薄味で舌にあう。

だがあこははたと手を止めた。しばらく食べさしの食膳を眺めていたが、それらを口に入れる前に箸を置いてしまった。

けして残してはなりませんよ。母の声が聞こえるようだ。食べ残すような贅沢ができる家でもなかったので言われたことはほんの数回。それでもどうしても食事が喉を通らなかった。

あこは誰も見ていないのを確認する。そして両手で自分の頬をつつみ、ぱんっと叩いた。

(しっかりしなさいよ!)

冷えきった指先に、じんわりと熱が伝わる。

あの直継は別の時間に生きる人間、自分の本当の許婚ではない。だが本当の許婚でなくとも面と向かって拒絶されるとつらい。それに二月が五月になろうが、わずか数ヶ月では直継の心は変わらないだろう。あこが五月にもどって直継と対面したとしても、きっとおなじことを言われるのだ。江戸に帰れ、金輪際近づくなと——あの顔で。

(最初からすんなり受け入れられるなんて思ってなかったじゃない)

婚家でなにを言われても耐えるつもりだった。だが直継の口から紡がれた一言は、想像していた以上の衝撃だった。江戸に帰れ——直継は、許嫁としてのあこのすべてを否定したのだ。

はいそうですか短い間ですがお世話になりました、とは引けない。客人の膳を出されようが、多少料理の味付けがちがっていようが、家の敷居が高かろうが、あこはこの家の水に染まるしかない。それが嫁ぐということだ。狐に化かされてなくとも、あこに帰る家などない。

あこは箸をむんずとつかむと、ご飯をかきこみ、吸い物で流しこんだ。おかずも漬け物もすべて口に入れ、喉の奥に押しこむ。そして震える手で箸を置くと、教えられたとおりの所作で丁寧に一礼した。その礼に返す者はいない。いなくてよかった。このような無作法を見られれば生家の恥だ。

しかし、よからぬ方向に考えが向いていたのは、かやの言うとおり空腹だったせいかもしれない。腹が満たされると身体中が熱くなり、力が湧いてきた。

（さてと、あの歩く人外魔境と戦わなきゃ！）

どうして受け入れてもらえないのか、直継に聞こう。もし自分に落ち度があるなら、五月に帰ったときにおなじ過ちをくり返さないようにすればいい。

あこは膳を手にして廊下に出て、きょろきょろとあたりを探る。部屋の前を通りすぎる者はいないものの、厨のあわただしさが朝の風にのって飛んでくる。

（あちらのほうかしら）

武家屋敷の造りなどどこの家も大差ない。あこの家では北の井戸のちかくだ。

だがあこが部屋を出てすぐ、廊下で井伊家の侍女と出くわした。
「ああ、姫さま、申しわけございませぬ」
侍女は畏まるように手をついて、膳をそそくさと奪いとる。給仕をする侍女もいなかったので膳も自分で片付けろということかと思ったのだが、そこまでしなくてもよかったらしい。
(まぁ、そりゃそうよね)
あこの家でも父が跡目を継いでからは侍女が増え、あこの仕事がなくなった。膳の上げ下げもそうだが、洗いものや雑巾がけなども久しくしていない。へたに手を出すと、その務めにある侍女の顔をつぶすことになる。姫と呼ばれる身分になってわかったことだが、なにもしない代わりに気苦労が多い。姫は姫なりに大変なのだ。
「あの、悪気があったわけじゃないのよ。でもまるっきりお客さまというわけでもないんだし、わたしにもなにかできることがあるならお手伝いできればって……」
しどろもどろ言い訳をしていると、背後からくすくすとしのび笑いが聞こえた。
「膳を持って歩きまわるなんて、育ちが知れるわね」
(出たわね、座敷わらしっ!)
「あら、今日は猫じゃないのね。ああ、朝餉時に猫だとニボシの頭しかもらえないものね」
まさか反撃されるとは思っていなかったらしい。ふり返るとたまの呆けた顔があった。
だがたまはすぐにいつもの余裕をとりもどし、赤い唇を開いた。
「思ったより元気じゃない」

「どこかの化け猫のおかげでね。右近殿は起きていらっしゃるかしら？」
「あら、そんな顔で主さまの前にゆくつもり？　顔を洗って出直していらっしゃいな。まぁ、いくら洗ってもその顔が変わるとは思わないけれど」
「洗ったところで主さまの美貌に敵わないことくらいわかってるわ。で、右近殿はどこ？」
あこがまったくへこんでいないことが気に障ったのか、たまは淫靡に口端を持ち上げた。
――こういう表情をしたときは要注意だ。
「あーら、よくそんなことが言えるわね。主さまに江戸に帰れとまで言われた分際で」
ぐ、とあこは息を詰まらせた。真正面から突きつけられて聞き流せるほど傷は癒えていない。
そのとき「えっ？」と驚いた声が背後から聞こえ、思い出した。たまに気をとられていたが、後ろにはまだ、侍女がいたのだ。
ふりかえると、膳を受けとった侍女があこを呆然と見つめていた。しばらくして我に返り、無礼に気づいてあわててその場に手をつく。たまは「気にしなくていいわ」と下がらせた。
たまがあえて昨夜の言葉をくり返したのは、侍女に聞かせるためだったのだ。これで昨日の一件が家中に知れわたるのも時間の問題だ。家中において当主の命令は絶対だ。当主に拒絶されたあこが屋敷内でどういう立場に置かれるか、それも計算の内だろう。
（この陰険ネコ～～っ！）
「わたし、なにかあなたの恨みを買うようなことをしたかしら!?」
あこは怒りをにじませてたずねるが、たまはどこ吹く風といった風情だ。

「嫁と小姑のケンカに理由なんている？」
要は、兄を取られた妹の嫌がらせだ。
（でも嫌がらせでそこまでする!?）
さすが年季の入った化け猫、やることも徹底している。
「そうね。愚問だったわね」
「そうよ。主さまに愚妻はいらないわ。モノノケ憑きの女もね」
（それはこっちのセリフよ、この化け猫！）
「わたしになにが憑いているですって？」
「三度も延期になるなんて、神仏がよしとしていない証拠でしょ」
気にしていたところを突かれ、あこの堪忍袋の緒が切れた。
「神仏が、じゃなくてあ・な・た・が・でしょうがっ!!」
しかしたまはますます愉快そうに目を細めた。
「ほら、すぐ怒る。あなた面白いわね。傍から見ている分にはね。主さまもこんな女に押しかけられておかわいそうに」
「育ちが知れるような家の出で悪かったわね！　そりゃうちはやんごとない家柄じゃないし、五年前までは上げ膳据え膳してもらえる家でもなかったわよ！」
上げ膳据え膳どころか炊事に洗いもの、山菜摘みまでして糧食を増やしていたくらいだ。
「でもこれは先代さまが整えた縁談よ！　文句があるなら先代さまの墓前に言いなさいよ！」

その瞬間、たまの顔から心が消えた。笑みを浮かべた表情は変わらない。しかし、笑みの面だけをその場に置き去りにして、魂が身から翔けたような――

あこはこの表情を知っている。昨夜、采女が『初衣さま』と呼んだときに見た顔だ。

（なんなの……？）

様子のおかしいたまに、あこは無言で様子を探っていると、逆に、自身に向けられた視線を感じた。たまの視線ではない。周囲を探ると、先ほどの侍女が呼んできたのか、侍女たちが遠巻きにふたりの様子を窺っている。

（こんなことまで折り込み済みってわけ!?）

だが人目があっても後には退けない。いらぬことを吹き込まれた後であればなおさらだ。

「墓前が無理なら上様でもいいわよ。ご公儀が認めた縁談なんだから。文句があるなら直々におっしゃいなさいな。言えるものならね」

いくらたまが家格の違いを笠に着ようと、将軍に御目見が適うのは、直継と元直臣の木俣守勝くらいのものだろう。

だが、たまの本性は青竜。現世の権力がどれほどのものよほほほほと哄笑でもするかと思ったが、たまの表情は時が止まったかのように変わらない。感情の伴わない笑みを張りつけたまま、ぽつりと漏らした。

「――図に乗るでない。命で禄を購った猪武者が」

（……なんですって……？）

それはもはや挑発ではない。あこに対する——否、亡き祖父に対する冒瀆だ。聞き流せるものではなかった。

「もう一回言ってみなさい！」

あこはとっさにたまの肩をつかんでいた。遠くで女の悲鳴があがる。こちらの様子を窺っていた侍女たちだ。冷静であれば、これもたまに仕組まれたことと堪えることもできただろう。しかし今のあこには侍女の目を意識している余裕などなかった。

「わたしのおじいさまがなんですって!?」

（命で……禄を……）

思い返すだけでも、頭の血管がまとめて切れた。肩を摑む手に力がこもる。弱い者いじめという言葉が脳裏をよぎる。だが見た目が十才児だろうが、頭ひとつ背が低かろうが関係ない。死者の冒瀆はもっとも恥ずべき行為だ。

「あなたなにを言ったかわかってる!?」

詰め寄ると、間近にたまの表情を見た。

（え……？）

初めて見た。自分自身なにを言ったのかわからない——そんな戸惑いの表情に、自然と摑む手がゆるむ。そのとき、あこの手に別の手が載せられた。

「右近殿……」

いつ現れたものか、そこにいたのは直継だった。



（――今日はもう寝衣じゃないの？）

驚きのあまり、どうでもいいことをぼんやりと考えた。視界の隅では、遠くから覗いていた侍女たちもその場に手をついている。

直継は、おなじ色の瞳をたまに向けた。

「元忠殿が猪なら、私の父はいったいなんだ？」

その一言に、あこの指からゆるゆると力が抜け、たまの肩から手が離れた。

「来い。人払いだ」

命じなれた声音。しかしいらだちを隠しえない声で直継は言いおいて、そのままあこの手を取って手近な部屋に入った。

そこは先ほどまであこが朝餉を取っていた部屋だった。直継は部屋に入るとあこの手首を解放し、上座についた。するすると障子が閉ざされ、廊下から人の気配が消える。

部屋の灯りは障子に漉された朝陽だけだ。視界はよくない。だが、あこは面を上げられなかった。怒りに染まった顔を見られたくなかった。直継もまた無言だった。

先ほど直継はあこの腕を押さえた。しかし最後の叱責はたまに向けたものだ。遠くから見ていた侍女にも、直継がどちらに非があると判断したかわかっただろう。

「……どうしてかばったりしたの」

しかし抑えきれない怒りが手伝って、声が掠れた。
「客人に対する無礼は、当主の落ち度だ」
ぼんやりとした部屋の光に溶け込むような響きだった。江戸に帰れと言ったときの鋭さはないが、内容は容赦がない。
（客人、ね）
やさしい言葉を期待していたわけではない。非はたまにあるとはいえ、あこが手を上げた事実は変わらない。非難されてしかるべきだとわかっている。
たまは家人、あこは客人。だから当主として客人であるあこをかばった。つまり直継は、あこを家に受け入れるつもりがないということだ。客人であることをかばった理由にされるくらいなら、侍女の前で面と向かって非難されたほうがどれだけましだったか。
「御家のために謝るわけね。御家のために婚約したように」
「それ以外のなにがある」
直継は間髪入れずに言葉を返した。
「婚礼は家の絆のためのもの。それ以外の理由などないだろう」
「……ええ、そうね」
あきらめたほうがいいと、心がささやく。
直継に受け入れる気がないのなら、両家で話し合いの場をもってもらえばいい。それで破談になっても静かに受け入れればいいだけのこと。これ以上、心を切り刻まれる必要はない。

（……でも）

「どうした」

直継は気づいただろうか。あこの肩が震えていることに。

あこは震える心に突き動かされるままに声を張り上げていた。

「わたしだってね！　最初はそう思っていたわよ！」

――あこ、輿入れ先が決まったぞ。

四年前父にそう告げられたとき、あこは十二才。輿入れとはなにかもよくわかっていなかった。女人は大人になると生家を出て、嫁ぎ先で新しい家族ができることは知っていた。戦の都合で離れて暮らしていた母も、戦が終わるともどってきた。父と母が一緒にいるのが当然であるように、自分にもその相手が決まったのだと。

自分が嫁ぐ先はどのような家だろう。夫となる人はどのような人だろう。考えなかったといえば嘘になる。しかし見たこともない許婚は、昔々あるところにからはじまる物語の中の人とおなじ。どれだけ話を聞こうとも、いまもどこかで生活しているという実感はなかった。

「でも！　あなたが元服前に父上を亡くしたって聞いたから！」

許婚もまた生身の人間なのだと気づいたのは、舅となるはずだった井伊直政の訃報だ。その報せは、輿入れの祝福を一身に受け、出立の日を指折り数えていたあこの元に届いた。十三の春のことだ。

そのときあこの脳裏で、一昨年の祖父の訃報と重なった。

暁とともに駆け込んできた伝令。その声が今も耳から離れない。

あこの祖父、鳥居彦右衛門尉元忠は、主君家康が竹千代という名だった時分から仕え、五十年余の月日が流れた慶長五年、関ヶ原の戦の前哨戦となった伏見で散った。

家康と豊臣方は一触即発、家康が会津の上杉討伐のために大坂を離れれば、手薄となった伏見を襲う者が現れる。そのことは誰しもが察していた。しかし祖父は伏見城守護の任を受け、わずか二千足らずの手勢で西軍四万の攻勢を防いだ。残り数人となるまで斬り結び、最後は自害して果てたときく。伏見城の床は、西軍の兵と祖父らの血で朱一色に染まった。――奇しくもその日は八月一日、江戸では十年前の家康の入府を祝って祭りが開かれる八朔の日だった。

祖父の散り様に人々は言った。三河武士の鑑と。祖父の忠義を多くの人が賞賛し、鳥居家にとってこの上ない誉れとなった。

あこの父忠政は、京から帰ってきてあこの縁談をひとしきり喜んだあと、ぽつりと漏らした。

『……父上はご立派だった』

父から祖父のことを聞いたのは、その一言だけだ。

父は祖父の跡目を継ぎ、鳥居家の当主となった。あこは屋敷を訪れる人から、祖父を悼む声、そして祖父の死を賞賛する声をたくさん聞いた。父はそれを栄誉なことと受けとめていた。

父はなにも言わない。祖父の無念の死をどう思っていたのか、あこに語ることはなかった。

しかし、戦に同行していた家臣がそっと教えてくれた。祖父の首が西軍の手に落ち、大坂城に晒されたと聞いたとき、父が人目のないところで涙していたことを。

祖父は立派だった。——そう口にしたとき、父は内心でなにを思っていたのだろう。

そしておなじように戦が元で父を亡くした許婚は、なにを思うのだろう？

許婚の父である直政の死因は、関ヶ原で受けた鉄砲傷が元だと聞いた。あこの周囲は直政の武勇を褒め称え、そのような家に嫁ぐあこを家の誇りだと言った。そのとき、あの日の父の姿と許婚がかさなって見えた。

継嗣である許婚は、祖父を亡くしたときの父とおなじ立場にある。死を悼む声、それ以上の賞賛の声が寄せられていることだろう。許婚はおない年。もし自分がその立場だったら、心を殺して弔事を仕切るなんてとても無理だ。許婚はどうなのだろう。許婚は父を亡くしただけではない。元服前のたった十三才で家名を背負うのだ。

許婚は生まれながらの嫡子だ。跡継ぎとして育てられていれば、その覚悟もできているのだろうか。それでも自分のなかで祖父を亡くした悲しみが癒えていないように、許婚もまた悲しみの底にいるかもしれない。それでも許婚は、当主として、家名のためにその想いを心の底に沈めるしかないのだ。——あこの父とおなじように。

「わたしも五年前の戦でおじいさまを亡くして、とても悲しかったから、あなたもそうなんじゃないかって、誰にもいえずに傷ついているんじゃないかって、ずっと気になって……！」

婚儀は延期となったが、一日もはやく許婚に会いたかった。会って、話がしたかった。想いをひとりで抱える必要はないのだと。しかし江戸と江州は遠く隔たれており、喪中であれば私的な文もおいそれとは出せない。遠く離れた場所にいる自分に、なにができるだろう——そう

考えて、決めた。いずれ嫁いだ日には、話し相手になれるように努力しよう、と。

夫の不在時に城を守りぬいた上田の小松姫のような賢夫人の例もある。奥向きのことだけでない。表には出せない想いもなんでも話してもらえるようになろう。そのためにあこは武芸や学問に腰を入れた。

許婚は江戸の話も聞きたがるかもしれない。しのは渋い顔をしたが、あこは積極的に江戸の町に出て、目新しいものをたくさん見た。いろいろな土産話を持ってゆけるように。

（御家のためだなんて、そんなことはわかってるわよ！）

なにかにつけて二言めに出てくる「御家のため」。その言葉に流されるのは嫌だった。自分は正室という名の飾り雛にならない。そう誓った。

「御家のためとかそういうのは関係なしに、いろんなことを話して力になれればって……」

だがそう思っていたのは自分の勝手だ。直継に伝えるつもりはなかった。

「いろんな話をしたら、離れて暮らしていた時間を埋められるって、勝手に思っていたの。でも、会いたくなかったとか、来てほしくなかったとか、そういうことは考えもしなくて、本当はあなたのことを全然考えてなかったんだって思って……ごめんなさい、なに言ってるのかしらわたし……」

遠くにいる許婚のためにといいながら、本当はなにも考えていなかった。最初から必要とされていなかったなどと――露ほども考えなかったのだから。

自分はただ、側にいられれば。そして学んできたことが、許婚の支えになれば。御家のため

の婚礼でも、いつかは両親のように本当の家族になれると信じていた。話に聞くだけの顔もしらぬ許婚に、一方的に想いを寄せていた。自分ひとりの勝手な片想いだ。

きっと江戸では、もうひとりの自分が今日も町に出ているはずだ。そして夕刻に帰ってきてしのに小言をもらいつつ、ひとつでも江戸のことを多く伝えられるように、町で見聞きしたことを日記に綴っているだろう。その日記は江州に持ってきている。

叶うなら江戸の自分に言ってやりたい。そのようなことはすべて無駄だったのだと。

直継は唇を引き結び、あこの言葉をじっと聞いていた。説明になどなっていない。たまに刺激されて湧きあがった感情をぶつけただけだ。

『命で禄を購った猪武者が』

四万石から十万石への加増は、まぎれもなく祖父の武功あってのもの。祖父がその命で得たものだ。しかし、祖父の死を汚すたまの物言いは許せなかった。

直継はあいかわらず感情を見せずにいたが、やがてぽつりと言葉を漏らした。

「元忠殿の末裔、か」

「……それが、なによ」

「元忠殿は忠臣として務めを果たされた。ご立派な最期だった」

思わぬ言葉に、あこは吸いよせられるように直継を見つめた。

直継は元々姿勢正しく座っていたが、居住まいを正し、

「その名を汚す家人の無礼、お詫び申し上げる」

そう言って両拳を畳につき、上座から頭を下げた。
（な、なによ！　そんな、不意打ちみたいに……！）
なにか、言葉を返さなければ――そう思ったが、気が動転して声が出ない。
直継はこの家の、いや、この江州の主だ。このような姿は侍女にも家人にも見られるわけにはいかない。どうぞお手をお上げください。ただ一言、そういえば収まったはずだ。しかし唇は震えるばかりで、乾ききった喉からは声を紡ぎだせなかった。
直継はたまに謝らせるのではなく、当主としてみずから謝罪した。それはあこを家人ではなく客人として遇するとの意思の表れだ。言葉と心は謝罪でも、直継は、あこの気持ちは受け入れられないと示したのだ。
あふれてきた涙をこらえきれず、あこはその場から逃げ出した。

逃げこんだ先は、続きの間の寝所だった。
隣の部屋を隔てているものは襖一枚、ぴしっと音を立てて閉めきったものの、直継が襖に手をかければさえぎるものはなにもない。
襖の骨と襖紙二枚。隔てるものはただそれだけ。嗚咽すらも漏れるのではないかと必死に息を押し殺す。だが、胸の奥が引き攣るのを隠すことはできなかった。
『ああ、そんな話もあったな』

自分は、鳥居の名を聞いてはじめて思い出されただけの存在だ。その程度のものなのだと、最初に気づくべきだった。直継には自分はいらない。自分がどれだけ支えたくとも、直継は自分など必要ない。

ままならない呼吸をくり返しながら、あこは襖の向こうの気配を探った。だが動く気配はない。それどころか人の気配すらしなかった。

そういえば直継には気配がない。初めて会ったときも、さきほど手を置かれるまで気づかなかったのも、あこの落ち度だけではない。感情も気配も人間らしさまで消し去って、直継はなにを望んで生きているのだろう。たとえばいまのあこのように、感情を乱し、泣くことなどあるのだろうか。想像もつかない。

直継は座を立っただろうか。部屋を出ていっただろうか。それともあのまま――？

襖のほど近くで隣の部屋の気配をさぐっていると、そのうち呼吸が落ち着いてきた。

それからしばらく物音がないことを確認して、あこは襖の隙間に指先を当てた。爪の先にひっかけて指をこじ入れ、開いた隙間から様子を探る。隣の部屋は変わらず障子で閉ざされている。しかし、やわらかな光が満ちた部屋に、直継の姿はなかった。

あこは大きなため息を吐き出した。張り詰めて糸が切れたように背中から力が抜ける。そして不意に笑いがこぼれてきた。

（あーあ、なにやってるのかしら）

気が動転していたとはいえ、頭を下げる直継から逃げたことも、直継がいることをおそれて

こっそり様子を窺うことも、あまりに子どもじみたふるまいだった。育ちが知れるとたまが揶揄するのも無理もない。

（全然だめじゃない、わたし）

あこは直継のようには頭を下げられない。家人どころか、自分の行動にすら責任が持てない有様だ。こんな現状でいったい誰を支えられるというのだろう。思い上がりもはなはだしい。

『元忠殿の末裔、か』

直継の声音には深みがあった。なおざりごとではない。心からの謝罪だった。

鳥居家は、祖父の功績でようやく井伊家に釣りあう家禄となった。直政もきっと祖父の最期を聞いて、当時は四万石にすぎなかった鳥居家に縁談を持ちかけてくれたにちがいない。この縁は祖父が結んでくれたものだったのに。

あこは打掛に手を入れ、帯にはさんだ懐剣にふれた。祖父の最後となった夏、大人になったあこに祖父がくれたものだ。

（ごめんなさい、おじいさま。わたしが不甲斐ないばかりに……）

あこにはもう直継に合わせる顔がない。さすがに愛想を尽かされただろう。次に帰れと言われる前に、荷をまとめておいたほうがいいかもしれない。

人払いのためか、あのような騒ぎの後だというのにしのもかやも部屋にこなかった。自分ひとりでも荷物の整理をはじめようか。そうとも考えたが、もう江戸に帰るのかと思うとふっと肩の力が抜け、あこはそのまま畳に寝転がった。

このような姿をしのに見られれば叱責されるにちがいない。いつものように『前代未聞です！』とでも言うだろうか。

（それとも、もうなにも言ってもらえないかしらね）

しのは数ある縁談を断ってはるばる江州まで付いてきてくれたが、そろそろ嫁に行く年だ。江戸に帰ったら重臣のだれかに嫁ぐだろう。そうすればかやも一緒に付いていく。しのを嫁にもらえるなら、小姑付きでも諸手を挙げて迎える家は多いはずだ。

このまま江戸にもどればあこがふたり、大騒ぎになる。だがたまの嫌がらせが嫁いびりだとわかった以上、江州を出れば五月にもどれるにちがいない。

（帰れちゃうんだ……）

はじめから、ここから出て行きさえすればよかった。帰る方法を探さなければとあせっていたのが馬鹿みたいだ。帰りにまた半月かかるとして、五月末には江戸に着く。また暑い夏を江戸で過ごすのか。江戸で削り氷でも食べようか。そのような菓子があることもいい土産話になると思っていたが、もうその機会もないだろう。

そんなことをつらつら考えていると、廊下をどすどす踏みつける音がした。足音はこちらに近づいてくる。あこはあわてて跳ね起きた。

（打掛は皺になってないわよね!?　あ、化粧！　化粧なおさなきゃ！　鏡はどこ!?）

「姫、おられますかな!?」

「は、はい！」

足音から予測はついている。案の定、顔を出したのは木俣守勝だった。
（でもどうして木俣殿が!?　あっ、殿の守役として物申すとか）
当主に対して無礼を働いたとなれば、家中を敵に回したのも同然だ。そういえば昨日、この愛宕屋敷に迎え入れてくれたのも守勝だった。
（じゃあ、つまみ出すのも木俣殿の役目ってこと!?）
守勝の突然の訪問に頭の中はぐちゃぐちゃだったが、あこは覚悟を決めて、ひざの前に手をそろえた。せめて最後くらいちゃんと挨拶できなければ、さまにならなさすぎる。
かちこちに固まったあこの前で守勝はしゃがみこむ。そして裏表のない顔でにかっと笑った。
「姫、これから築城の様子でも見に行きませんかな？」
「――は？」

「姫、足元にお気をつけくだされよ」
「は、はいっ！」
山道の乾いた土に、深い轍が刻まれている。大きな石を積んだ牛車がとおるため、石の重さで穿たれたのだろう。道はつまずいてこけそうなでこぼこばかり。守勝は慣れた様子ですいすいと登ってゆくが、あこは付いてゆくのがやっとだ。江戸にいた頃からよく出歩いて足腰を鍛

えてあるが、普通の姫であればきっとついていけない。
（熊とおなじ体力だと思わないでよね！）
「おーい姫さん、どきんさぁ」
背後から訛りの強い声がかかる。
（ど、どけってこと……？）
あこは道の端に寄ると、丸太を積んだ牛車が追い越してゆく。
「姫、気をつけなされー」
守勝の声に「はい！」と返し、足を踏み出す——と、数歩先に落ちているものに気がついた。
（こ、これって……）
先ほどの牛が落としていったのだろうか。思わず凝視すると、湯気がたっている。
「踏んだらすべりますゆえなー」
ありがたい忠告をあこは引きつった笑いで聞き流すと、ひと思いに跳び越えた。
（なんでこんなことになってるわけ!?）
先ほどあこは守勝に誘われ、化粧をなおし、外出用の小袖に着替えて屋敷を出た。佐和山をおりて半時も歩くと、城普請中の山についた。彦根山というそうだ。かやが言っていたとおり、山は工人で満ちあふれ、町の女にまじって侍女と思しき女たちも握り飯をくばっている。
「疲れましたかな」
「いえっ……」

そう言ったものの息が切れた。彦根山は佐和山より低いが、足場が整っていないので難儀だ。

「ほどなく着きますゆえ」

もはや何度めかもわからない励ましを受け、あこは棒になりそうな足を踏みだした。

だが守勝の言うとおり、今度こそほどなく頂に着いた。頂は木が伐採されて拓けている。

守勝は、工人たちを指揮していた者に一言二言指示を出すと、「姫、こちらにございますぞ」と手招きした。

「あ……」

守勝の傍らに立つ前に気がついた。彦根山の頂上からは、琵琶湖が一望できたのだ。

薄くかかった靄の向こうには、琵琶湖の対岸に連なる山々の輪郭もうっすらと見える。

「こちらの方が見晴らしはよろしゅうございますぞ」

守勝の言うままに、あこはひとつぼつりと置かれた石に登る。すると山の麓を見下ろすことができた。琵琶湖は山のすぐ下までつづいており、内湖をわたる船の帆の紋が見て取れる。

「いかがにございますか」

見晴らし用に置いたものなのだろう。守勝は慣れたように平らな石に腰を下ろした。

「天守が完成したら、琵琶湖の果てまで見わたせそうね」

琵琶湖は横に長いが、空が澄む時季なら大津や坂本の港まで見わたせそうだった。

「陸路の中山道と北陸道を押さえ、琵琶湖の水路はこのとおり。佐和山は裾野が陸路に向いておりますゆえなぁ」

彦根山にあたらしく造る城は、堅固な山城であると同時に商業の発展を見越してのものということだ。商業の発展には広い城下町が欠かせない。ここなら内陸にありながら、港を備えることができる。

「佐和山だけでなく、坂本や安土、長浜あたりからも築材をかき集めて、工人も近隣諸国に声をかけての天下普請にございまする」

「――右近殿は、この城の城主になられるのね」

あこは果てが見えない琵琶湖を見つめた。

琵琶湖は広い。江州はもっと広い。直継は、今もそしてこれからも、それらを統べてゆくのだ。許婚がとても遠い人のように感じた。実際、とても遠い人だった。

「姫は右近殿をどう見られましたかな」

「すごく……深い人だと思いました。なにがあっても、水底みたく揺らがない感じで」

大きな人ではない。清濁併せ呑むほどの年でもない。けれども彼には揺らがない芯がある。それを支えているのは、自身に与えられた務めに対する真摯な想いだ。わずか十六才。佐和山に城はなくとも、彼はすでに城主だった。

直継と自分では立つ場所がちがう。直継は、感傷にふり回されて自身の立場を忘れていい人間ではない。この山に登ってはっきりわかった。見納めにしてもいいものを見せてもらった。

「最初は見目の良さにびっくりしたんですけどね。容姿も発言も容赦ない人ですよね」

すると守勝は大笑した。

「江戸から来られた姫でもそう思われますか。兵部も顔はやたらよかったですから、あれは完全に血ですな」

「やっぱり!?」

反射的に力いっぱい同意してしまい、あこは照れ笑いでごまかした。兵部というのは兵部少輔直政、直継と采女の父だ。直継と采女の容貌は、やはり血のなせる業だったらしい。

（おそるべしだわ井伊一族……）

「しかし姫の見立てがそのようなものでよろしゅうございました」

「え？」

「顔だけでなく性格まで似たものか、右近殿は容貌があれな上に感情表現まであれですので。いろいろと誤解というか曲解というか、そういう類のものを受けやすいようでしてな」

守勝の言葉を借りれば、たしかに言葉遣いもあれだ。あこを江戸に帰したいにしても、他に角の立たない言いようがあるだろうに、直継は言葉で意思を歪めたりはしない。

「ある意味、真正直すぎる方なのだと思います」

すると、ただでさえ上機嫌だった守勝の眉尻がさらに下がった。

（木俣殿は見たまんまって感じだけど、采女殿も人当たりがいいわりに真正直なのよね）

補佐役がこの二人では、直継は父譲りの誤解を受けやすい素材が育つべくして育った感じだ。

だがそのとき、上機嫌で下がっていた守勝の眉が、ふと情けないくらいに頼りなく下がった。

「やはり子は親に似るものですなぁ。心を開こうとしないあたり、兵部と瓜ふたつにございま

する。右近殿が生まれてこの方、わしも兵部もほとんど城におらなんだのが悪かったのか、しばらく離れているうちに警戒されてしまったようで、心の内など一切明かしてくれませぬ。ひとりでいることを好むのも兵部譲りなんでしょうなぁ」

「直政さまが？」

「兵部は生まれて間もなく父と死に別れましてな。命を狙われて隠れ住んでいたそうで、まぁ、わしが初めて会ったときの兵部はすでに右近殿のような感じでした。行軍の最中でもひとり、ふらりといなくなったりしてえらく慌てたものです。右近殿も屋敷からおられなくなることも多うございますし……あいやっ、断じて他に女性がいるというわけではなく！」

「いえ、べつに気にしませんけれど」

直継に懇意な女性がいるかどうかは多少気になるが、もはやあこには関係ないことだ。それに直継に女の影といえば白猫以外に想像できない。たまが小姑を自負しているなら、嫁いびりだけでなく側女いびりもするだろう。かやも言っていたが、女童姿のたまは井伊家の縁戚扱いだ。領内に住まう女が、主家の小姑の嫌がらせに耐えられるとは思えない。

「采女がついているので問題はないと思うのですが、采女もああ見えて頑固で、事情を話してくれませぬし。わしには若い者の考えや心の機微はとんとわからず、途方にくれております」

守勝はしみじみ語ると、ため息をついた。その口調たるや、ここに昆布茶とお茶請けがないのが不思議なくらいだ。

（えっと……）

まず直継の性格では、年の差がなくとも理解するのはむずかしいだろう。夜歩きの件は、お役目大事の采女が容認しているなら、そうまずいことではないだろうと想像がつく。

（というか、なんの話よ？）

話の雲行きがおかしい。

……日毎の政務はきっちりこなされますが、夕餉にお誘いしてもつれない返事しかいただけませんし、中野殿のところのお孫さまなどは、歩きはじめたばかりの頃には「じぃじ」などと言って笑いながら玄関で出迎えてくれたそうですが、思い返せばそもそも幼い時分、右近殿がわしににっこり微笑んでくださったことなどなかったような、やはり育ての父は実の親には敵わぬものなのですかな云々という話の流れはいったいなんなのだ。

てっきり、今回は縁がなかったということで、と体のいい御破算の言葉を聞かされるのかと思っていたのだが――

（これってもしかして子育て相談!?）

いや、意外な形で御破算につながるのだろうと思い相槌を打ちつづけたが、話が進むにつれてあこは確信した。

守勝の心配事はまだまだつづき、放置すれば陽が暮れるまで聞かされそうだったので、「ちょーっと木俣殿！　そこでいったん話を置きましょう」と、終わりの見えない話を切ってみた。

「えっとですね、まずひとつめ、右近殿がお心を見せないというお話でしたが、それは単なる性格です、性格。お側にいる采女殿には伝わっているようなので、困ったらまず采女殿に聞い

てください。ふたつめの無断外出の件は、わざと隠していらっしゃるわけではないと思いますし、事が大きくなれば勝手に進めるというよりも、問答無用、事情説明一切なしで人材を駆り出して解決しちゃう人だと思うので問題ありません。みっつめ、当主の女性関係はご心配でしょうが、主さま大事の小姑がいるので大丈夫です。で、よっつめ、夕餉に応じないのも性格です。元服されているとはいえまだお若いんですから、やたらに酒の味をおぼえさせないでください。いつつめ、中野殿のお孫さまはお孫さま、右近殿は右近殿です。歩きはじめるのが早い子もいれば口が達者な子もいます。うちにも幼い弟や妹がいますけど、子どもだって性格がありますし、子どもはやって褒められて嬉しいと思えば何度でもやりますし、興味がなければ見向きもしません。右近殿にその手の子どもっぽさを期待しないでください。似合いませんので。次にむっつめですが――」

守勝の話があまりに長かったので、説明の順序は当てずっぽうだ。だが守勝は腕を組み、深くうなずきながら聞き入っている。

「というわけで以上十三点、要するに木俣殿の心配しすぎです。右近殿は言葉が足りなさすぎですが、足りない分は采女殿に説明してもらってください。はい、他に質問ありますか」

すると守勝は目を細め、眦を下げた。

「そこまで当家のことを理解していただけているなら一安心ですな」

「は？」

守勝はよっこいせと石から下りると「そろそろ昼餉に帰りますかな」などと言っている。



ここになにをしに来たのかと、問うまでもなかった。

（や、やられたわ……）

あこの肩がわなわなと震える。まさか、『私に裏などありません』と顔に書いてある守勝にしてやられるとは思わなかった。

（だって木俣殿が刺客だなんて思わないじゃない！）

落ち込んだあこへの刺客――つまり慰め役。

そのようなことを任されても、まずは酒でも一献とやぶから棒に誘うか、言うに言い出せず耳でもほじりながら無言で傍にいる人だと思っていた。さすが直政の若かりし頃から補佐を勤めあげた人だ。

（木俣殿をまわしたのは誰よ!?）

今回はその人の采配が的中した。直継か采女かの二択だが、あこが図らずもみずからおこなってしまった分析によれば、おそらく後者だ。

守勝の口ぶりからすると、直継の態度は仕事中でも変わりはないらしい。采女が説明役になっているのだろう。思い返せばあこへの説明も采女が行っていた。最初に会ったときから思っていたが、あなどれない人だ。

「姫、次は馬で遠駆けにまいりますかな」

次は、とさらりと布石を打ってきた。かなわないわねとため息をつき、「ええ、喜んで」と答えた――あとに、あわてて訂正した。

「あ、い、いえ、わたしは馬には！」
（ひっかけどころはそこじゃないってば！）
女だてらに馬に乗りまわすなど外聞がよくない。婚家には黙りとおすつもりだったのに。
しかし守勝はにんまりと笑い、「左京亮殿から聞き及んでおりますが？」と種を明かす。
「騎射までなされるとは、さすが彦右衛門殿のお血筋ですな」
裏を取られていては、ははは と笑ってごまかすしかない。
（ち〜ち〜う〜えぇぇ〜〜）
人にはおしとやかにするように言っておきながら、情報がだだ漏れだ。大方、酒の席でいい気にさせられて口を滑らせたのだろう。守勝も見かけによらず策士だ。
「さ、姫、まいりましょうか」
守勝はただ、あこを彦根山に案内しただけ。そこには誰の作意もない。そういうことにされてしまった。しかも守勝には得意な様子も恩に着せる様子も微塵もない。それがくやしい。
（こんなんじゃお礼が言えないじゃない！）
だが「ええ」とこたえるあこの心は、湖面を渡る風のように軽くなっていた。

あこは愛宕屋敷にもどり、与えられた部屋に帰る途中で采女と出くわした。
「姫、外に出ておられたのですか」

采女は眉をひそめた。連れ出すことまでは頼んでいないという守勝への非難だろうか。

「ごめんなさい。ちょっと木俣殿にお誘いいただいて、彦根山を見てきたの」

仕組んだ当人に事情を説明するのもおかしな話だ。しかし采女は守勝の名が出ると、「木俣さまがご一緒でしたか」と安堵の息を漏らした。

(え。采女殿が頼んだのではなかったの?)

裏であれこれ手を回しはしても、いらない芝居をうつ人ではない。よろしゅうございましたと笑顔で流すだろう。

「あ、出歩くのはまずかったかしら……?」

昨夜、勝手に屋敷を抜け出して迷惑をかけたばかりだ。

「反省していないわけではないのよ、けっして!」

「いえ、ご心配なさらずとも木俣さまにものは近づいてはきませんので」

「は?」

「木俣さまには右近さまのように祓う力はありません。それどころかまったく見えないのですが、なぜかものは木俣さまには近づいてこないのです」

ものの方から退くから見えないのか、本当に気づいていないのかはさだかではありませんが、とつづく言葉にあこは唖然とした。

(なんなのよ木俣殿……)

先ほどの策士ぶりといい、ただの陽気な熊ではない。

呆けるあこの前で、采女が跪いた。
「たまさまの一件、誠に申し訳ございませんでした」
あこはあわてて腰を落とし、采女と目の高さを合わせる。
「もういいの。いえ、おじいさまのことは許せないけれど、そのことなら右近殿がもう謝ってくださったから」
「え？」
采女は経緯を知らなかったのか、瞳で問いかける。
（采女殿が知らなかったなら、じゃあ木俣殿に頼んだのは采女殿ではなくて……）
手を回したのは。――あのような態度を取った後だというのに、そこまで格の違いを見せつけられるとも笑うしかない。
「……右近殿はきちんと謝ってくださったのに、逆にわたしが無礼なふるまいをしてしまったの。今度こそ本当に江戸に帰されるかもしれないわ」
「いえ、けしてそのようなことは」
「ううん、気がついたの。わたしはまだまだ子どもで、この家のご内室になれるような人間じゃなかったって」
あこは采女から視線をはずし、庭に目を向けた。
蕾のない芍薬。傍らに立つ直継をはじめて見たときは、あまりに人間からかけ離れた雰囲気に妖かと思った。いや、実際の直継も妖と変わらぬ人外魔境ぶりだったが、直継はちゃんと自

身の務めを自覚していた。

（あれでおない年だなんてね）

直継の生まれ月は知らないが、自分は時をさかのぼった分、すくなくとも二ヶ月長く生きている。なのにこのざまだ。自分ひとりで立てない人間が、人を支えようだなんておこがましい。

（もっと大人にならなきゃ）

大人になるために、具体的になにをすればいいかわからない。ただ、このままではいけない。それだけはわかった。

「婚礼が三度も延期になったのも、神さまがまだ早いとおっしゃっていたのかもしれないわね」

「神仏の御心ははかりかねますが、ただ当家といたしましては、お迎えするには早かったやもしれません」

「どういうこと？」

「五年前の戦で穢れたこの地が鎮まるまで……いえせめて、上洛される権大納言さまが江戸におもどりになるまでは、お待ちいただくがよかったかと」

（そっか、まだ上洛前なんだものね）

あこのいた世界では、権大納言秀忠は十万ともいわれる軍を率いて江戸を発ち、三月に佐和山に宿を取って京に入り、すでに将軍となっている。直継は立派に接待の大役を果たしたのだ。

「当家は道中と京の警護に当たっておりますので、いまは重臣の方々もいらっしゃいません。こと御婚礼となりますと、重臣不在の間にというわけにはまいりませぬゆえ」

「それはそうね。……でも本当にそんな日が来るのかしら」
あこはそのために江州にきたのだが、いまは遠い出来事のように思えた。
五月の江戸に帰り、もう一度学びなおそう。そして井伊家からの四度めの婚礼の話を待とう。婚礼はどれほど先になるかはわからないが、正室となるために学ばなければいけないこともたくさんある。時間はいくらあっても足りない。
だが、采女はおおきくうなずいて見せた。
「姫は先代さまが定められた当家のご正室です。慣れぬ場所でとまどいもございましょうが、家臣一同、お仕え申し上げる所存にございますれば」
采女の瞳は強くて優しくて、嘘がない。あこがこうして迎え入れられるのは鳥居家の娘だからではない。あこの資質のためでもない。直継に対する忠誠心ゆえだ。そして直継が捕佐役ふたりに大切に想われているのは、彼が当主たらんと努力しているからだ。
自分は、彼の隣にいることができるだろうか。いるにふさわしい人間になれるだろうか。
――それはまだわからない。今はただ、ふたりの想いが嬉しかった。
「ありがとう、采女殿」
（まずは右近殿に謝らなきゃね）
直継に謝って、江戸に帰る許しをもらって、狐のまやかしを抜け出して五月にもどる。すべてはそこからだ。
「ねぇ采女殿、右近殿はいらっしゃる？」

「それが朝から出かけておられるようです」
「おひとりで？」
一瞬、守勝の懸念が脳裏をよぎったが、
「いえ……たまさまもご一緒のようです」
采女は言い辛そうにその名を出した。
またもやたまに邪魔された形だが、あこは安堵した。今日一日、返答を先送りしただけかもしれないが、心の準備をする時間ができた。
「あの子のことは気にしないで。こっちでちゃんと片をつけるから」
もう一度たまと向き合えば先ほどとは違う会話ができると思った。違う会話でなければだめだ。今する話は五月に戻るためのものだが、五月に戻って輿入れとなればいずれまた顔を合わせることになる。奥向きを采配するのが正室の務め、小姑と張り合っているようではいけない。
采女の瞳はあいかわらず不安を隠せずにいたが、あこは「大丈夫よ」と気負いのない笑顔を返してみせた。
みずからに言い聞かせるように。

第四章　慶長十年二月二十八日深更

深き闇の底

歩みを進めるたびに、脛当てがず、ず、と音を立てる。

止め紐がはずれて地をずっているのだ。しかし鎧姿の男は意に介することなく、槍を杖代わりに、夜闇に覆われた山道を一心に下っていた。

――戦はどうなった。

自分は二の丸で徳川勢の突入に備えていたはずが、なぜ崖の下で意識を失っていたのだろう。見上げれば、城が跡形もなく消えていた。城を取りかこむ兵たちの鬨の声もしない。

――どういうことだ。

幸い山道は知らぬものではなかった。山の中腹から男が見つけたのは、等間隔に焚かれたかがり火だった。

――あそこは、たしか愛宕の……

男は曖昧な記憶を頼りに山を下りると、屋敷の門には白い幕が掲げられていた。黒で染め抜かれた家紋は見知らぬものだ。

――橘、か？

門衛の姿はなく、男は屋敷に入りこむ。庭を回ると、どすどすと廊下に踵を叩きつけるような足音が聞こえた。熊のような大男、あれに近づいてはならないと本能が知っていた。

あれは生気が満ちあふれている。自分たちとは相容れぬものだ。——そう、徳川との戦で自分は死んだのだ。しかしこうして現世によみがえった今、男は自分に必要なものを知っていた。力を得るために必要なのは生の気だ。しかし眩すぎてはこちらが消されてしまう。現世にいながら彼岸に心が近い者がいい。僧侶や神主など、神仏に仕えて徳を積んだ者ならなおさらだ。

「木俣さま」

呼び止める声に、大男がふり返った。

「采女か、どうした」

「午時、姫を彦根山にご案内くださったとお聞きしまして。御礼申し上げます」

膝をついた青年の澄みきった気配。澄んだ水は染まりやすい。極上の獲物だ。

——あやつさえ。目が眩むほどのあの者さえいなければ、食らってやるというのに。

「そちが礼を言う筋ではなかろう。わしはただ、ご内室となる姫に国を知ってもらおうと」

「右近さまに代わりまして、御礼申し上げます」

青年の強気な言葉に、大男はぽりぽりと頬を掻いた。

「当家の都合とはいえ、たび重なる延期の末にようやく来てくだされた姫だ。逃げ帰られてはかなわぬゆえな」

「……そう、ご覧になりますか」

青年の沈んだ声に、大男はにやりと笑みを浮かべる。

「いや、さすが彦右衛門殿のお血筋、愛らしい風情ながらも肝が太い。あれくらいでなくては

右近殿のお相手は務まるまいて」
それにあの姫は人をよく見ておるわとつづける大男に、青年は「それはようございました」と安堵の笑みを浮かべた。
「明日からは城にかかりきりだ。御上洛までに形にせねばならぬゆえな。あとは任せたぞ」
かしこまりました、と青年が頭を下げると、大男は足音を立てて去ってゆく。
――いなくなった……ッ！
塩水を飲んだように渇いた喉。それがあの澄んだ水――青年の血で潤せることを男は知っていた。なぜこの山の中で、しかも疲労困憊の身体で、あのように澄んだ水が維持できるのか。
――寄こせ、神の力……！
男は庭木の狭間から手を伸ばす。だが、青年が立ちあがって身を翻した瞬間、鞘に納まった脇差が光を放った。
『ぐ、あ……っ』
凄絶な光に目を焼かれた。男は顔を押さえてその場にくずれ落ちる。
苦悶にうめく男に気づくことなく、青年もまたその場を去った。

「おやすみなさいませ」

廊下でしのとかやが手をついて挨拶する。そして障子が閉ざされ、ふたりの足音が遠ざかる。ひとり寝所に残されたあこは、息を詰めて耳を澄まし、足音が聞こえなくなると大きな息を吐き出した。夜の挨拶は物心ついた時分からつづく習慣だが、このように緊張したのは初めてだ。

あこはまだ、朝のたまとの諍いについてふたりに弁明していない。直継が仲裁に入ったのだから侍女の間で噂になっていないはずがない。しかし、しのはあこの夕餉の給仕をしていた間も、その一件に関しては終始無言だった。

（まぁ、あれやこれや詮索されるよりはましだけど……口止めでもされたのかしら）

ふたりはあこの侍女だが、愛宕屋敷に厄介になっている以上、あこに筆敵する主がいる。相手がかやなら表情から事情を読みとれる。だからこそかやではなくしのが傍に付いていたのだろう。沈黙の夕餉は、今日の朝餉以上に重苦しいものだった。

（右近殿はもどってこられなかったのかしら）

直継がもどったら知らせてほしいと采女に頼んでおいたのだが、采女が帰参の報せを持ってくることはなかった。

本当にもどっていないのか、謝罪は受けぬという意思表示か。あこは単衣のまま寝所に正座して考える。呼ばれずとも行って真意を確認するべきだろうか。今日の一件を明日に持ち越して、ちゃんと謝れるだろうか。帰っていなくともこちらから出むいて、帰りを待って、謝るのが筋なのでは——

（もう！　わかんないわよそんなこと！）

今までのあこならば、『ぜんぶ明日よ明日！』と放り出してふて寝していたことだろう。

だが、それではいけない。おそらくこの問題に完全な答えなどなく、自分がどう考えてなにをしたかが重要なのだ。

なにが自分のしたいことなのか、どうすれば直継の心に沿うか。それを考えることが今の自分がすべきことだ。幸い夜は長い。江戸に帰ることになれば、駕籠で嫌というほど眠れる。今夜一晩くらい寝ずに考えるのもいい。

（とりあえず、風邪をひかないようにしなきゃね）

二月の夜はまだまだ冷えこむ。せめて掛け布にくるまっていないと体温を奪われる一方だ。

あこは傍らの寝具に手を伸ばす。そのとき、水桶に手を入れたかのような冷気を感じた。

（え、なに……？）

湯冷めではない。隙間風でもない。空気が張り詰めたこの感覚をあこは知っていた。

（たしか昨日も……）

あこは部屋中に視線を走らせる。と、部屋の隅に影があった。――鎧武者だ。

蠟燭の光に浮かび上がるようにそれはいた。黒革の鎧は泥と血にまみれ、脛当てが外れかけている。手には槍。名のある将は冑に意匠をこらしているものだが、首から上が――なかった。

（幽霊っ!?）

体全体を黒い靄のようなものがとり巻いている。鎧武者はゆらりとうごめき、一歩踏み出す

と槍を一閃させた。

風を切り、あこの眼前を鋭い刃が掠める。穂先にとらえられた燭台が断たれ、蠟燭の火が畳に落ちた。

「な、なんで!?」

落ちた向きがよかったのか、幸い火は燃え移らなかった。だが燭台が斬られたということは。

(わたしも斬られるんじゃないの!?)

首のない鎧武者はまたゆらりとうごめいて、あことの距離を詰める。あこは部屋の隅まで後ずさった。首がないだけに何を狙っているのかわからない。

月明かりはなく、残された燭台の灯りは鎧武者の陰となり、視界がきかない。

あこは、鎧武者の発する靄が自身の体を飲み込んでいくような錯覚に囚われた。いや、きっと錯覚ではない。このまま闇に飲まれたなら、自分はどうなってしまうのだろう。

震える指で桟を引っかけて障子を開こうとしたが、びくともしない。

(どうして!?)

獲物を部屋の隅に追いつめた鎧武者は、槍を上段にかまえた。逃げ場はない。

自身の帯にはさんだ懐剣に気づいたが、相手が槍では得物の長さがちがいすぎる。

(なにか、得物は……!?)

向けられた穂先から視線を離さずに探す。——あった。槍で上部を断たれた燭台が、畳の上で長い首を晒している。

あこは片膝を立て、槍が振り下ろされる機を読む。そしてその場から跳び、そのまま畳の上を一回転した。どこにも痛みは感じない。うまく避けられたようだ。

（よしっ）

転がりざまに折れた燭台を手にとり、身を起こして素早くかまえる。燭台の細い柄は熱を帯びていた。

頼りない灯のなか、鎧武者を凝視する。と、籠手のあたりに白い光があった。光に阻まれて槍を振り下ろせなかったらしい。光はすばやく飛びすさると、あこの前に下り立った。

光だと思ったのは微光をまとった白猫だった。

「たま？」

声に導かれるように白猫は光を放ち、人へと姿を変える。

「なにぼやっとしてるのよ！」

「好きでぼやっとしてるわけじゃないわよ！」

「そんな得物で相手になると思ってるの!?」

「他にないんだからしかたないでしょう!?」

（せめて刀か薙刀があれば！）

あこは歯噛みする。実家ならば必ず一振りは潜ませてあるものを。

たまは「しかたないわね」と呟くと、袖をひるがえした。部屋にまばゆい光が満ち、やがて一筋の光へと凝縮する。

宙空に浮いていたのは、一振りの抜き身の刀だった。
「これは……」
——わたしを使いなさいな。
たまの思念が響く。淡い白銀の光を放つ刀身に、あこは魅入られるように手を伸ばす。
わずかに反った刃。澄んだ刀身に映し出されるのは己の心だ。
あこは左足を引き、柄巻を握りしめて刀をかまえた。鎧武者はおどろおどろしい闇をまとってあこに向きなおったが、真剣の感触と向けた鋭い鋒に心が凪いだ。
武者は槍を構えて突き進んでくる。あこは畳に足を大きく踏み出した。
右下から切り上げて、一閃。
白銀の光が弧を描き、槍の柄が断ち切られる。次いで刃を返して切り下ろすと、鎧武者を光の軌跡がとらえた。鎧武者からくぐもった唸り声が漏れ、その身は白の炎に包まれる。
白の炎に熱はなく、武者を嘗め尽くして消え去った。それと同時に、あこの手のひらから柄の感覚が抜け落ちる。
「えっ⁉」
「もうっ、もっと丁寧にあつかってよね！」
たまは女童姿を取りもどすと、ぱんぱんと埃を落とすように衣をはらった。
「いまのは……」
「ご神刀よ。主さまでもないのに使わせてあげたんだから、感謝なさいな」

「どうして助けてくれたの？」
「出て行けとは言ったけれど、死んでくれなんて言った覚えはないわよ」
（崖で見殺しにしようとしたのは誰よ!?）
しかしあのとき、采女を呼んだのもおそらくたまだ。本気で崖から落とすつもりはなかったということか。「この屋敷でなにかあったら御家の名に関わるもの」と続いたのは、彼女なりの照れ隠しだろうか。
（それとも謝罪？）
あこにじっと見つめられてばつが悪くなったのか、たまはふいっとそっぽを向いた。
「――太刀筋は、悪くなかったわ」
「だって鍛錬は欠かしていないもの」
なんのためか、それは言わずとも伝わったらしい。
「腕っぷしだけの嫁なんていらないわよ。せめて主さまに迷惑かけないようにしなさいよね」
その一言は、前進と見るべきだろう。
廊下からあわただしく足音がして、障子が大きく引き開けられた。直継と采女だ。
「大事ないか!?」
采女は肩衣のままだが、直継は就寝前だったのか、寝衣の白小袖姿だ。
（ああ、この人はまたこんな恰好で……）
そう思ったとき、あこははたと我に返り、自身を見下ろした。

「……い、やあぁぁっっっ！」

あこは絶叫をあげてその場にしゃがみ、うずくまる。

（見られた！　絶対に見られた……っ！）

白小袖など下着も同然だ。しかも先ほど暴れたせいで着くずれている。嫁入り前の娘が見られてよい恰好ではない。

だが「どうした？」という直継の声は事情を理解していないらしく、「失礼いたします」と寝所に入り、打掛を拾って羽織らせてくれたのは采女だった。

「あ、ありがとう、采女殿……」

「お怪我などございませんか？」

「ええ、大丈夫よ」

鎧武者に襲われたときよりもよほど取り乱してしまった。あこは急いで打掛に袖をとおし、くずれた小袖の襟元と裾を直すと、居ずまいを正して手をついた。

「ご心配をおかけして申し訳ございません」

「いや、それはかまわないが……」

あこが取り乱した事情をいまだに察していないのか、直継の言は歯切れが悪い。

頭を下げながらあこは内心でつぶやいた。

（木俣殿安心して。女性問題はなさそうよ）

「あーん主さまぁ、こわかったですぅ」

たまが猫なで声で直継の袖にすがる。先ほどまでとはまるで別人だ。
「たま、世話をかけたな」
「いいえー、主さまのお願いですもの。なんでもお言いつけくださいな」
たまはあこを見やると、流し目で勝ち誇った笑みを向けた。――正直、むっとした。
一時停戦を見たものの、嫁と小姑の争いはまだまだ続きそうだ。
「ものは浄化されておりますが穢れがございます。お部屋を移された方がよろしいでしょう」
采女の言葉に直継がうなずき、采女はあこに向きなおった。
「姫、御手数ではございますが、いま一度湯浴みしていただけますか。穢れに触れられたやもしれませんので」
「わかったわ」
「この場は私が祓っておきますれば、右近さまは先にお休みくださいませ。――たまさま、お力をお貸しいただけますか」
たまは直継と一緒に部屋に下がるつもりだったのか、すこし渋る様子だったが、直継が一言「頼む」と告げると「はーい」とうってかわって明るい声をかえした。

二度めの湯浴みのあと、こちらでお休みくださいと案内された部屋は、廊下に面していなか

った。一部屋挟んだ襖の奥だ。
屋敷の最奥に位置するらしく、部屋につくまでいくつも廊下を折れた。「ここでいいわ」と案内の侍女を下がらせたものの、ここまでの道筋を覚えていない。一度手水に立ったら、迷ってもどってこられなさそうだ。
(でも朝からいろいろあったから、床に入ったら朝まで目覚めないかもね)
そんなことを考えながら無造作に襖を開けたあこは、それを目にするなり飛びすさった。
「な、なななんで右近殿がいるわけ!?」
「……自分の部屋にいてなにが悪い」
あきらかに不機嫌な声音だった。直継が感情をのぞかせるなどめずらしい。
(ってそんなことより!)
「ど、どうして右近殿の部屋!? わたし、こちらで休むように言われたわよ!?」
「奥にもうひとつ床を用意した」
たしかに薄紗のかかった衝立のむこうに、もうひとつ床がある。
(枕が並んでいなくてよかった……で、済む話じゃないわよ!)
この現状に、あこの頭は現実逃避ぎみだ。
「どうしておなじ部屋なのよ!?」
「ほかに適当な部屋がない」
「部屋ならいっぱいあるじゃない!」

ここにたどりつくまでにいくつもの部屋をとおりすぎてきている。
「普段寝所として使ってる部屋じゃなくても全然かまわないから！　こちらの部屋でもかまわないし、なんなら納屋でも庭でも廊下でも、厨でも厩でも……！」
気が動転しすぎて自分でもなにを言っているかわからない。
（だ、だって、おなじ部屋って……！）
直継はひとつため息をついて立ち上がると、灯りのない続きの間にいたあこの手を取った。
冷たい手のひらにあこは思わず悲鳴を上げそうになり、必死にこらえる。
「さっさと入れ」
手を引かれるままおっかなびっくり寝所に足を踏みいれると、否が応でも夜具に視線が釘付けになる。あこはふらりと目眩を覚えて、その場にへたりこんだ。
しかし直継はなにを意識する様子もなく、あこの手を解放すると襖を閉め、畳の継ぎ目の合間に抜き身の小太刀を置いた。
その瞬間、なにかが天井に向かって駆け抜けるような音がし、場の空気が変わった。だが部屋のうちを見わたしても、なにかが変わった様子はない。ふたりの影が壁や天井に伸びて、灯火にあわせて揺れているだけだ。
「今のは……？」
「結界を張った。そなたの部屋も注意していたつもりだったが、そこに現れたということはこの部屋以外は危険だ」

（普通は男の人のそばが一番危険なんじゃないの!?）

だが直継はそのことに気付いた様子はなく、一息ついてその場に胡座をかくと、首にかけていた手巾で髪を拭きはじめた。肩に落ちる髪は洗ったあとなのか、しとどに濡れている。あことおなじく風呂上がりかと思ったが、湯気はなかった。

（こんな夜中に行水？）

しかしまだ二月、昼でも行水するような季節ではない。

直継はじっと見つめるあこに気づき、「……どうした」と視線を向けた。

「あの、まさか、水を浴びたの？」

「ああ、怪に触れたから清めにな」

さも当たり前のように答える直継に、寒くないの？　と聞くのは場違いな気がした。

「あれを屋敷に連れこんだのは私の落ち度だ。今日は城跡のあたりを祓っていたからな。陽が落ちて、祓いのがしていたことに気づかなかった」

迂闊だった、と直継は吐き捨てる。

「もしかして朝からずっと？」

「ああ。評定を開こうにも重臣が出はらっている。佐和山のこの瘴気も、ご上洛までにどうにかせねばならん」

「右近殿みずから祓っているの？　あ、惣髪なのって……」

神職だからな、と直継は答えた。

（そういえば井伊家は祓いの家って……）

先代はその力を重宝されて家康の側にあったと、采女が言っていた。

普段は結い上げている黒髪は解かれ、いまは直継の白い頬や首筋に張りついていた。髪を下ろしていると女顔であることがよくわかる。横顔だけでも絵姿にできそうなのに、さらに紅でも刷いて流し目でもした日にはどれほど艶やかなことか――

「……ねぇ右近殿、もしかしてその恰好で部屋にもどってきたの？」

「そうだが、なにか不都合か？」

（ああもうこの人は！　無防備すぎ！）

女が寝衣姿を見られるのは恥だが、男の寝衣姿は見てしまったほうが目のやり場に困る。

（しかもこの顔よ!?）

単姿で歩きまわられて井伊家の侍女は卒倒しないのだろうか。しかし改める意思がないということは、不都合が起きていないということか。

（見ているうちに慣れるのかしら？）

そう思って見つめてみるが、直継が髪をふくために手をあげると袖口から細い手首がのぞき、ときおりうなじが露になり、組んだ足元はわずかに裾がめくれて足首が――

（ああっ！　やっぱりダメ！）

あこは顔に血が上るのをおさえきれず、目を逸らして打掛の袖で顔をかくした。

「右近殿！　とりあえずなにか羽織って！」

「滴で羽織が濡れる」
「羽織の心配はいいから！　小袖だけじゃ絶対にだめ！　風邪ひくわよ!?」
「だがそなたもさきほどは……」
「いやぁっ！　忘れて！　見たもの全部！」
あこが恥ずかしさに声を荒らげると、直継は「難しいな」とため息混じりにつぶやいた。
（難しくないから全然っ！）
袖の間からちらりと覗くが、直継があこの言を入れる様子はなく、わしわしと髪を拭きつづけている。
「……ね、ねぇ、右近殿はまだ寝ないの？」
「そなたが先に休めばいいだろう」
「いえ、わたしはそこで……」
あこは下座の床を指さした。先に休もうにも、直継が障子の前に腰を下ろしている。その傍らで横になるなどできるはずがない。
しかしあこが指さす先を見やって、直継はぽつりと呟いた。
「――おなじ床で寝るつもりか？」
「ち、ちちちち違うわよっ！　右近殿はあっち！　上座で寝て!!」
（どういう勘違いしてくれるのよっ!?）
心臓が暴れて口から飛び出そうだ。深い意味で言ったのではないあたりなおさら性質が悪い。

あわてふためくあまり声が裏返ったあこに、直継は冷静に「ものが入って来るとしたらここからだ」と、襖を指さした。
「こちらでは先に狙われる」
盾になるつもりだろうか。だが屋敷の主をさしおいて上座で眠るわけにはいかない。いくら当人が通常の感性からずれていても、主は主だ。
（いくら客人扱いでもそこは引けないわ！）
「わたしはそっちでいいから！　ていうかそっちじゃないと眠れないから！」
そう強く主張すると、直継は「そうなのか」と納得して場を譲った。だが直継は曲解しているにちがいない。つまり、あこは襖の近くでないと眠れない性質なのだ、とかなんとか。
（どこかで育て方をまちがえたんじゃないの!?）
あこは心の中で子育て熱心な守役を罵倒した。これは女性問題以前の問題だ。
「お、おやすみなさいませ」
あこは床に入る前に、指をついて就寝の挨拶をした。父でも夫でもない男性に言う言葉でもない。声が震えてしまったが、直継はさも当たり前のように「ああ」と受けた。
（人がどれだけ恥ずかしがってるか、ちょっとは察しなさいよ――っ！）
だがあこの思いをよそに、直継はどこ吹く風といった体で髪を拭きつづけている。
（おなじ寝所で女性とふたりだってのに、まったく意識していないってのはどうなの!?）
自分に魅力がないからだろうか、いやいや、いくら当人の方が見目がよかろうともこちらは

婚礼適齢期、もとい婚礼のためにきた女だ。変に意識されても困るが、意識されなさすぎるのはもっと困る。

家の主としてあれほど細やかな気遣いができるというのに、この状況は一体なんなのだ。すべてあの守役のせいだろうか。明日からの子育て相談は、答え方を改める必要がありそうだ。

あこが床に入ってほどなく灯りは落とされた。とはいえ、暗くなるように燭台を覆っただけで、灯は燈っている。揺らめく炎が壁に映るのが見てとれた。

そういえば、さきほども直継のすべらかな肌が灯火に照らされて――

(あー、思い出しちゃダメ!! あれは人じゃないわ。狐よ、狐! タヌキの孫でもいいけど、とにかく人じゃないの、男じゃないの! 意識しちゃだめ!)

あこはあわてて掛け布をかぶったが、はげしい動悸は収まりそうもない。

衝立に遮られて向こう側は見えないが、音は筒抜けだ。寝息を聞かれても困る。

(右近殿に先に眠ってもらわなきゃ)

眠ったかどうか耳を澄ましてみるが、寝息は聞こえなかった。

(そういえば今朝もこういうことが……あ!)

気が動転して忘れていたが、あこは直継に言うべきことがあったのだ。

もう眠ってしまっただろうか。しばらく息をつめていたが、沈黙に負けて声をかけた。

「……ねぇ、右近殿」

「なんだ」

間髪いれずに返ってきた。声の調子もしっかりしている。寝言ではない。
「今朝のこと……ごめんなさい」
沈黙の後に、「……ああ」と聞こえた。是とも否とも取りかねる声音だった。これ以上話す気はないようだ。
「――わたし、やっぱり江戸に帰ったほうがいい？」
息をひそめて、衝立越しに直継の息を探る。今日は直継の様子を探ってばかりだ。
しかし表情にも言葉にも出ない直継の心を知るにはそうするほかない。表向きしか顔を合わせない守勝ならまだしも、夫婦の間の会話を采女に説明してもらうわけにはいかないのだ。
「そなたは、ここにいないほうがいい」
氷の欠片を飲み込んだかのように、胸の奥がつきんと痛む。
それだけじゃわからないわ。今朝までの自分ならそう言っていただろう。
「……理由を、聞いてもいいかしら」
胸を押さえて、つとめて冷静に言葉を紡ぐ。
なにを言われても受けとめる覚悟はあった。五月の直継ともう一度やり直すためにも、聞いておいたほうがいい。
「元忠殿のお血筋ならば、他に良縁はいくらでもあろう」
それは山を下りるだけでなく縁談も白紙にもどすことを前提にした発言だった。――衝立があってよかった。面と向かって言われたなら、どのような顔をすればいいのかわからなかった。

だが続く言葉は、想像していたものとは風向きがちがった。

「好きこのんで当家に来ることもあるまい。それにこの地を去ればいずれ元の世界にも帰れよう。――そなた、迷い人であろう？」

「え？」

迷い人――山などに入って知らぬ地に出た人をそう呼ぶ。見知らぬ地、見知らぬ時から来たものを総称することもある。稀人とも呼ばれる。

（知っていたの……？）

「そなたが来た日、領内に異変があったことは気づいていた。采女を調べにゆかせたが、聞けば鳥居家の姫という。騙りかとも思ったが、ものであれば采女が先に気づく。あのとき私が触れても浄化される様子はなかったしな。文の行き違いも考えたが、侍女の言動から時を越えたのだと気がついた。たまは、迷い人ももの内だと邪険にしているようだが」

（あの子の嫌がらせはそのせいなの？）

直継があこに帰れと言っていたのも迷い人であるため――あこ自身を否定していたわけではなかったのだ。あこは大きく安堵の息を吐き出した。

たまの小姑っぷりは迷い人でなくとも変わらない気もするが、直継の問題は解決した。

（あら？　でもそうすると、わたしを二月に連れてきたのはあの子じゃないってこと？）

てっきり山で会った女童が原因だと思っていた。あの女童は絶対にたまだ。だが、たまがあこを迷い人であるがゆえに邪険にしていたなら辻褄があわない。

（どういうこと？　あの子じゃないとしたら、だれがわたしをここに……？）

「山で迷い人はめずらしいことではない。妖などおらずとも迷い込む。生者も、死者も、時も、命も、すべてが混沌とした地だからな。私自身、今がいつなのか定かでないときもある。山での一日は下での一日とは限らない。来た道も帰る道とおなじとは限らない。木俣などは、こちらにきてから狐に化かされどおしだと笑うだけで、けろりとしているがな」

（さ、さすが木俣殿……）

騙されたほうがあまりに報えないので、ものも近づかなくなったということか。

「だが母上は耐えきれなかった。元々勘の鋭い方ゆえな、そなたがただ人でないことにも気づかれたのであろう」

（ああ、だから……）

東梅院は、山に跋扈しているものが屋敷に入りこんだことに気づき、追い払いにきたのだ。

「そう、ごめんなさい。……わたしね、右近殿が言うとおり、べつの時間から迷い込んだみたいなの。ここに来るまでは五月だったのに、いきなり山桜が咲いているんだもの。おどろいたわ。でもね、五月になったら今度は迷い人じゃなくてちゃんとここに来るから――」

そのときは、受け入れてくれる？

そう訊ねる前に、直継が言葉を遮った。

「縁談は白紙にもどす」

「どうして!?」

あこは思わず身を起こした。だが衝立の向こう側、直継の気配は揺らがない。
「母上の姿を見ただろう。あのようになりたいか」
「……どういう、こと？」
「采女に聞かなかったか。祓いの血筋だと。力を守るために一族内で婚姻をくり返して血を保ってきた。だが母は一族の出ではない」
東梅院は松平氏の出だ。家康は功臣の松平氏の娘を養女にして、直政に嫁がせた。
「祓いの力は男に受け継がれるが、一族の女であればものへの耐性はある。だが、母はなにも知らず、言われるままにこの家に嫁いだ。私を宿したことでものの気配を感じるようになったらしい。母の目にはよほど強いものしか見えぬ。だが私は子どもの時分、母の前でものと話したり、祓ったりしたそうだ。自分の産んだ子がそのようであれば気が触れるのも無理もない」
母を狂わせたのは私だ、と直継は言った。それまで淡々と言葉を紡いでいたが、最後の一言には苦い想いがにじんでいた。
（じゃあ右近殿の言葉少なのは、東梅院さまのことがあったから……？）
直継には当たり前のように見えているものが、他の者には見えない。当たり前のようにできる浄化は、奇行にしかみえなかっただろう。むけられる奇異の視線。それが実の母のものであればなおさらだ。直継は、自分が人と違うことを知り、話してはいけないことを知り、距離を置くことを覚えた。
（――いつから？）

守勝は、直継の幼い頃の笑顔を見たことがないと言っていた。そのときすでに、直継は思いを内に秘めねばならないことを知っていたのだ。

「一族の外から迎えれば、そうなろうことは父もわかっていただろうに」

「直政さまだって、主命であれば断れなかったでしょう」

婚姻は家をつなぐものだ。譜代の出ではなく、親族の縁が薄かった直政にしてみれば、徳川家に居場所を与えられたようなもの。断れようはずもない。

しかし直継は「主、か」とつぶやいた。その声には嘲りの色がにじんでいた。

「あの者はこの血を手放したくなかっただけだ。だから婚姻で縛ろうとした。そういう男だ」

家康は直継にとっては祖父であり、主君だ。だが直継は怒りを隠せずにいた。

「この縁談は父の遺命だ。重臣たちが推しすすめてきたが、両家の絆はなにも縁組みでなくともよい。近いうちにそなたにもそなたの家にも障りのないよう白紙にもどす。このような血に縛られることはない」

「待って！　この縁談は直政さまがととのえられたものなんでしょう？　直政さまはご自身の血をよくご存じのはずだし、当時の我が家は家格的にもとても釣り合う家じゃなかったわ」

関ヶ原直後の石高は、井伊家十八万石に比べて鳥居家はわずか四万石、正室とするには釣り合いがとれない。

直政は、家康に重用されていたが旧臣ではない。井伊家は今川家の家臣で、徳川家へは直政の代になって仕官するようになった。代々徳川に仕える鳥居家と縁組みすることで、旧臣との

溝を埋めようとしたのだろうか。しかし直政みずから家康の養女をもらい、その間に生まれた子は家康の息子に嫁いでいる。もはや徳川家中で揺るぎない地位を確立していたはずだ。それに関ヶ原の戦の後であれば、家康の懐刀である直政と姻戚関係を結びたい大名は多かったことだろう。

「どうして相手が当家だったのか、お聞きしてない？」

「直接には聞いていない。父上とはろくに話をしたことがないゆえな」

（え？　直政さまと話をしたことがないってどういうこと？）

側室腹の何番めかの子どもならまだしも、直継は正室腹の男子、ほかでもない嫡子だ。

「お屋敷にいらっしゃったなら話す機会もあったでしょう？」

戦後処理で長らく不在だったろうが、関ヶ原で受けた傷が悪化してからは佐和山で療養していたと聞く。

「江州に戻られてからはもう床に臥せがちで、ほとんど顔を合わせる機会もなかった」

（枕元にも近寄れなかったってこと？）

おなじ屋敷で寝起きしているのに会えないとはどういうことだろう。あこの家で父が寝込んだりしようものなら家族総出で看病だ。

（たしかにこんなに広ければねぇ）

あこの家でも、父が家督を継いでからは家族そろって食事を取ることはなくなった。男女七歳にして席を同じうせずとはいうものの、家督を継ぐ前の身では、席を分けようにも食事部屋

がひとつしかなかったのだからしかたがない。
だが屋敷が広くなると、いつしか父とおなじ場所にいることはなくなった。屋敷の中にはいつも家臣がいる。家臣と話している間は仕事中であり、父である以前に鳥居家の当主だ。家臣の前で私的な会話を交わすわけにもいかない。
愛宕屋敷にも采女や守勝が当たり前のように出入りし、あこのような招かれざる客も滞在している。当主に私的な場所はない。
（もしかして、家族を知らない……？）
直継が物心ついた頃には、直政はすでに上州十二万石の城主だった。直継は心を開かないのではなく、生まれてずっとそのような場を知らないのではないだろうか。
「……ねぇ右近殿、今度、遠駆けにいかない？」
突拍子もない誘いに、わずかに沈黙があった。
「――そなた、話を聞いていたか？」
「ええ。けれどわたしは、桜が咲いてようがワラビが生えてようが右近殿になにが見えていようが気にしないから。それにもうモノノケも幽霊も見えちゃってるわけだし、今さら心配ないでしょう？　せっかく今は評定もないことだし、今度気晴らしに外に行かない？」
直継の返答はなかった。どのような表情をしているのか、衝立の向こうを覗きこみたかった。
直継はあこを否定したのではない。それどころか、東梅院のようにならないようあこのことを気遣って、江戸に帰れと言ってくれていた。あこは守勝のようにさりげなく心を支える術な

ど知らない。だが、昼に守勝が遠駆けに誘ってくれたとき、とてもうれしかった。一緒にいたいと伝えること。それだけでも力になると教えてくれた。

しばらく待っていると、「そなたは……」と言いかけて、止まった。いつもと違う、息を詰めたような掠れた声だった。

「右近殿？」

しかし返事はない。眠ってしまったのだろうか。耳を澄ますが寝息は聞こえない。——寝息ではない。喉から絞り出すような、細い息が聞こえた。

「右近殿!?」

燭台の覆いを取って衝立の向こうを見ると、直継は床の上で身を丸くしていた。

あわてて駆け寄り肩に触れると、小刻みに震えていた。首筋に汗が浮かんでいる。

「右近殿しっかりして！　だれか、だれかっ！」

「もう大丈夫でしょう」

采女は穏やかな息遣いで眠る直継を前にそう告げ、あこはほっと胸をなでおろした。

先ほど、人を呼んだものの誰も来ず、あこは襖の引き手に指をかけた。その瞬間、ぱしっと光にはじかれたが、小太刀を退けると光は消えた。それで人を呼びにいくことができたわけだが——

「采女殿がいてくれて助かったわ」

采女はこの部屋に入るなり、直継の肩を支え、瓢形の白い陶器から水らしきものを直継の口元に流しこんだ。そして采女が部屋の四隅に符を貼ってなにやら唱えると、さきほど直継が結界を張ったときとおなじように、突風が耳元を駆け抜けたような音が聞こえた。ほどなく直継の震えもおさまり、呼吸も落ち着いて、今は眠りについている。

だが落ち着いたとはいえ、顔色の悪さは見てとれる。ただでさえ白い顔から血の気が失せて、唇の色は肌に溶けそうだ。

「右近殿はどうなされたの？」

「疲れが出たのでしょう」

「疲れ？　それだけ？　あんなに苦しそうだったのに？」

普通の発熱とは思えない。肩は震え、必死になにかの痛みを抑えていた。そのままはかなくなってしまうかと思ったほどだ。

だが采女は淡々と答えた。

「祓うということはそういうことです。自身の力で浄化するか、もしくは自身のなかに取りこんで消滅させるのですから、心身が及ばなければ飲まれます」

「飲まれるって？」

「東梅院さまの御姿を覚えておいでですか」

「あ……」

「先日の一件は、弱き心を飲まれかけている状態です。飲まれまいとする気持ちから、ものに過敏になっておられるのでしょう。右近さまは己の意識がありますから大丈夫です」
「そうなの？　でも、そうしたら直政さまは……」
戦傷を負った身を、ものが跋扈する佐和山で療養するのはよくなかったのではないか。
（それどころか……）
その想像は口にできなかった。采女もまた返答しなかった。
単なるあこの想像かもしれない。だが現実にこの地であったやもしれないことだ。あこは背筋に冷たいものが這い上がるのを感じた。
采女は直継の寝顔を見つめ、ぽつりと漏らした。
「ここ数日、ご無理をなされていたので、気になってはいたのです。あと半月もすれば将軍家のご一行がおいでになります。間違いがあってはいけないと、最近は夜を徹して祓うこともありましたので」
「え。じゃあ、午に寝衣姿だったのも……」
「ええ。あの日は明け方までずっと」
寝坊ではなかったのだ。木俣の案じていた夜歩きはこのことだったのか。
「特に今月は先代さまの年忌もございましたし、疲れが溜まっておられたのでしょう」
「そう……。ねぇ采女殿、右近殿の容態が安定しているというなら、あとはわたしがついているわ。采女殿は休んでちょうだい」

「姫？」

「右近殿が徹夜だったということは、采女殿だってそうなんでしょう？」

めずらしく采女が返答を詰まらせた。采女を黙らせたのははじめてだ。よほど疲れが溜まっていたのだろう、そうでなければ不意をついても笑顔でかわされていたはずだ。

「ですが、姫も長旅でお疲れでしょう」

「わたしなら大丈夫。今日は木俣殿と山登りをしてきたくらいだし、体力には自信があるの。そんなとりこみ中だって知らずに昨日は迷惑かけちゃったし。だから采女殿も休んで。ね？」

采女はしばらく逡巡していたが、「では、これを」と腰から脇差を外し、その場に置いた。

「私が先代さまからいただいたものです。守り刀になりましょう」

「でも、そうしたら采女殿は……」

「もう一振りございますれば」

采女は腰に佩いた黒塗りの鞘を示す。

「我らの力は水神に由来します。水気を絶やさぬようお気をつけ下さい。――右近さまを、よろしくお頼みします」

采女はいつにも増して丁重に礼をし、部屋を辞した。

あこは采女の背を見送り、直継の寝顔を覗きこむと、赤みを帯びた灯火の下でさえ憔悴の色が見てとれた。

（直政さまもこんなふうに……？）

部外者のあこでさえ気づいたことを、采女や直継が気づいていないはずがない。
（だから大御所さまを憎んでいるの？）
死気に穢れたこの地が直政の命を削った。そして今もまた、井伊家の血が直継の命を削っている——己が父を殺した宿業の血が。
だが采女の結界が効いているのか、先ほどよりは呼吸が落ち着いている。白い肌には色みがもどり、寒気がひいて涼を求めたのか、直継の手が掛け布から覗いた。
（ああ、出ちゃってる）
その姿が幼い弟妹の寝姿とかさなり、思わず口元がゆるんだ。直継の寝顔をじっくり見てみると、大人びた目の印象が強かったのだろう、思っていたより幼く見える。
（まだ十六になったばかりなんだものね）
湧きあがる笑みをこらえながら、直継の手を掛け布に収めようとした——その瞬間。直継の指があこの手をつかんだ。
（えええええっ!?）
つかむ力は強くはない。直継が目覚めた様子もない。要は赤子の手に触れると無意識に握りかえすのとおなじだ。
ゆっくりと手を引き抜けば、眠りを妨げることなく逃れることもできただろう。
だがあこは直継につかまれるままにまかせた。
（……ねぇ、どんな夢を見ているの？）



夢の世界ではこうしてすがる先はあるのだろうか。素直に救いを求めるのだろうか。現実の世界では、たとえ助けが必要でも、直継がこうして助けを求めるとは思えない。

（わたしはどんな風に見えているの？）

直継は意識を失う前、あこになにか言いかけていた。失われた言葉の先はなんだったのか。

（どうせ、おかしいとか変わってるだとか、そんなところだったんでしょうけど）

とても褒め言葉がつづいていたとは思えない。――けれど、今はまだいたらなくとも。

いつか、目覚めている直継にこうして必要とされる日が来るのだろうか？

直継の額にもう一方の手を載せると、汗で張りついていた髪がこめかみに落ちた。

井伊家の名、祓いの血。直継が背負っているものの重さはあこにはわからない。

（ただ、今だけは……）

つかまれた手を握り返しながら、直継におとずれた眠りが穏やかなものであることを祈った。

采女が馬房に近づくと、眠りについていた馬たちがいっせいに鼻を鳴らした。

小声でなだめつつ、自身の馬を牽いて厩から連れ出す。鞍にまたがると、馬は眠気をおいやるように身をふるわせた。

供もなく、足元を照らす月の光もない。このような闇夜にはあの日のことを思い出す。

山桜の蕾がほころびながらも、思い出したように雪が舞った夜だった。

それから三年あまりの月日がたち、明後日は月忌法要が営まれる。先の年忌にはすべての重臣が集まり、それを終えていっせいに江戸や京へと散った。今回の法要は人も少なくそれほど大掛かりではないが、井伊家に連なる者として采女の仕事は多い。

宿直したほうがよいかとも思い、屋敷をふりかえる。だが今日の愛宕屋敷の様子をみると、己の屋敷も気がかりだ。采女は雑念をふりはらい、馬の腹を蹴って足を進ませた。

家臣の屋敷は佐和山に点在しており、采女の屋敷は二の丸近辺だ。琵琶湖に面して位置する愛宕屋敷からすると山の裏側にあたるが、並足でも小半時とかからない。

途中、廓を通りかかると、ものの残り香を感じた。馬もまた感じ取ったのか首をふり、采女は馬首をたたいてなだめる。

佐和山城に使われていた資材は続々と彦根山へと運ばれているが、なにかを動かすたびに戦の爪痕が姿をのぞかせる。今日はいったいなにが出たというのだろう。いつも直継の傍を離れない竜神が、直継の部屋に結界が張られたことを察するやいなや、「主さまもお休みになったようだし、わたしも休むわね」と姿を消した。疲れを癒やしに湖にいったのだろう。今日、直継についてゆかなかったことが今さらながらに悔やまれる。

（そろそろ朔か……）

水を守護する竜神は月の影響を受けやすい。しかも今は二月、水気が衰える時季だ。彼女が慎重になるのも無理はない。三年前の朔の日、弱まった結界の隙をついて将がよみがえった一

件は、いまだに深く心に傷を刻んでいるはずだ。

その将は采女の初めての戦の相手でもあった。

会津攻めでは戦端が開かれず、岐阜、関ヶ原が采女の初めて臨む戦となった。その数日後の佐和山攻めでは采女は監軍だった直政に付いて、ほど近い高宮の地より天守の炎上を見つめた。翌年にその山に住まうことになろうとは、なにが起こるかわからないものだ。

――万千代を頼む。

その声音は、いまも耳の奥に残っている。関ヶ原の合戦のあった晩のことだ。

直政は戦で銃弾を受け、落馬した。夜には意識がもどったが、銃弾は右肘に止まったまま、とても動ける状態ではなかった。だが直政は気丈にも身を起こし、翌日の進軍を指示し、側仕えの采女にはその場に残るように告げた。

采女は命じられるままに、直政の傷口に結ばれていた布を取った。元は白であった衣は血の色に染まって赤一色の鎧に溶けこみ、この失血では命に関わることは明白だった。

だが直政は、痛みにも表情ひとつ変えず、自由になるもう一方の手を傷口にかざした。采女はこのとき初めて、その力を目のあたりにした。

かざした手のひらに光が満ち、傷口に注がれる。みるみるうちに血がかたまり、抉られた肘の肉が盛りあがっていった。直政の体内になにかが棲みついているのかと思ったほどだ。

『そなたもこの血を継いでいるな』

采女も自身に力が宿っていることは知っていた。井伊谷の出であれば知らぬことではない。

井伊家の祖、共保公が継いだのは竜神の血だと。

それまで巫女が司っていた神事は、共保公以降は井伊家当主の務めとなった。そうして六百年、力の源である血を失わぬように一族内で近親婚をくり返し、竜の血は脈々と受け継がれた。

采女の父は井伊谷の出、井伊家とは近しい縁戚ではなかったが、おなじ地に住んでいれば血の交流はある。兄弟のなかでは次男の采女がもっとも色濃く力を継いだ。

『そなたも井伊を名乗れ』

だが力を継いだとはいえ、采女の力は直政のそれとは比べものにならない。一度は辞退した。しかし、主君の口からこぼれ落ちた名に、抗うことができなかった。

『万千代を頼む』

万千代――直政の嫡男の名だった。

年は采女のふたつ下、だが体つきは年より幼く、病がちであることは家中の誰しもが知っていた。細身の直政よりさらに線が細く、はかない印象があった。それが強すぎる力を継いだための弊害だと知っているのは、井伊谷の一部の者だけで、守役の木俣ですら知らぬことだ。

穢れを清め、みずからを癒やす力。それは穢れの中ではみずからの身を苛む諸刃の剣だ。当時の所領である高崎は、戦場になったこともあり、清浄とは言いがたい場所だった。

『あれは我が嫡子、城から出して育てるわけにはゆかぬ。そなたが補佐せよ』

口調は命令だったが、瞳にあったのは穏やかな光、父としての顔だった。

采女は、万千代に降りかかるすべての災厄をこの身に引き受けることを誓い、井伊の名とと

もに一振りの刀を与えられた。名を戴ける力を有して生まれたことが誇らしかった。

その晩から一年あまり、直政が亡くなると万千代は名を直継と改めた。井伊の名を継いだ采女は、直継と年が近いこともあり、必然的に説明役を押しつけられた。先代のその位置付けにあった守勝は、苦労もわかるのか、いろいろと気にかけてくれる。

『兵部もとかく感情を出さない性質であったゆえなぁ。目じゃない、目元だ。眉で読め！』

そう吹きこまれた事の真偽はさだかではないが、直継が考えごとをするときに眼を伏せるしぐさなどが直政の姿にかさなり、采女は言葉を失うことがある。

直政が亡くなって三年がたち、家中はようやく直継の元で落ち着きつつある。采女は筆頭家老鈴木家の出、しかし井伊家の人間として父と守勝との間を取り持っていることで重臣二人の意思の疎通が図られ、家中はおおむね穏やかに回っている。

（だが、まだ三年……）

抜け落ちた欠片の大きさを、いまだに誰しもが感じている。

なつかしい面影が脳裏をよぎり、采女は頭をふった。今日はやけに記憶に引きずられる。きっと疲れのせいだろう。早く帰って休もうと馬の腹を蹴ろうとしたそのとき、采女はとっさに手綱をひいた。馬の甲高いいななきが、深夜の山にこだまする。

真正面、細い道にひとりの男がたたずんでいた。松明を掲げてみると武士らしい。

結い上げた長い髪。結わえているのは赤一色の組紐だ。

「まさ、か……」

後ろ姿でも見間違えるはずがない。采女はすぐさま下馬して駆け寄った。
「殿！」
男がふり返るとざっと一陣の風が吹き、風になびく髪が男の顔を隠した。
次に風が収まってあきらかになったのは、采女の記憶にある顔だった。ただし十年以上、おそらくはそれ以上に昔の。
生前から年齢を言い当てることが困難な顔立ちではあった。しかし若すぎる。しなやかな若木がようやく伸びきった頃、せいぜい今の自分とおない年くらいだ。
「殿……？」
男は重さを感じさせない足取りで向かってくる。そして神経を張り詰めた采女に頓着することなく、采女の脇をとおりすぎた。采女は呆然として、ふり返るのが遅れた。その隙をついて、采女の首に腕がまわされた。薄紗がまとわりついたように、そこには肉体の重みはない。
『――手放したのか』
耳元で声がする。その声はたしかに知っている。しかしなつかしい記憶と我が身を取り囲む妖気の整合性が取れず、混乱する。その妖気はあこを襲った鎧武者とは比べものにならない。妖気の正体は闇。この地に満ちる瘴気そのものだ。首に巻きついた妖気が這い上がり、顎をつたって采女の口の中を侵蝕する。
「か、は……っ」
采女は口元をおさえ、もう一方の手で腰元を探る。だがそれをつかむことはできなかった。

いつもそこにあるはずが、指は空をつかむ。

（脇差が……！）

湿り気を帯びた妖気は胃の腑まで入りこむ。しかし吐き出すことは適わない。

采女は震える指先で胸元をつかみ、荒い呼吸をくりかえしてよろめいた。口腔から血があふれる。

『――土を捲き重ね来たらば、未だ知るべからず』

耳元でささやかれ、次に采女が眼をあげたとき、そこに宿る光は先ほどまでとあきらかにちがっていた。

流水のように澄んだ、冷たい光。

馬は異変に気づき、じっと采女を見つめながら尾をふって威嚇する。しかし、采女の瞳がふと穏やかさを取りもどし、「なんでもない」と馬首をたたくと、馬は平静をとりもどした。

采女はふたたび馬に乗り、己の屋敷へと歩みを進める。

その場に残された血に惹かれ、暗闇に棲まうものが彷徨いでてくる。

ものは血の一滴までもすすりとり、己の中へと取りこむと、また重くたれこめた夜闇へと姿を消した。

第五章　慶長十年二月二十九日朝　未だ夜明けは遠く

明けぬ夜に射す光は、血塗られた記憶を連れてくる。

『守れ……近江の、国つ……神……』

月なき夜に部屋を満たす光。そのなかで聞いた声は幻だろうか。それとも最期の言葉か。

光の記憶は血で終わる。眼前にひろがるのは、闇に溶けるような朱。

父は寝衣を朱一色に染めて、息絶えていた。

（これが、望みだったのですか）

鎧ではなく単衣を朱に染め、戦場でない場所で果てることが。

（これが望んだ終末ですか）

石田治部の影は消え失せたが、魂を失った肉体はものの恰好の餌食だ。しかし殯の宮となった室内に、ものが入ってくることはなかった。満ちているのは静謐な空気。

――ああ、結界だ。

それこそが自分がここに呼ばれた意味、自分に与えられたたったひとつの務めだというのに。父の亡骸にすがって泣く母の姿を見にきたわけではないのに、すべて采女にまかせてしまった。

終に物言わぬ身となった父に、母はなにを求めてすがっているのだろう。自分はなにを求めて立ち尽くしているのだろう。

（父上はなぜ……）

答えは永遠に失われたというのに、その問いだけが虚空をめぐりつづけている。

安定した呼吸の合間に、ながい睫毛がかすかに揺れた。

「右近殿？」

言の葉に導かれるように、かたく閉ざされていた瞳がゆるゆるとひらく。

（緑……翠？　碧？　ふしぎな色……）

朝日の下で見る直継の瞳は、見たこともない色合いをしていた。しばらくぼんやりと周囲をさまよっていたが、あこの姿をとらえて凝視する。やがて瞳は焦点を結び、直継の心が夢の底から浮きあがると、緑の色みは黒の瞳の奥へと消えていった。

「――なぜそなたがここにいる」

「昨晩のこと、覚えてないの？」

「昨晩？　……いまは、いつだ」

直継の問いかけに、あこは「え？」と問い返した。

迷い人の自分ならまだしも、直継はなにに迷ったのか。しかし直継は周囲に目を走らせると、状況を思い出したらしい。

「ああ、そうか……そなた、ずっとついていたのか」
直継は言いながら身を起こす。弱みを見せない顔、人を拒絶する声、伸ばした背筋、いつもの直継だ。ぼやーっとしているほうがかわいいのに、と思ったことは内緒にしておく。この様子では、明け方ちかくまであこの手をつかんでいたことも覚えていないのだろう。
「ええ。もう起きて大丈夫なの？」
まぁなと返す言葉がそっけないのはいつもどおりだが、切れがない。息も熱っぽい気がする。
（やっぱり調子がよくないんじゃないの？）
「朝餉とか――」
食べられそう？　と発しかけた言葉は、乱入者にさえぎられた。
「主さまぁ、お目覚めですかぁ？」
「たまか」
それだけの言葉の中に、安堵の響きがあった。
（化け猫のほうが頼りなわけ!?）
「はいはい～、用のない小娘は、出ていきなさい、なっ！」
あこは腰を浮かしかけていたところを突き飛ばされ、転がるようにして部屋から出される。
（なんなのよ!?）
ふり返ってにらみつけたところ、女童はあこの鼻先でぴしっと襖を閉ざした。
（あの化け猫～っ!!　ふんづかまえてやるわ！）

だが、襖に手を伸ばしかけたとき、廊下から声がかかった。
「姫、おはようございます」
障子越しの影でも、背筋を伸ばした居ずまいに無駄がないのがよくわかる。
あこは奥の間の邪魔にならないように、障子をあけて廊下に出た。
「おはよう、采女殿。昨日はゆっくり眠れた？」
「ええ、おかげさまで」
采女はそう返したが、いつもより声も笑みも硬い。
（無理しているのかしら。まぁ、問いつめても白状しないんだろうけど）
こんなに早くから出仕して、休めているはずがない。眠れたのはせいぜい二刻だろう。
「殿のお加減はいかがでしたか」
「昨晩ほどじゃないけれど、まだ顔色がよくなかったわ。くわしく容態をお聞きする前にあの子に追いだされちゃったけど――あ、采女殿の脇差！　返してもらわなきゃ！」
あこは采女の腰に太刀一本しか佩かれていないのを見てとり、あわてて腰を浮かす。昨夜は借りてしまったが、武士にとって刀は自身の体も同然、そうそう手放してよいものではない。
「いえ、それはかまいませぬゆえ――」
采女があこを追って部屋に足を踏み入れると、その身がふらりと傾いだ。采女はすぐに膝で支えてなにごともなかったかのように取りつくろったが、あこはたしかに見た。
（ああもうっ、この人たちは！）

どうしておとなしく休もうとしないのか。形のちがいこそあれ、このふたりは真面目すぎる。
（しかも頑固だし！　意地っぱりだし！）
弱みなど絶対に見せない。根は真面目なのにくせ者なのが小憎たらしい。
（どうすればいいのかしら。えーっと、采女殿の性格としては……）
あこはなけなしの知恵をしぼりだす。せめて守勝くらいには策士にならなければ。しかし豊臣家の軍師だったという外祖父の血は、今のあこにはなんの役にもたたなかった。
（搦め手がダメなら正攻法よ！）
「ねぇ采女殿、わたしの言うこと聞いてもらえる？」
「いかがなされました？」
あこは采女の瞳をまっすぐにとらえると、にっこりと笑みをつくってみせた。
「いますぐ屋敷に戻って寝なさい。これは命令よ？」

「主さま、大丈夫ですか？」
たまが床のかたわらに膝をつき、直継の顔をのぞきこむ。姿かたちは十才の女童だが、その瞳に宿る光は年相応のものではない。先ほどまでのにぎやかさはかけらもなかった。
直継は「ああ」と答えたものの、目眩をおぼえて手のひらで額を押さえた。

「もう、無理しないでくださいませ」

素直に不調を訴える性質でないことは、とうに知れている。肩を抱きよせられるままに、直継はたまの膝の上に頭を乗せた。

「外の様子はどうだ」

直継は屋敷にいても佐和山全体の気配を感じることができる。しかしいまは、強靭な結界のせいか、外の様子がまったく読めない。外は気にせずに休めというたまの無言の圧力だ。そうわかっていても、放置はできない。

「大きな問題はありませんわ。……まだずいぶん熱がありますね。昨日の祓いはどれほど途中で止めようと思ったことか。しかも帰ってからおとなしく休まれたのかと思えば、迷い人を側に置かれていたなんて。そのせいで体調をくずされたのでしょう？　あの娘はっきり言って害です、害。さっさと追い出してしまえばよいものを」

迷い人はものではない。しかし穢れによって生み出される世界の歪みをはらんでいる。迷い人が本来の世界に戻ろうとする縁は、この世界にさらなる歪みを生みだす。歪みから入りこむ穢れは祓いの血には害となる。色濃い血を宿す直継にあたえる影響は大きい。

「許嫁を放り出すわけにはゆくまい」

「主さまの許嫁は江戸にいます。あの娘ではございません」

たまの言葉は直継の心に重く響いた。

定められし相手――鳥居忠政の娘。だが彼女は自分の許嫁ではない。

はじめて会ったときから、迷い人であることは知っていた。だが姿はおなじ、隔たれた時も二ヶ月であれば性格も大差ないだろう。ちがう時の流れに生きているとはいえ、おなじ星の下に生まれた者だ。江戸にいる許嫁はこのような女性なのかと思った。

彼女は真っ直ぐすぎる性格で、正室として奥向きをあずけるにはいささか不安がある。だが物怖じしないところは悪くない。采女と守勝の彼女に対する評価も、おおむね好意的だった。父の死を気遣われていたと知ったとき、正直、迷い人でなければと思ったのもたしかだ。

だが、たまの言うとおり、自分の許嫁は彼女ではない。江戸にいる鳥居忠政の娘だ。

迷い人は元いた時間と縁がある。この時間に迷いこんだ原因をとり除けば、縁にひかれるまま元の世界に帰ることが多い。逆に今の時間と縁を深めると元の世界に帰り難くなる。

見る、話す、触れる、想いを寄せる、それらはすべて縁となる行為だ。好奇心の強い彼女のこと、おとなしく屋敷に閉じこもってはいないだろう。へたにこの世界について知ろうとせぬように、家中の侍女、そして彼女の連れてきた侍女ふたりにも、先日の朝の一件を理由に口止めした。そして一刻も早く元いた時間に帰してやらなければと、この二日間、直継は原因らしきものを祓いつづけた。だが結果として彼女はまだこの世界にいる。

迷いこんだ世界との縁が強まるほど、元いた時との縁が薄れる。もどるべき時を見失えば本当の時迷い人となり、自身の足元を見失い、心を失い、やがてものに飲みこまれかねない。

（……いや、そのような懸念は無用か）

「――きつく言ったつもりなのだがな。それでも聞かぬのだから仕方あるまい」

知らず、その言葉とともに温かい吐息が漏れた。

命知らずにも佐和山を散策していたあこに、自分は厳しい言葉を向けた。翌日、彼女は泣きはらした目をしながらも祖父を愚弄したたまに食ってかかり、自分を気遣い、そして言った。

『桜が咲いてようがワラビが生えてようが右近殿になにが見えていようが気にしないから』

不思議な娘だと思った。発作に襲われ伝えることは適わなかったが、守勝並みの神経だ。襲いかかる難関すべて、『気にしないわ』『やるしかないでしょ』の二言で乗り越えていきそうだ。

彼女ならば己を見失うことはないだろう。――その強さをうらやましく思った。

本来いるべき場所から離れても強さを失わない彼女と、いるべき場所にいながら漂いつづける自分。己の心は過去に留まったまま。気がつけばあの時に立ち尽くしている。

「……父の、夢を見た」

いつの夢かは言うまでもなかった。

たまは今までに多くの当主の死を見送ってきたはずだが、父の死はことのほか報えているようだ。――そう、彼女に墓前に言いなさいと言われただけで心を凍てつかせるほどに。

「力を与えたこと、うらんでますか？」

沈むたまの声に、直継は「いや」と答えた。たまにとって父が特別なのは、負い目を感じているからだ。そうと知りながら責められるはずがない。

「そなたがいなければ、父は嬰児のうちに亡くなっていた。父が無事成人し、私が生まれたのはそなたのおかげだ。私が割り切れないのは、あの男のことだ」

父の不幸は、あの男――徳川家康を主としたことだ。箕輪、高崎、そして佐和山。あの男は父に宿る力を知り、戦場となった城を与え、死の穢れを浄化させた。

本来であれば関ヶ原で鉄砲傷など負ぅこともなかっただろう。たとえ負ったとしても、身体が万全であればその場で癒やすことができたはずだ。初衣から直接力を享けた父には、それだけの力があった。だが父は戦場で被弾し、意識を失った。そこまで父を疲弊させたのはあの男だ。

「佐和山へは、心身を癒やしてからもどられても遅くはなかったろうに」

父は、関ヶ原と佐和山の戦を経て上洛し、しばらく京に留まっていた。およそ千年にわたり帝のおわす京。その浄化の力は他の比ではない。穢れなき地は、父の身を癒やしてくれたはずだ。だが父は、傷が癒える前に佐和山に戻ってきた。あの男の命だったという。

あの男は戦乱の世を勝ち残った。父があの男を主君と仰いだことは誤りではなかったのだろう。だがあの男は、忠義を尽くすにふさわしい人間だったのだろうか？

今際の父の声が、今も耳から離れない。そして、その父の死を穢す言の葉も。

――かの赤鬼も怨霊にはかなわなんだか。

――治部少は死して赤鬼を討ち取った。

――佐和山は赤鬼を喰らった鬼の棲処ぞ。

父は関ヶ原の傷が元で亡くなった。しかし佐和山入城より一年あまり、戦場ではなく畳の上で果てた父を揶揄する声があった。敵将の居城で命を落とせば、そのような風聞が立つのも無

理もない。そのことをあの男もわかっていたはず。当人である父はなおさらだ。それを何故、あの男は佐和山行きを命じたのか。父はなにを思って命を受け、あのような最期を迎えたのか。

彼女はたまに祖父元忠の死を侮辱されたとき、真っ向から反発した。祖父の信念を信じ、まっすぐに祖父を誇りとできる彼女がうらやましかった。

（父上はなぜ――）

そのとき、不意に直継の視界が閉ざされた。

「たま？」

女童の手のひらは小さく、片手では両目を覆いきれない。瞼に触れる指先は冷たかった。

「きっとお疲れなのです。いまはゆっくりお休みくださいませ」

子どもの喉でつむがれる細い声。しかし子どもらしからぬ情の深さがある声音に吸いこまれ、直継は眠りに落ちていった。

「あー、今日もいい天気だったわね」

馬上、あこは傾きはじめた太陽を見あげる。すると采女は、並び歩く栗毛の上から「申しわけございませぬ」と頭を下げた。べつに誰も責めていないわよ？　くらい言ってもよかったのだろうが、采女も悪気があったわけではない。

「右近殿が寝ついて仕事が増えたのはわかるけど、すこし木俣殿にふってみるとか」
守勝は直継の不調を聞いてもおなじように彦根山に出かけ、采女も引き止めなかった。
「木俣さまは天守造営が急務ですので」
「場合によるでしょ。下準備とか確認とか、こまやかな仕事が嫌いなだけなんじゃないの？」
すると采女は穏やかな笑みを絶やさず、しれっと答えた。
「適材適所です」
（ああ、やっぱりかなわないわ）
今朝、あこが休めと言ったとき、采女は「明日は月忌にて、法要もございますれば」と穏やかに逃げをうった。無論、客人のあこに井伊家の人間である采女に命ずる力はない。だが、ここで正論を出して断る人ではないことも知っている。それを逆手に取ったのだ。
「今日倒れるのと、法要の当日に倒れるのと、どちらがいい？」
あこが笑顔を絶やさずに押し切ると、わずかの逡巡ののち「では、引き継ぎしてまいります」と殊勝に返した。だがここでだまされてはいけない。引き継ぎと称して仕事を片付けてくるにちがいない。そこで「じゃあわたし、采女殿のお屋敷までご一緒するから。部屋でお待ちしているわね」と返したのが今朝の話。昨夜の看病疲れもあったのか、あこは采女を待っている間に寝入ってしまい、目覚めたときにはもう陽が傾いていたという按配だ。
（結局仕事をこなしちゃってるし。まぁ、倒れていないからいいけれど……）
思い浮かぶのは血の気を失った直継の面だ。今朝はましにはなっていたが、聞けば直継は今

日一日、寝所からまったく出てこなかったらしい。
「右近殿は大丈夫かしら」
「明日の法要にそなえて大事を取られたのでしょう」
「直政さまが亡くなられて三年になるのね……ねぇ采女殿、昨日の続きを聞いてもいい？」
「どの件にございましょう」
「昨日、心身が弱っているときにものに触れると、飲まれるって言っていたでしょう。じゃあ右近殿が佐和山にいるのもよくないんじゃないの？」
「そうですね。井伊家の血はものを祓う力もございますが、ものに狙われやすくもありますから。お身体を思えば山を下りられたほうが賢明でしょう」
「じゃあ、直政さまだってそう……だったのよね……？」
言って、あこはうつむいた。答えを真正面から受け止める自信がなかった。
しばし沈黙があったが、采女は「そうですね」と漏らした。
「死を、覚悟の上だったと思います」
その答えにあこは次の言葉を失い、馬の足音だけが陽の翳りはじめた山中に響いた。
「……それでも祓う必要があるのかしら」
「共存できる存在ではありません。それに治世者にとってはみずからの統治の届かぬ地があるということは許し難いことですから。従わぬものは存在自体が悪、消し去るべきものなのです。――現世に生きる者の身勝手な都合ですけれどね」

「え？」

違和感をおぼえたのは最後の一言だ。采女は説明するときは、主観を持ちこまずに説明役に徹する。采女の考えを聞くのは初めてだった。

「山は異界、死者のものでもあります。死者までも支配しようというのは傲慢でしょう」

「でも死してなにを望むというの。生き残った者に託せないような想いを遺して幸せかしら」

霊は果たされなかった想いが念となって現世に残るものだといわれている。果たされない想いを抱えて果てたもの――あこが思い出すのは祖父のことだ。

祖父は、主君家康が将軍となったことを知らずに亡くなった。祖父もまた念を残しているのだろうか。祖父がまだ伏見の地に囚われているとは思いたくなかった。祖父の死後、家康は伏見入城を果たし、征夷大将軍の位を賜った。念願叶ったと、穏やかな眠りについていてほしい。

「この世に囚われることなく、心安らかに黄泉路を渡ってほしいわ」

「それは生者の身勝手な都合ですね。たとえば彼女はこの結末を望んでいたと思いますか」

采女の声にうながされてあこは采女の視線の先を見やると、はっと息を飲んだ。

影の濃い崖の下に人が倒れていた。草の合間からのぞくのは金糸のあざやかな打掛と豊かな髪。おそらく女だ。

女は白い首を晒していた。その首の長さに、一瞬ろくろ首かと思ったがちがった。首が人としてありえない方向に曲がっていたのだ。誤って崖から落ちたのか、それとも――

「恐ろしいですか」

そのような女の姿を見てもなお淡々と紡がれる声音は、冷気そのものだと思った。

「采女殿……？」

采女は静かに骸を見おろしている。采女であってもおなじような表情はできるだろう。

（けれど、ちがう）

采女はこのような眼で死者を見つめない。顔は采女のものでも、表情は采女のものではない。

「あなたは……だれ……？」

「姫は死してなにを望むかとおっしゃいましたね。この者は、城を明け渡す代わりに命を助けるとの約定をたがえられ、炎上する城から身を投げました。その恨みを忘れられますか」

この山にあった城といえば、ただひとつ。

全身に震えがはしる。あこの怯えを感じとり、馬がいなないた。手綱をとってなだめようにも指が思うように動かない。馬の背にまたがっているのが精一杯だった。

「せめて打ち捨てておけば想いの縁とできたものを。瓦一枚、石垣ひとつすらも許さない。それがあなたたちのやり方ですか」

采女が天を仰ぐ。——いや、天ではなかった。

（どうして……!?）

采女の眼前にあったのは城だった。この地の城は燃え落ち、解体されたはずだ。だがたしかにいま、采女の見上げる先には五層の天守が聳えたっていた。

『殿、お戻りなさいませ』

いつしか眼前に門があった。槍をついた門衛は腰を落として恭しく迎え入れる。
（殿って……まさか）
眼前にいる人物は采女だ。しかし「ご苦労」と当然のように返す者をあこは知らない。
「死者はなお、この地に留まることを望んでいるのです。この地は鬼の棲処。歓迎いたしますよ。――時の歪みより来たりし姫」
過ぎたるものが二つあり。そのような歌が脳裏に響く。
島の左近に佐和山の城――そう歌われた人物。そして西軍の将にして祖父の仇。
「我が城に、ようこそ」
氷の微笑を記憶の最後に、あこの意識は闇に落ちた。

直継は、眠りの奥底から突如として現実に連れもどされた。
眠りを妨げたのは知っている気配だった。父を死に追いやった男。幾年たとうとも忘れられるはずがない。
（石田治部少――！）
その異変は厚い結界を隔ててなお感じとることができた。彼女がこの世界に入りこんだときの比ではない。山の中心に大きな穴を穿たれ、胃の腑の底に圧し掛かるような闇が満ちている。

彼女の気配も感じ取れない。元の時の流れにもどったのではない。あの闇に取り込まれたのだ。愛宕屋敷内に采女の気配が感じられないのも気がかりだ。城址を中心に広がる闇は、采女の住まう二の丸をも飲みこんでいる。采女が自邸にいたならば、異変に気づいてこちらに向かっているはずだ。

なぜこれほどになるまで気づかなかったのか。直継は迂闊さに歯噛みする。——いや、気づかなかったのではない。気づかせなかったのだ。

直継はその張本人をふり返る。緑の瞳は動じる様子もなく、静かに直継を見つめていた。

「主さま、行かれるおつもりですか」

「……正気か」

悪しき予感はたまの言葉で確信に変わった。

「采女殿もあの中ですわ。采女殿が、あの娘を連れ去ったんですもの」

直継は絶句した。なぜ、と唇がむなしくなぞったきり、続く言葉が出てこない。

なぜ知らせなかったとは言えない。たまにとって大切なのは、父の血を継ぐ自分だけだ。采女がいくら父の猶子で、普段のたまがなついているように見えようとも、彼女が動くことはない。采女にはけして初衣とは呼ばせないように、それは神である彼女の厳然たる則だ。

「いま、ここから出るのは危険です」

自分に対する少女の言葉に偽りはない。初衣の名のもとに結ばれた誓いは絶対だ。

直継も竜神の血を継ぐ者として、言の葉に力を持つ。言霊に背くとき、犠牲とするのは神の

加護、もしくは自身の命。それからはおいそれと想いを口に出すことはできなくなった。その直継のために、思いを察して人の言葉に置き換えていたのが采女だ。

采女もまた井伊谷の一族。だが采女が加護からはずれているのは、直継に代わって言葉を弄する必要があったからかもしれない。神に対する誓いがなければ、言霊の力から解放される。その一方、祈りの言葉は神に届かない。――救いを求める声もまた。

「……そなた、采女を見捨てたか」

「それを選んだのは采女殿ですわ」

直継は唇を噛んだ。それを選ばせたのは父と、自分だ。

「放っておくわけにはゆかぬ」

「誰のために？　闇に飲まれた者など五万とおりましょう。すべてを救っていては、主さまの身がもちません。御命に、関わります」

たまが警告した以上、屋敷から一歩でも外に出ればなにかがある。いや屋敷内でも、他の部屋にはものが蔓延しているのやもしれない。愛宕屋敷は初衣の結界があるが、それが弱まっていることは昨晩の一件で明らかだ。そのためにこの部屋に結界を重ねた。

「主さまが山を下りるとおっしゃるならば道を開きますわ。佐和山そのものを封印すれば、小物を封じることはできます。山から出て存在を保てるものは知れておりますから」

たしかに山を封じれば当面の危難は回避できる。相手は父ですら浄化できなかった怨霊だ。自分の力は直接初衣の力を享けた父には及ぶべくもない。

しかし逃げ出した先に未来はない。封じられた佐和山はものが満ちて死地へと転じ、怨霊の山となり、陰の気は周辺の山々へと伝播する。ものはいずれ山という境を超えて、瘴気や病となって村々を襲うだろう。

しかもその方法は山に残された者を見捨てることが前提だ。望むこととできることはちがう。だが大切なものを失ってまで手に入れる時間に、どれほどの価値があるというのか。

たまは、あると言うだろう。小事に目を瞑っても、脈々と血を紡ぎつづけることが必要なのだと。祖父と父、井伊家当主は二代つづけて幼少時に父と死に別れた。己も含めれば三代つづけてだ。それでもいまの井伊家があるのは、どれほど零落しようとも血が続いていたからだ。

終わらぬかぎり明日はある。采女もまたそう望むであろうことを、自分は知っている。

「采女殿が主さまを危険にさらすことを望むはずがありませんし、あの娘は主さまのお相手ではありません。元々いないはずの者です」

それでも行かれますかと、幼くとも現実を知った瞳が問う。

江戸から本来の許嫁を迎える。それが当主としての務めだ。しかし。

『御家のためとかそういうのは関係なしに、いろんなことを話して力になれればって……』

そう言って涙を流したのは江戸にいる許嫁ではない。——彼女だ。

本当の許嫁であっても、縁談は断るつもりだった。しかし今、彼女は『鳥居家の姫』という名目以上の存在として自分の心の中にある。

そのとき直継の目に留まったのは、床の傍らに備えられた一振りの脇差だった。

飾りのない黒の漆塗りの鞘、しかしそこに納まる刀身を知っている。父の残した一点の曇りなき刀。それは父の生き様そのものだ。

この地は、父が命を賭して守ろうとした場所。そして自分は父の名を継ぐ者。

「――愚問だ。行くぞ」

直継は脇差を手に取り、立ち上がる。部屋にはたまの結界があるはずだが、襖に手をかけてもはじかれることはなかった。直継の決断に背くことなく、襖はすすと開く。

しかし部屋の外に思いがけない人物を見つけ、直継の手が止まった。――東梅院だった。

「兵部殿……！」

呆然とたたずむ直継に、東梅院は倒れこむようにしてしがみついてくる。

兵部殿――その名が、直継の口から紡ぐ言葉を奪いとった。

胸のなかで震える母は成長途中の直継の身の丈よりもさらに頭半分低く、肩はあまりに華奢だった。いつの間に追いこしてしまったのだろう。それでも自分には父ほどの背丈はないし、見まちがえるほどにも似ていない。それでも母は兵部と呼ぶ。母の視覚は瘴気に惑わされ、見分けられるのは『兵部殿』の周囲に満ちる清浄な気だけだ。

母の時はあのときから止まったまま。だからこそ直継は父の仮名を名乗るわけにはいかない。もし自分が兵部であることを認めれば、母は囚われた過去から永遠に抜けだせない。

いつも己の両親の菩提を弔うために仏堂にいる母。彼女がこの機に訪ねてきたのは、たまの策謀かとも思う。しかし好都合でもあった。もし自分が帰ることがなかったとしても、母にと

って失われるのは『兵部殿』ただひとりだ。

直継は母の両肩に手を載せて身を離すと、現実から逃げつづける瞳を見つめた。

黒目がちな大きな瞳の中にはたしかに自分が映っているのに、母にはその姿が見えていない。

幻影を演じることは容易だったはずだ。しかし最後に一言、その言葉がこぼれ落ちていた。

「行ってまいります——母上」

第六章　慶長十年二月二十九日夜　名前を呼ぶ声

佐和山城の大広間では、酒宴の席が設けられていた。居並ぶ家臣は小袖に半袴、席はくずれていないが、めいめいに酒を酌み交わして雑談に興じている。それを上座の采女――石田治部少輔三成が足を崩してながめているという形だ。

あこは上座の左手、正室の着くべき座からそれをながめていた。

（あああ違和感が……）

違和感があるのは酒宴か、上座か、それとも足をくずしているところか。采女に似つかわしくないものを持ち寄って組み合わせたかのようだ。しかしその姿は采女の品性をそこなうものではなかった。略装の羽織でも、見目の良さはきわだっている。腰が低く人あたりが良い采女だが、立つべきところに立てば名家の一門としてなんら見劣りしない。

（けれどあれは采女殿ではないわ）

姿は采女のものでも、瞳にいつもの穏やかな光はなく、視線は冷ややかだ。おそらく憑依されているのだろう。

（すでに飲まれてしまったとか……？）

そのような考えが脳裏をよぎったが、あこはきつく目を閉じて打ち消した。

（いいえ、きっと大丈夫。どうにかして采女殿を目ざめさせなきゃ）

三成はさほど酒に強くないのか、杯をかさねる家臣とは対照的に唇をしめらせる程度だったが、「姫も一献」と視線とともにあこに杯を向けた。

結構です。はっきりと答えようと思ったが、主の杯を断るなど無礼のきわみだ。居並ぶ諸将の目が怖い。彼らは鎧姿ではないが、幾多の戦場をくぐり抜けてきた強者だとわかる。この目にかこまれては杯を受けないわけにはいかない。

あこは緋の打掛をひいて三成の傍らに寄り、杯を受けた。小袖と打掛は借り物だ。先ほどまでの馬乗袴のほうがよかったのだが、居並ぶ家臣の目を見ると、着替えて良かったと思った。場にそぐわぬものを排斥する空気をありありと感じる。

しかしあこは、控えめに注がれた酒には口をつけるにとどめ、飲まずに杯をかえした。

(口にしちゃだめ)

かつて黄泉平坂に入りこんだ者は、死の国の食を口にしてどうなったか。キツネに化かされたときも出されたものを口にしてはいけないと、子どものころから聞かされている。

(帰れなくなったら大変だわ)

下座からでは飲んだかどうかはわからないが、三成からは丸見えだ。しかし三成はあこの非礼に口端を上げてうすく笑みを浮かべただけで、咎めはしなかった。

生きた年月のなせるわざか、采女とおなじ控えめな笑みでも深みがちがう。余裕すらある。

(相手を小娘と侮っているのかしら……いいえ、そうじゃないわ)

侮りではなく、実際にあこを見て三成はそう感じたのだ。三成は人を見る目の鋭さがちがう。

値踏みとはまた異なり、人となりを見通すような目。あるがままを受けとめる采女とは真逆だ。あこはその目に見つめられて怯みそうになったが、腹に力を込めて心を奮いたたせた。

「ねぇ、あなたたちはどうして死んだあともこの世に留まっているの」

「則にしたがっておとなしく成仏しろと？」

「だって、死んでなお現世に留まっているのは不幸だわ」

あこの訴えを、三成は「ちがうな」と一蹴した。

「不幸であればこそ、留まることを望むのだ」

「どういうこと？」

「謀られ、裏切られた行き場のない想いが、そのまま忘れ去られることを受け入れないのだ。生者はものを生みし原因――己の罪業をなかったことにしたい、すべてを過去という名の水に流したいと願っているのだろう。しかし我らは忘れぬ。奸計も裏切りもなかったものとしては済ませられぬ。のうのうと生き残った輩に怨みの深さを知らしめるまではな」

三成は感情を見せぬまま、よどみなく滔々と語る。その様子は切れ者という評判に違うものではなかった。

「だから連れてきたというの？　わたし、あなたたちに怨まれるようなことをしたかしら。天に恥じないほど清廉潔白に生きてきたとは言わないけれど、怨まれるおぼえもないわ」

反論は予想していなかったのだろう。三成はあこを見つめていたが、ふと笑みを漏らした。

「恨みある相手ならばとうに死界に送っている。そなたは大事な客人だ」

「客人？　――たしかにね。こんなにもてなしてもらってるわけだしね。でもわたしが人質になると思ったらまちがいよ。わたしは許婚でもなんでもない、ただの邪魔者なんだから」

自分で言うのはくやしいが、直継にとって自分は領内にまぎれこんだだけの迷い人だ。山から出て行けと公言してはばからない化け猫は、自分が消えて今ごろせいせいしているだろう。

しかし三成はあこの物言いに対し、満足げに目をほそめた。

「よくわかっているな。そう、そなたはこの世ならざる存在、我らとおなじものだ」

「わたしはちがうわ！」

あこが声を荒らげると、場のざわめきが引いた。だが三成が気にするなとばかりに片手をあげると、またゆるゆると雑談が場を満たしはじめる。

「ちがわないな。そなたは気づいているはずだ。もし江戸の己と出くわせばどうなるかと」

三成は瞳で問いかけるが、あこは三成の望む答えしか導きだせず、目を逸らした。

「いくら妖ではないと言いつのっても斬られよう。そのときおとなしく成仏できるか？」

たしかにそのとおりだ。あこは唇を噛む。勝手な都合で殺されて、恨みを抱くなというほうが無理だ。おとなしく成仏すべきだというのは、生き残った側の傲慢な主張だった。

「とはいえ、そなたを呼んだのはものだからではない。言うなれば、礼だ」

「礼？　あなたがわたしに？」

「この地は結界に閉ざされていたが、そなたはその結界を破ってこの地に迷いこんだ。いかにして入りこんだかは知らぬが、そなたの存在が結界の綻びとなったのはたしかだ」

（じゃあ、もしかしてこの人がよみがえったのはわたしが来たから……？）

「この地はもともと死気が強い。そなたが来ずとも死地に転ずるのは時の問題だったがな。兵部が死して三年か、よくもったものだ。あの跡継ぎ、ただ人にしてはなかなかやる」

「ただ人？　直政さまはちがったというの？」

あの直継がただ人ならば、直政はどれほどの力を持っていたというのだろう。

「比べものにならんな。力も才も信念も。まぁ兵部は竜神の力を得ていたとの噂があったほどだ。ただ人の身で比べられてはあの跡継ぎも哀れか。兵部から継いだ血をもって山を鎮めていたようだが、それもここまでだ。この地の歪みはもう止められぬ。迷いの姫、行き場がないのであればここに住まうがよい。この死者の城にな」

三成は満足げな笑みを浮かべ、杯をあおった。――しかしあこは知っている。

（采女殿は、もっと幸せそうに笑われたわ）

『家臣一同、お仕え申し上げる所存にございますれば』

あのとき向けられた想いは、あこに対する信頼ではない。先代より名を戴き、直継に仕えることへの誇り。揺るぎない心だ。

（それをこの人が踏みにじっているのよ）

「……ねぇ、知っているかしら。わたしの祖父はあなたの軍勢に殺されたわ」

「元忠殿か。良き武人であった。降伏を勧めたのだがな。万の兵に千あまりで抵抗するとは」

「そう。あなたは、祖父が降伏するわけないってわからなかったのね」

彼は采女ではない。采女であれば、けっしてこのような申し出はしない。

「祖父は危険を承知で任を受けたのよ。そして最後の一人になるまで抵抗したわ。それが主君への忠義よ。祖父の首級を取ったのは別の人でも、曝したのはあなたよね。あなたは軍才、治才、商才、いかなる才にも恵まれたかもしれない。けれど人の心を知らないから敗れたのよ」

三成は瞠目し、食い入るようにあこを見つめた。あこはその視線を真正面から受ける。刃を向けられても折れるつもりはない。帯にはさんだ懐剣があこの心の支えだ。

大坂に祖父の首級をかけた二ヶ月後、京に三成の首級がかけられることとなったが、同情はしない。世のならいとはいえ、忠臣に対する礼を失した。その報いだ。

「鳥居彦右衛門の末裔であるわたしが、あなたに下るなんてありえないわ」

どれくらい見つめていたのか、三成はくっと笑みをこぼした。

「さすが元忠殿の末裔だな。その忠義は見事なものだった。敵方だったのが返す返すも惜しい。太閤殿下の恩を忘れて私腹を肥やすばかりの輩のなかで、敵ながら天晴れと思ったものだ」

敵将からの手放しの賞賛に、あこは面食らった。三成は追従を言うような人間でない。

「たしかに時勢を探るばかりの輩の心など知ろうとしなかった。そういえば刑部にもおなじようなことを言われたな。そなたは人を読むことに長けているようだ」

ますます欲しくなったと、三成は笑みを浮かべる。

(おじいさまの仇に欲しがられたって嬉しくないわよ!)

「刑部って大谷殿だったかしら。指摘してくれる友人がいたなら直せばよかったのに」

「あいにく、弱い犬と群れるのは性にあわぬゆえな」

三成は悪びれることなく傲然と言い放つ。采女のひかえめな態度とはちがい、己の才と信念に対する自信があふれていた。

（そういう性格だから嫌われたんでしょうが！）

三成はとかく同僚とそりがあわなかったと聞く。だが才に長けたのは確かで、領民からは慕われた。徳川家の能臣である直政が、三成時代の統治方法を変えることができなかったほどだ。

「五年か……機を見て徳川についた者も考え直す頃だろう。再戦の時機としては悪くない」

「再戦？　また乱を起こす気？」

「またとは心外だな。太閤殿下の遺命に背き、政をほしいままにして豊臣の世を乱したのは徳川であろう。簒奪を企てていたことはその後を見ればあきらかだ。私が時を経て再びよみがえったは天の配剤、信義に背きし徳川を討てとの天命だ」

「人の心は移ろうものよ。いまは五年前とはちがうわ」

五年前ならば太閤に恩を受けた大名が大勢いた。その者たちが自身の立場の危うさに気づかず、一枚岩となって徳川勢に当たることができなかったのが西軍の敗因のひとつだ。しかし戦後処理で豊臣家の領地は大幅に削られ、西軍の主だった家はつぶされた。残された家はことごとく徳川に臣従している。いま豊臣の旗を掲げても、かつてのような大戦は望むべくもない。

しかし、三成の余裕の笑みが崩れることはなかった。

「そう。五年前とはちがう。人の心は移ろうからこそ新たな攻め口が見つかろうというものだ。

――さて、あやつの心はどうかな」

三成が大広間の外に視線をむける。あこはその静謐な気配を知っていた。

（右近殿……どうして……）

廊下に姿を現したのは、薄青の羽織姿の直継だった。

礼装ではないが髪は結い上げ、一分の隙もない武者ぶりだ。場が一瞬にして静まりかえった。

「お招きにあずかりまして」

直継は廊下に腰を下ろし、上座の三成に対し手をつく。直継が采女に頭を下げ、采女が鷹揚に頷いた。その光景を、あこは信じられない思いで見つめた。

（うそ……本物の右近殿なの……？）

何十畳もの広間越しでは表情まではよくわからない。

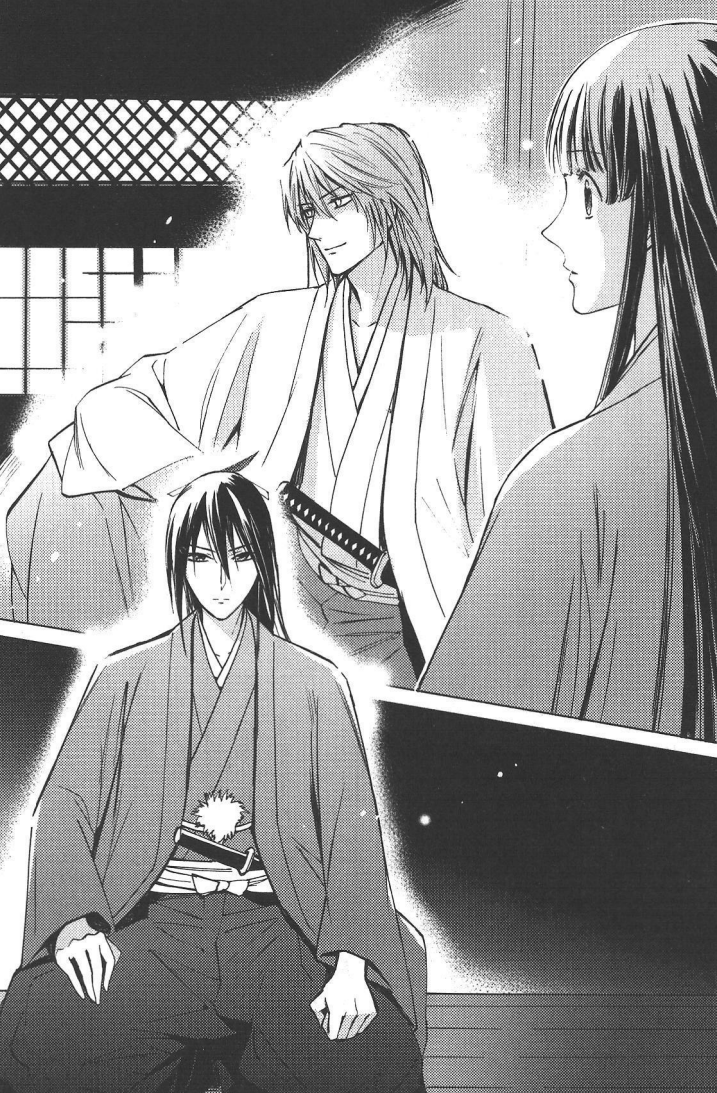
「ようこそいらっしゃった。ひさしいな。三年ぶりか」

三年前――直政が亡くなった年だ。あからさまな挑発だが、直継が動じる様子はなかった。

直継がこの場では逆らえないことを知ったうえで、三成はさらに言を接いだ。

「半日がかりで罠を張ったというに、よくぞ無事にたどりつかれたものだ。井伊殿の力量を見誤っていたか」

居並ぶ諸将はその名に反応し、刀に手をかけて膝を立てた。井伊殿――その言葉で示されるのは直継ではない。徳川軍の先鋒を幾度となく務めた直政だ。胸元に染め抜かれた橘紋に苦汁を舐めさせられた者も多いだろう。



誰が口火を切ってもおかしくない状況だが、「まずはこちらへ」と三成が収めた。直継は、柄に手をかける諸将の間を悠々と歩を進めた。張りつめた大広間の空気は痛いほどだ。

三成まであと数歩のところで、だれが鯉口を切ったか金属音が響いた。つられるようにしてみながいっせいに抜刀する。直継に突きつけられた刃は二十を下らない。

だが三成は冷たい笑みを絶やさず、直継もまた動揺を見せずその場に腰を下ろした。

「手荒な歓迎は許されよ。佐和山攻めでの井伊殿の采配、恨みに思う者も多いゆえな」

佐和山城は、関ヶ原の敗戦を受けて開城の約定がなされた。それにもかかわらず一部の隊が夜明け前に朝駆けしたことが数多くの者の死につながった。

無論、初陣どころか元服もしていなかった直継はあずかり知らぬ話だ。しかし家督を継いだ以上、監軍であった井伊家の落ち度を知らぬではとおらない。

「だが、さすが懐刀よと重用されたとて、都合よく使いつぶされてはな。この場にこうしてきてくださったということは、考えを改める余地があるということか」

（え……）

三成は、直政を殺したのはほかならぬ主君の家康だと指摘しているのだ。直継もそれを知っているから、徳川を見限って臣従のためにこの場にあらわれたのだと。

（そういうこと、よね？　――ああ。だから）

人の心は移ろう。その意味に得心がいった。五年前には徳川軍の懐刀である井伊家に付け入る隙などなかった。だが今はちがう。井伊家にかぎらず、心や立場が変わった家もあるはずだ。

反論しない直継に、三成は是と受け取ったのだろう。杯を向けた。
「まずは一献」
突きつけられていた刃が納められ、直継は近侍を介して杯を取る。諸将は座についたものの、射殺すような目線から解放されたわけではない。
直継の様子に釘付けになっていたあこに、三成が「酌を」とうながした。
（わ、わたし!?）
直継は杯を手にしたまま、視線を向ける様子はない。あこは直継の前に行き、銚子から杯に注ぐ。あこがそのまま脇へ退くと、三成は興味深そうに直継の動向をながめていた。
（右近殿は本当に山を明けわたすつもり……？）
采女を人質に取られて打つ手がなくなり、降伏を選んだのか。――それとも自発的に？
直継は家康へ反発を漏らしていた。三成の言が事実ならば、それを怨みにして離反を思いたった可能性もある。
（右近殿はどうして――あ）
あこは目を伏せながら気配でさぐっていると、衣擦れの音がし、直継の裾が床を離れた。
持ち上げた杯が、口に触れる。
「飲んじゃだめっ！」
あこは杯に飛びついて、直継の手から杯を払い飛ばした。
諸将が膝を起こす音が聞こえる。それと同時にあこは腕をつかまれた。

（えっ!?）

直継はあこを胸元に抱き寄せると、倒れた銚子の酒をすばやく指でなぞり、弧を描く。

そして次の瞬間、ふたりは畳からわきあがる白光につつまれた。

「ここは……？」

あこの視界がもどると、庭に面した廊下にいた。佐和山の城郭の一廓らしい。ほど近い場所に、本丸の石垣が篝火に照らし出されている。

いや、篝火だけではなくほのかに明るい。この光を知っている。夜明け前――暁降だ。月もまた、あの日とおなじ。合いすぎる符号に、ぞわと肌が粟立った。

「ぼやっとするな！　行くぞ！」

「えっ!?」

直継にうながされるままに駆ける。

幾重にも折れながら廊下を走ると、行く手に鎧武者が立ちはだかっていた。当世具足に頬当て、いかめしい付け髭まである。だが頬当ての奥に顔はなく、あるべき場所には闇がうごめいていた。

（死霊!?）

鎧武者が、槍をおおきく振りかざす。

「初衣！」

その声に従い、白猫姿で併走していたたまは直継の手にぽんと飛び乗った。かと思うと姿を変え、白銀の光を宿す刀となって手のひらに収まり、直継は大きく足を踏み出して横に薙ぐ。

鎧武者は横一文字に斬られて形を失い、残された鎧が廊下に音を立ててくずれ落ちた。

「行くぞ！」

「待って、なにか動いて……！」

くずれ落ちた鎧が揺れ、その下からはい出てきたのは手のひらほどもある鼠だった。さらに出てきたのは綱のように太い蛇に蚯蚓に蛆、そしてつなぎ目のはじけた鎧から現れたのは、一抱え以上もある黒と紫の斑毛の巨大蜘蛛だった。

「見るな、走れ！」

（そう言われてもっ！）

おぞましさのあまり総毛だつ。見たくない以上に近づきたくない。蜘蛛の脚がうごめくのと対照的に、あこの足は凍りついたように動かなかった。

直継は刀を逆手に持ち、床板に突き刺す。光を見るが早いか、雷が轟音とともに天井を割って蜘蛛を突き刺した。

「いやぁっ！」

あこはとっさにその場にしゃがみこむが、直継は強引に手を取って廊下の端を駆けぬける。

直継は建物の構造を知っているのか、動きに迷いがない。渡り廊下にさしかかると、雑兵が道を塞いでいた。庭にも背に九曜紋の旗を挿した兵が槍を構えている。

直継は刀を抜き、鞘を縦に掲げる。すると鞘は弓に、刀は二本の矢に姿を変えた。すかさず兄矢、弟矢を左右に振り分けて放つ。二本の矢は兵ではなく廊下に刺さり、直継を頂点に三角の線を描き、その内側に光が満ちた。雑兵は光に飲み込まれ、白の霧となって消え失せる。

その最期を見届けることなく、直継はふり返った。——走れ。そう言うつもりだったのだろう。しかしその声は紡がれず、直継は目を見張った。

「あこっ！」

不意に名を呼ばれ、あわてふためく気持ちがすとんと空になった。

そこに襲いくる気配。後ろだ。あこは反射的に左の足を軸に身を返す。元いた場所から、しゅんと風を切る音が聞こえた。鎧武者はあこの背中をねらって袈裟懸けに刃を振り下ろしていた。

背中に走る緊張感。そして板の間の感触に、道場の感覚がよみがえる。

あこは左足を踏み出して身をかえす。刃の背から回りこみ、剣を握る腕を捕らえる。武者も撥ね返そうと力をこめるが、切り上げようとする力は体重をかけて押さえこむ力に劣る。

力が拮抗したところであこはふと力を抜き、勢いで振り上げられた剣筋をかわす。刃が空を

裂き、仰けぞる形になった武者を、あこは肩を入れてつき飛ばした。武者が廊下に転がる。

「どけっ」

直継の声に反応してあこが壁際に引くと、ついで二本の矢が鎧武者の胸元に突き刺さった。ぐふっ、と声が漏れたのは一瞬、鎧武者は銀の光に包まれて消え失せる。

（すごい……）

速射だ。しかも下り角度できっちり胸を射貫くとは、よほど鍛錬を積んでいるのだろう。しかし次に耳にしたのは、板の間に崩れ落ちて膝をつく音だった。

「右近殿!!」

ふり返ると、直継は弓を支えになんとか上体を起こしている状態だった。息が荒い。

「大丈夫？　立てる？」

直継は息を切らしながら、あそこへ、と渡り廊下の先を指差した。

「あそこまで行けばいいのね？」

あこは直継の片腕を持ち上げる。脇から己の首を通して立ち上がると、わずかな身長差が幸いして、直継に負担がかかりにくい形で支えることができた。

渡り廊下の先にある離れは、二面を障子に囲まれた小部屋だった。十畳ばかりの真四角の部屋で、違い棚が据えつけられている。にじり口こそないが、茶室に似ている。

障子を閉めるように指示すると、直継は畳の上に座りこんだ。片膝を立て、その上に肘をおいて頭を支えている。息は荒く、時おり喉が鳴き、まるで肺病のようだ。

「どうしたの、つらいの？」

近づいて背中をさすると、直継は答えることなく、されるがままに受け入れた。顔色は窺えないが、そうとう具合が悪そうだ。

「……やはり、治部、か……？」

「え？　ええ」と答えると、くそ、と短く息の合間から漏れた。

「ほかに……なにか」

「わたしのせいで結界に綻びができたって……そのせいで、佐和山が」

ごめんなさい、と謝る前に直継は「気にするな」と言葉を挟んだ。

「私が支えきれなかっただけだ。そなたが気に病むことは――」

言葉のつづきは激しい咳にさえぎられた。

「右近殿！」

くずれそうな直継の身体を抱きとめる。熱い。ままならぬ呼吸のためか、体温を奪われた寒さのためか、身体は小刻みに震えている。

室内を見まわしたが敷物ひとつ見あたらない。あこは着ていた打掛を直継の肩に羽織らせた。このようなものでなんとかなるとは思わない。しかしすこしでも熱が伝わればいい。あこは自分の力を注ぎ込むように、打掛の上から直継を抱きしめた。

「――どうして、来たりしたの」

今日でなくとも三成は逃げはしない。佐和山に留まりつづける。こんな身体で乗り込んでき

たのはなにゆえか。そう聞けば、務めだというだろうか。当主として当然のことだと。一度でもその覚悟を疑った自分が恥ずかしかった。強がりでもいい。もう一度、声を聞かせてほしい。

先ほど名を呼ばれたとき、あこはそのとき起こっていたすべてを忘れた。心を吸われたかのように頭の中が真っ白になって、全身が直継の次の言葉を待っていた。そのとき気がついた。

――直継に、名を呼んでほしかったのだと。

（お願い。もう一度聞かせて……）

そのとき、あこの耳の奥を風が駆けぬけた。あこはとっさに直継をかばうように身構えるが、次いで姿を現したのはたまだった。

「主さま、結界を張りましたっ！」

空気が変わった。あこの背後で直継は大きく息を吐き出す。二、三度深呼吸をくり返すと、直継は身を起こした。

「……たま、ご苦労だった」

「いえいえ～。こんな大バカの考えなしの猛進イノシシ娘のために無理をなされたかと思うと腹がたちますけれど、他ならぬ主さまのためですもの～」

いつにもまして言葉が毒を帯びている。無視していると「雷くらいでとり乱してんじゃないわよ」と手厳しい声が飛んできた。

そういえば最初の死霊は雷に打たれたが、次からは光に包まれて消え失せた。あの光を初めて見たのは愛宕屋敷に妖鳥が現れたときだ。直継は浄化したといっていなかったか。

（まさか、わたしが雷に怯えたから……？）

だが直継は「たま」と続く言葉をさえぎった。

「愛宕との道、いま一度開けるか」

直継は背後にあった柱にもたれかかる。呼吸は落ちついたが、体力の消耗は激しそうだ。

「できなくは、ないです。でも主さま――」

「ならばよい。……そなたは帰れ。そして早々に佐和山を下り、江戸にもどれ。よいな」

「えっ、右近殿は!?」

「私にはすべきことがある。たま」

無言の命に、たまが直継に恨めしげな視線を向けた。

すべきこと――直継はあこを逃がした後、この地を祓うつもりだ。

「ちょっと待って！　そんな身体で何をするつもり!?　直政さまですらどうにもならなかったのに、弱りきった身体でなんとかなると思っているの!?　死にに行くようなものよ!?」

すると直継の目が、す、と細められた。

「――その話、誰から聞いた」

「お、おぼえてないわ。でも直政さまは病んだ身で佐和山に戻って命を落とされたって……務めを果たされたのはご立派だわ。でもいまの右近殿じゃ、みずから命を捨てるようなものよ」

迷い人のあこは、ものの気配に満ち満ちた佐和山城でも過ごすことができる。だが直継の血はそれを許さない。穢れに満ちた世界では呼吸すらままならない。清き水に棲む魚が泥水に生

きられないのとおなじだ。
「捨てるようなもの、か」
直継は、ふと笑みをこぼした。本心からこぼれ落ちたそれは自嘲だった——嫌な予感がした。
「右近殿？」
「そなた、戦場ではなく病に斃れた父が、なんと噂されていたか知っているか」
「え？」
「もっぱらの噂だったぞ。——かの赤鬼も怨霊には敵わなんだか、とな」
あこは言葉をなくした。武士は平時においても強くあることが求められる。身体が万全であることはもとより、精神を律して臆さず、心弱くして怨霊に祟り殺されたなどと不名誉なことだ。ましてや武勇で名を馳せていた者ならばなおのこと。
「その風聞は嘘ではない。事実、父は治部を前に斃れたのだからな。佐和山など捨て置いて傷を治すことに専念すればよかったものを、そなたの言うように父はみずから命を捨てたのだ」
「馬鹿なこと言わないで！」
とっさに手が出て、直継の頬に閃いた。
「主さま！」
打った手が熱を帯びる。打たれてなお揺らがない直継の瞳。それを見つめているうちに熱い吐息が漏れ、涙がにじみ、視界が揺らいだ。
『元忠殿が猪なら、私の父はいったいなんだ？』

『元忠殿は忠臣として務めを果たされた。ご立派な最期だった』

直継がそう告げたとき、思いもしなかった――己の父の死に様と比べていたなどと。

帯に差した懐剣が重みを増す。最後の奉公の場所を与えられて全うした祖父を、誇りに思う。しかし、それは生きるべきときに生き、死ぬべきとき死んだ、祖父の武士としての覚悟に対する賞賛だ。直政とておなじ、他人の知りえない任を受け、それを果たした。たとえ畳の上で亡くなったとて、その心はなにも恥じるところはないはずだ。

「人がなにを言ったかは知らないわ！　でも、あなたが信じてあげなくてどうするの!?」

父が祖父の死を表立って泣けなかった理由。今ならわかる。それは祖父が信念を貫いたと知っていたからだ。祖父がなにを想い、なにを信じ、なにを託したか知っていればこそ、自分ひとりの想いに流されるわけにはいかない。祖父は自身の信じるものを全うしたのだと、受け入れるしかなかった。

「おじいさまは、今の世を見届けられなかったけれど、きっと上様なら為しえてくれるって信じていたから、それで満足だったって、そう家族が信じてあげなきゃ、おじいさまは……！」

「……そういう、ことなのだろうな」

直継はぽつりとつぶやいた。答えなど最初から知っていたかのように。

「そなたはなんとしても生きて帰れ。よいな」

直継はその後どうするつもりなのか。――その答えに、あこは気づいてしまった。

『傷を治すことに専念すればよかったものを』

（だっていま、そう言って……）

裏を返せば、父の死に方を認めないということだ。ならばなぜ、直継はおなじ方法を取るというのか。

「私には父の想いはわからぬ。信じるほどの言葉も交わしたことがないゆえな――だが」

直継の目元が、ふと緩んだ。

「父が為しえなかったこと、私が継がねば父も浮かばれまい」

――家族を知らない人だと、知っていた。それでいながら、気遣いを知っている人だということも、知っていたはずなのに。

どうして追い詰めるようなことを言ってしまったのだろう。

（この人は最初から……っ！）

とうにその覚悟をしていたというのに。

あこから逸らされた直継の視線は遠い場所――あこの知らない時の彼方を見つめていた。

（なにか、言わなきゃ……）

なにか言って引き止めなければ、言葉が届かなくなる。永遠に。

「右近殿……」

「――万千代か」

不意に、障子越しに声がした。年は三十をすぎているだろうか、采女でも三成でもないその声音は、どこかで聞いたことがある。どこかで——もしくは夢の中で。

直継の面が強ばる。だが、たしかに震える唇が、音もなく形づくった。ちちうえ、と。

（直政さま!?）

たまも驚きのあまり身を強ばらせていた。ふたりが間違うはずがない。本物の直政だ。

直継は硬い表情のまま障子に歩み寄ると、障子を引いた。あこは最初、そこに鏡があるのかと思った。重ねた年月はちがうが面差しがよく似ており、血のつながりは疑うべくもなかった。

「久しいな」

直継が見せたことのないような慈しみの眼。伸ばされた指が直継の頬を伝い、愛おしげに頭を撫でる。直継のまとっている気に、直政のそれが染まる。おなじ神気が溶け合い、銀色の光がふたりを包みこんだ。

「父上に——」

直継は、自身に回されていた直政の手を、震える両手でゆっくりと包みこんだ。その動きは、お会いしたかったという言葉に続くことを疑わせなかった。

だが次の刹那、直継は包んでいた両手で直政の腕を取った。そして膝を立てて背負うと、そのまま直政の身体を室内に投げ飛ばした。

「そのような言葉をかけてもらった覚えはない！」

直継は唇を噛み切り、親指で血をぬぐう。それを媒介に開け放たれた障子の前に呪を描いた。

たまの張った結界に閉ざされ、直政の姿が変わる。そこにあったのは采女の身体だった。
「この者は父の気を取り込んでいただけだ！　――たま！」
なつかしい想い出に囚われていたたまが、我に返る。
なぜ彼女が呼ばれたのか、あこにはわかった。
「だめよ右近殿！　その身体は采女殿なのよ!?」
だが直継は采女の襟を摑むと、たまの化身――神刀の切っ先を采女の胸元に突きつけた。
三成は瞠目して白銀の光を見つめていたが、ふ、と表情がゆるんだ。
（あれは……！）
あの笑みをあこは知っている。
「右近殿、それは……！」
直継も気づき――直継と采女の視線がかさなった。
言葉はなかった。ただ、直継はうなずいた。わかっているというように。

そして直継は神刀を握る手に力をこめ、白銀の光を放つ刀身が、采女の体を突き抜けた。

「いやぁぁぁ……っ!!」
聞こえたのは自身の叫びか竜の咆哮か。
采女は満ち足りた表情で、障子の外を見やった。そしてだれかの名を呼ぶように唇が動いた。

（誰……を……）

ふり返れば朔――あの日とおなじ、淡い月が暁の空に浮かんでいた。

すべての音が止まった世界で、短いうめき声とともに血がこぼれた。

血は直継の頬をなでて伝い落ちた。采女の身体がゆらりと傾き、その瞳が閉ざされる。

意識が落ちた。そう思った瞬間、采女の目が見開かれた。そこにはもう采女の面影はない。

あるのは、爛々と血走らせた怨霊の眼だ。

「右近殿っ！」

しかし直継は、采女の身体を抱きとめたまま離そうとはしなかった。直継は左手を三成の首に回し、抱き寄せて耳元にささやく。傍から見ていれば、睦言をささやくようなしぐさ。だが三成は表情を歪ませた。直継は耳元から直接、祓いの言の葉を吹き込んでいたのだ。あがく三成を直継は離そうとはしない。傷口から噴き出す血が、直継の薄青の衣を染め上げてゆく。

呪に力を奪われて、三成の腕がだらりと落ちる。そのとき手に触れたのは腰の太刀――

「右近殿！　はなれて！」

三成が己の刀を抜き、振りかぶる。その様子は直継には見えていない。だが直継の神刀を握る手に力がこもった。刺すなら刺せと。己の血すら結界と為し、葬ろうというかのように。

（だれか、助けて――）

そのとき、懐剣が重みを増した。

（得物！）



あこはとっさに懐剣を抜きはらい、刀身を振り上げる。その刹那、光が充ちた。
いまは陰に隠れた月が本来持つ光、それを吸い取ったかのように白き光が放たれる。
光のなか、直継と采女を包む結界の上に幻を見た。その姿をあこは知っていた。
「おじい、さま……？」
そして今ひとり。みなが見つめ、時が止まった世界に、声が響く。さきほど思い出せなかった声音だった。山が持つ記憶に導かれるままに、山みずからが歌うかのように。

――祈るぞよ　子の子の末の　末までも
まもれ近江の　国つ神々――

神を招来する言霊。それに導かれるままに、山に光が駆けた。
祖父は空に浮かぶ朔の月に右手を掲げ、その手に収まった朔の剣を采女に向けた。くっとうめき声をあげて、三成の影が采女の身体から離れる。そのときあこは三成の姿をはじめて見た。年のころは二十才ばかり、細い面に深遠な眼差し。人の弱さを見抜き、断罪する目だ。心弱き者にとっては見下されていると感じるほどの信念が、そこに潜んでいる。
祖父が向ける刃に、三成は分が悪いと察したのだろう。対峙しつつもふと力を抜いた。
「ここは一時、譲ろうか」
だが、と三成はあこに視線を向ける。

「我らは人の弱き心にひそむ。人に心あるかぎりよみがえろう。何度でもな」
――また会おう、時迷いの姫。
誘惑にも似た甘いささやきを残し、三成は夜闇の残る西の空へと飛び去った。
それと同時に、祖父の幻は光に溶けて形を失う。
「おじいさま！」
あこは祖父に手を伸ばすが、手はむなしく空をつかむ。
手のひらを開くと、そこにあったのは一日のはじまりを告げる暁の光だった。

「采女!!」
あこは直継の叫び声に我にかえる。
意識を失った采女の身体が傾ぎ、直継は膝をついて采女の身体を抱きとめた。
采女の面に血の気はなく、息もしていない。流れつづける血が直継の衣を朱に染め、その身を貫いた刀が夜からつづく悪夢のように暁の光を照りかえしていた。
「――初衣ッ！」
直継の鋭い声音に、采女を貫いていた剣が姿を変える。
「父はこの者に井伊の名を与えた！　名に対する誓いを果たせ！」
光の粒子が采女の体に溶け込む。そして直継もまた采女に身を預けるように意識を失った。

断章

慶長十年三月一日暁

時の狭間

明けの光に湖面が輝く。

おだやかな波間に身をゆだねると黒髪が湖面にひろがり、ゆらゆらと揺れた。こうしていると古い記憶にみちびかれ、人の世の時の流れを忘れてしまいそうだ。

この大八洲ができたころから自分たちはここにあった。あまりにも長い時のなかで眠りと覚醒をくりかえし、目覚めると巫女と呼ばれる少女が仕えていた。時には退治しようとやってくる男もいたが、非力すぎる存在など相手にもしなかった。

仕える少女と挑む男。そのどちらでもない青年が訪れたのは、六百年前のことだ。

それは赴任してきたばかりの貴族で、治める地の神を見にきたのだと告げた。なんの道楽かと無視していたものの、日ごと池に語りかける青年を目ざわりに思い、姿を現した。

竜神の身は、人の大きさとは比べものにならない。その威容に押されて怯えるか、へつらうか。怯えて逃げるならいい。現実を直視せずに自尊心から無闇に挑むか、こびへつらって利用しようとするか。今までの者たちはそうだった。しかし青年はどちらでもなかった。

——ああ、やっと姿を見せてくれた。

そう告げると、持ってきた酒や肴をならべはじめた。

神への捧げものならば巫女が持ってくる。しかし男は、一緒にどうかと誘ってきたのだ。

懐柔かと思ったがちがった。男は毎日のように姿を見せ、畑の作付けや川の治水について話をした。神頼みかと思ったが、そうではなかった。ただ、長い間この地を見てきた竜神の意見を聞きたいのだと言った。名門貴族の末流に生まれ、若くして一国を任されたものの自分には知識が足りない。

――そなたはずっとこの地を見てきたのだろう？

思念を介して言葉を返したのはどれくらいたってからだろうか。

人の時の流れはあまりに早く、いつしか青年は任期を終えて京にもどった。

人の時に慣れてからの毎日は、とても長かった。ひとたび眠りにつけば百年ですら一息の間だ。しかし青年の面影が邪魔をして眠りにつくことができなかった。青年が再任したのは何年後だったか。一年か二年か、本来ならば瞬きほどにしか感じない時間だっただろう。

なにが自分を突き動かしたのか。この地の豪族の娘を妻に迎えるという話だったか。

人の姿を取ることができなかった自分は、仕える巫女に願った。

『あの人に会いたいの。だから』

一度でいい。あなたの身体を貸して、と。

大八洲に棲まう七つの竜、そのうちのひとつの〈房〉という名しかなかった自分に、青年は名を与えてくれた。その青年にいまひとたび会うことが叶うならばと。

だが巫女は首を振った。そして言った。わたしはあなたにお仕えするためにいるのです。一度といわず、どうぞこの身にお宿りください、と。

年の頃は十ばかりのその巫女は、いままでに仕えてきた何十人、何百人という巫女のひとりにすぎない。自分が彼女に願いを告げたのも、そのときの巫女が彼女だったからだ。

彼女たちは水害や旱魃が起こると、生きながらにして湖に沈められた。そのような人の世の風習を知りながら、それまでの自分は人の世にあまりに無関心だった。

少女の身が天地に捧げられたとき、自分は少女を喰らい、人の身体を手に入れた。

——その少女は、名をたまといった。

女童姿となって現れた自分に、青年は見誤ることなく名を呼んだ。みずからが与えた名を。人の身となって青年の側で暮らし、子を授かったのは七年あまり後のことだ。男児だった。藤原家の血を継ぐ男児は成長して父の偏諱をもらい、井伊共保と名乗った。

青年が天寿をまっとうすると自分は人の世を離れ、眠りについた。ひとつの誓いを残して。

いままで井の国の巫女として命を賭してきた少女たち。

彼女たちに代わり、竜の血をひく我が末裔がこの地を守りつづけんことを。

次に目覚めたのは、今から四十年あまり前。

戦国と呼ばれる世、気づけば社も村も戦火に呑まれていた。仕える巫女の姿もない。

導かれるように村に下りると、炭となって崩れ落ちそうな屋敷に嬰児を見つけた。乳母と思しき女はすでに息絶えていた。嬰児も煙を吸ったためかもう泣く力もなく、細い息をくりかえすのみ。こと切れるのは時間の問題だった。

嬰児は井伊の名を継ぐ最後の男児だった。
自分は自身に宿る力を嬰児に与えた。常人の身体は神の力を宿すことはできない。その力を支えたのは、嬰児に流れる己の血だ。
生まれ出でた直後のように力強く泣き出した嬰児を、初衣は抱きしめた。
嬰児の力強い泣き声は、永い時の向こうにあった我が子の声とかさなった。
（万千代……）
初衣は六百年前に授かった我が子とおなじ名を、救った嬰児にあたえた。それはかの青年の血が永久につづくことを誓う名だった。
嬰児は実母の手にもどったときに虎松という名にもどったが、成長して徳川家に仕える際に、たまから由来を聞いた家康によりふたたびその名を与えられた。
それから四十年の時を経て、万千代の口からその言霊を聞くとは思わなかった。

祈るぞよ　子の子の末の末までも　まもれ　近江の国つ神々

近江に入った際、自身の子孫の長久なるを願い、万千代――直政が捧げた祈念歌だ。
『最後のご奉公にございます』
直政が主君にそう告げたときの横顔も声音も覚悟も、すべて初衣の記憶の内にある。
京への要の地を鎮めること、そしてこの地を子孫に譲りうるものとすること。それを直政は

自らの天命とし、全うした。世間から後ろ指をさされる最期になりかねないことは覚悟の上、それでも許したのが主であった家康だ。初衣は直政を戦場に連れ回したこの男が大嫌いだったが、その望みを聞き入れたことは評価している。

初衣は『最後のご奉公』とならないために力を尽くしたが、水気に由来する力は月の満ち欠けの影響を受けやすい。水気が減ずる一月か二月、そしてもっとも月のかげる朔が命日となることは覚悟していた。

万千代が自身の命と名をかけて守ろうとしたもの、それを初衣は知っていた。だが直継に告げることはなかった。子はいつか親になる。そのとき初めて知る想いもあるだろう。——身を賭してでも子を守りたい。そう願う親の想いを。

（もう、知っていたのかもね）

言の葉として伝えられずとも、知っていたからこそ、直継は自身が負う名の重さを感じていたのかもしれない。

しかし知っていても、言葉を——声を求めてしまうのもまた事実だ。

自分にむかって、墓前に言いなさいよと暴言を吐いた少女を思い出す。伝えられるものなら、彼岸までも会いに行く。人は死後に彼岸にてふたたび相見えることができるというが、死の訪れない自分には会うすべがない。できるのはただ、愛する者の血が脈々と受け継がれてゆくのを守りつづけることだけだ。

（そのために一日もはやく回復しなきゃ）

あの少女は、迷い人であることとあの一件を除けば、基本的には不快な存在ではなかった。考えが面に出やすいので見ていて厭きないし、なにより直継への真摯な想いがある。きっと直継の支えとなることだろう。言葉を得られず飢えた心を癒やしてくれるかもしれない。

（でも、そう簡単に認めるつもりはないけれどね）

彼女は時迷い人、いつかは帰る存在だ。人の魂は命の危機に直面すると縁にすがる。あの日、崖から落とせば元の時にもどるかと試してみたが、その気配はなかった。

聞けば五月からきたという。五月になにが起きるというのだろう。結界が綻び、時の歪みが生じることは間違いない。

あの娘が今という時に迷いこんできたことは、吉兆か、凶兆か。

（ま、すべては主さま次第だわ）

はじめて直継の心を揺らした少女。直継が彼女を元の世界に返すというならばその方法を見つけるまでだし、手元に置くなら害とならないように見張るだけだ。

あの娘は自分を小姑と思っているようだが、小姑ではなく六百年来の姑だと知ればどのような顔をするのだろう？

そのときの彼女の顔を想像して初衣はくすりと笑みを漏らし、揺れる湖面に身をゆだねた。

終章

慶長十年三月一日夕刻

たどりつく場所

目覚めると、部屋には障子越しの光がこぼれていた。
明け方の淡い光ではない。どちらかといえば午をすぎて傾きはじめた濃い光だ。
（って、いま何刻!?）
あこはあわてて飛び起き、小袖に着替えて廊下に出る。陽はすでに中天をすぎていた。表座敷には勘定方などが詰めているはずだが、奥にはいつにもまして人の気配がない。
柱の息遣いすら聞こえてきそうな静けさに、不安が押し寄せてくる。
（え、えーっと、今度は誰もいない世界に迷いこんじゃった、とか……？）
なまじ前科持ちだけに冗談ではすまない。あこは必死に記憶を探った。
（昨晩は佐和山城に右近殿が来てくれて、治部殿が退散して、それからどうなったの!?）
しかしあこが頭を抱えていると、背後から聞き覚えのある声がかかった。
「ずいぶん早いお目覚めね」
ふり返ると女童がいた。挨拶からして嫌味な相手に癪な話だが、いてくれてほっとした。彼女がいるだけで直継がいる世界であること、そして直継が無事であることを確信できる。
「今日一日寝ているかと思ったのに、穢れに耐性があるのはさすが迷い人ってところかしら」
「そういうあなたはどうなのよ。あなたも寝坊したクチなんじゃないの」

神さまも寝るのだろうかとちらと思いもしたが、猫姿になって陽だまりで昼寝していそうだ。
「あーら、わたしは誰かさんみたいに置いていかれるほど間抜けじゃないわよ」
（置いていかれた？　……もしかして法要!?）
たしか一日は直政の月忌だ。婚礼がととのっていないとはいえ、許婚の家の法事に参列しないわけには――そこまで考えが及んだとき、あこの心の中でなにかが落ちた。
（……呼ばれるはず、ないじゃない）
本当の許婚ではない自分には、なんの関係もないことなのだから。
「じゃああなたは起きていたのね。化け猫になるような年だもの、さすが早起きね。でもお屋敷にいるってことは、寄る年波には勝てずに足腰が立たなかったってところかしら」
八つ当たりだとわかっている。しかし強がっていなければ心が折れそうだった。
そう、わかっていたことだ。招かれざる客だということは。直継が、迷い人である自分をあたりまえのように受け入れてくれたので忘れていたが、ここに自分の居場所はない。ここにいてはいけないのだ。
（……右近殿に、ちゃんと言わなきゃ）
「このわたしが！　ホトケ歴五年風情に遅れをとったとでもいうの!?」
たまが声を荒らげる。あこはなかば反射的に懐剣を抜き、刃をたまの首元に当てていた。
「――それ以上おじいさまを悪く言ったら、許さないわ」
法要について考えていたせいか、死者への不遜な態度に過敏になっていたようだ。

五年というのは祖父ではなく三成のことだったかとも思ったが、たまは反論することなく己の首筋に当てられた刃先を茫と見つめていた。

たまの瞳は虚空を見つめているかのようだった。刃が連れてゆく死の国。神であるたまには無縁のものだ。人の死に対する想いを理解しろというほうが難しいのかもしれない。

あこは一息ついて剣を納める。たまはぼんやりとその刃を見送った。

「ねぇ、ひとつ聞きたいんだけど。あなたは婚礼に反対なの？」

「なにをいまさら。はやく出ていきなさいって言ってるでしょ」

「婚礼の日にちを見立てていたのもあなた？」

たまは「は？」と呆けたようにあこを見上げる。

（ちがうの？）

だが三度の延期はともかく、道中の不自然すぎる雨は化け猫のしわざにちがいない。来るな来るなと邪魔をして、それでも到着してしまったために実力行使で追い出したというところか。

やがてたまは悪びれる様子もなく「なにか悪い？」と返した。

（ああ、やっぱりね）

「――目障りかもしれないけれど、あんまりいじめないでね」

まさか、あこの口からしおらしい言葉が出るとは思わなかったのだろう。たまは虚を衝かれたようにあこを見つめたあと、興が削がれたとばかりに背を向けた。

あこはあわててたまの肩をつかむ。

「ねぇ、右近殿と采女殿は？」
「なんであんたに教えなきゃいけないのよ」
たまはふい、とそっぽを向いたので、あこはむんずと髪をつかんだ。
「痛っ、なにすんのよ!?」
手荒な方法だが、しっかりと手でつかまえておかなければ風の中にでも逃げられかねない。
「おふたりはどこって聞いているの」
「采女殿ならご自分の屋敷で休んでいるはずよ」
たまはあこの手を荒々しく引きはなすと、わざとらしく後頭部をなでた。
「ご無事なのね？」
昨夜のことが夢でなければ、たまの転じた神刀は采女の身をつらぬいていた。直継の衣をも赤く染めあげたあの血の量をみても、普通ならば助からない。
「このわたしが助けたのよ。絶対に死なせはしないわ」
あこは胸をなでおろした。信用ならない化け猫だが、口に出したことは信頼できる。
「主さまはお寺よ。道はだれかにお聞きなさいな」
無縁者がなにしに行くのと突っぱねられてもおかしくなかった。しかし素直に教えてくれたことに「ありがとう」と告げると、たまはふんとそっぽを向いて姿を消した。

直政の菩提寺は佐和山の裾野、内湖のほとりにあった。

あこが着いたときには読経も説法も終わった後らしく、寺から出てきた守勝と出くわした。
「姫、お身体の調子がすぐれぬとお聞きしましたが」
守勝は白の麻袴の礼装だった。礼装でないあこを不審に思ったようだが、体調不良のためと納得したようだ。守勝はあこが本当の許嫁でないことを知らない。法事に参列しない理由を作っておいてくれたのだと気づき、胸の奥がつきんと痛んだ。
「ゆっくり休ませてもらったからもう大丈夫よ。ねぇ木俣殿、右近殿はどこ？」
「右近殿なら――」
守勝は寺の奥へとつづく山道を見やった。

直継は、香煙の揺れる墓前で手を合わせていた。
あこは背後に立ち、おなじように手を合わせる。今朝目にした人が眠っているのかと思うと不思議な気持ちがした。
やがて手は下ろされたが、直継はじっと墓石を見つめていた。
「ねぇ、なにをお話ししていたの」
「……なにも」
（あいかわらず素直じゃないわね）
あのような形で面影と見えたのだ。墓前に立ち、思うところはたくさんあるだろう。
まだあれから五刻ほどしか経っていない。身体に影響はないのだろうか。直継が立ていら

れるのが不思議でならない。

『生者も、死者も、時も、命も、すべてが混沌とした地だからな。私自身、今がいつなのか定かでないときもある』

ものを祓いつづける直継にとって、今朝の一件はめずらしくないことなのだろうか。

直継は佐和山城の造りを知っていた。何度か足を踏み入れたことがあるのかもしれない。

（だから熱を出したり倒れたりするんじゃない）

いますぐ首根っこをつかまえて、寝所に押し込めたいところだ。だが、直継の視線は墓前から離れなかった。

「ずっと……思っていた。なぜ父はこの地で命を賭したのか、と。父にふさわしい死に場所を、他に選びえたはずだ。それをなぜと、ずっと……」

あこは息を呑んだ。

あのとき山が神気を取りもどしたのは、神に捧げられた歌のためだ。

あの歌は、直政が死に際して、みずからの血と命を山に捧げて織り上げた結界だった。

『ろくに話をしたことがないゆえな』

父についてたずねたとき、直継はそう答えた。直政がなぜこの山で果てたのか、戦場ではなく佐和山を終焉の地に選んだのか、直継ははじめて知ったにちがいない。

子の子の末の、末までも。怨霊に殺されたという不名誉な噂を負ってまでも、子を――直継を守るためだったなど。

「もっと、話をすればよかった……」

直継はそう言葉を漏らすと、肩をふるわせた。

宿る力がゆえに家族のぬくもりを知らず、力のために命を賭した父の心を理解できないまま、直継は領国を支えていた。まだ十六才の、大人とはいえない細い肩で。

あこは夕暮れの浜風に押されるように一歩近づく。そして指を伸ばし——衣に触れる直前で、きつく拳をにぎりしめた。

「ね、右近殿。お父上のこと、お母上のこと、御家のことやこれからのこと、いっぱい、いっぱい、お話しして。——これから来るわたしに」

三年前、許婚が父を亡くしたと聞いたときからずっと思っていた。

わずか十三才で一国を背負うようになった許婚は、家臣に対して言えないこともあるだろう。そのときは自分が話し相手になろう。支えてあげよう。失われたものは取りもどせないけれど、たくさん話して互いの心に生きていれば、ずっとその人の側にいるはずだから。そうして言葉を交わしているうちに、きっと自分たちの心も通うことができるだろうから。

（……でも、わたしがいるべき時はここじゃない）

いくらいたいと思ってもここに自分の居場所はない。この場で白の礼服を着ていないことがその証だ。列席者でないあこは薄紫の小袖姿だ。いまの自分は礼服を着ることができない。目の前にいる直継を正室として支えるのは自分ではない。

自分は時を越えたもの。山の結界を綻ばせて、結果的に三成の復活を手助けした疫病神だ。

（あの子がわたしを追い出そうとしていたのも無理もないわね）

ものは歪みを呼ぶと三成は言った。また会おうとも言っていた。自分がここにいれば、直継の害となりかねない。

「わたし、山を下りるわ」

これ以上、直継に迷惑はかけられない。

山を下りたくらいでは元の世界に帰れないかもしれない。だが帰ることができたらまず井伊家に文を書こう。そして文を介して五月の直継に本心を聞き、それでも縁があるならば、今度こそ正式に許婚である直継の元に嫁ぐ。

五月の直継はいまここにいる直継とはちがう。おなじ姿かたちをしていても、持っている記憶がちがう。いま江戸にいる自分とここにいる自分がちがうように、五月の直継はきっと別人だ。今のあこにできるのは、江戸にいる自分がこの時間に生きる直継の支えとなってくれるように祈ることだけだった。

（江戸のわたし、喜びなさいな。あなたの許婚は、無口で無表情で頑固で不器用で、自分にきびしくて他人にも容赦なくて化け猫の小姑付きだけど――いい人だから）

最初は苦労するだろうが、いつかきっと心を開いてくれるだろう。自らの心を隠してでも精一杯の虚勢を張る人だから、言葉や外見にだまされずに見てあげてほしい。どうしてもわからないときでも、きっと采女が説明してくれるだろう。

（木俣殿と采女殿を頼って、なんとかがんばって右近殿の傍に――）

涙がこぼれそうになって、とっさに笑顔を作った。直継はふり返りもしないのになにをしているのかと自分を笑う。ただ、いつもの声音でわかったと了承されることが怖くて、あこはなおも言をついだ。

「多分、江戸のわたしもおなじくらい迷惑をかけると思うけど、右近殿の傍にいる覚悟だけはあるから。ちゃんと話してくれたらきっと伝わるから、いっぱいいっぱい話してあげ――」

（え!?）

不意に重心をくずし、あこの視界がぶれる。

抱き寄せられたのだと気づくまで、しばらく時間を要した。

「右近……殿？」

直継の吐息が耳朶に触れる。言葉にならなかったが、伝わった。――行くな、と。

「ここにいて、いいの……？」

返事はない。しかし背中に回された腕は揺らがない。それが答えだった。

（――ごめんなさい）

謝った先は、江戸にいる自分か、それとも五月の直継か。

いつまで居つづけられるかわからない。いつかは元いた時の流れに連れもどされるのかもしれないし、みずから帰ることを選ぶのかもしれない。未来のことなど、だれも知らない。

（ただせめて、今だけは）

ここにいたい。そう心が告げている。



あこがうなずくように顔をうずめると、幻ではない鼓動とぬくもりが伝わってきた。

「――で、なんで戻ってきてるわけ？」

「え、えっと……」

夜、部屋を訪ねてきたたまに問われ、あこは言葉を詰まらせた。

普段着の小袖に着替え、夕餉までおいしくいただいてしまった後ともなると、あのときは出て行く気だったとは言いづらい。

「たしかあなた、山を下りるよう言われていたわよね？　主命に背くとはいい度胸じゃない」

「いえ、それは右近殿が……」

（ここにいていいとおっしゃったわよね？　え、言ってない？　わたしの勝手な思い込み？　って、わ、わたし、直政さまの墓前でいったいなにを……!?）

数刻前のことを思い出してあこはあわてふためいて畳に沈み、たまは「なにひとりで赤くなってるのよ」と冷ややかに見下ろした。

「主さまがなんですって？」

「私が滞在を許した」

割って入った声にはっと顔を上げる。廊下にいたのは衣を改めた直継だった。

直継の突然の訪いに驚きながらも、気恥ずかしさに目を合わせられず、あこはそそくさと上座を譲った。

「主さま、何故ですか？　この小娘を屋敷に置かれてはお体に障りましょうに」

「あやつに目を付けられたからは、下手に屋敷から出せば狙われよう。それに山を下りたところで帰る方法があるわけではないのだろう」

「え!?　そうなの!?」

思わず叫んだあこを、たまは鬱陶しそうににらみつける。

「帰れないとは言ってないわよ。これだけ気が不安定ならちょっとしたはずみで帰れるわ。ただ、山の下でふらふらとはずみを待つわけにはいかなくなったってこと。誰かさんが厄介なモノに好かれちゃったおかげでね」

（厄介なモノって治部殿のこと？　――それってわたしのせいなの!?）

帰す方法があるなら今すぐ追い返すわよと憤慨するたまに、あこはおそるおそる聞いてみた。

「……ねぇ、わたしがここに来たのは本当にあなたが原因じゃないの？」

「なによ、わたしのせいだとでも言うわけ？」

睨めつけるたまの目は本気だ。たまが人をからかうときの魔性の笑みがない。

（え、でもたしかにあのとき見たんだけど……この子が原因じゃないとしたら一体……？）

あこは眉を寄せて記憶をたどる。この地で最初に覚えた違和感はなんだったか。思い返すと江州に来てまだ三日しか経っていなかった。あまりに多くのことがありすぎて記憶が遠い。

「あ……あの声ってまさか……」
「声？　なによそれ。わかるように説明なさいな」
「ご領地に入ったあたりだったかしら。駕籠の中で夢うつつに声を聞いたの」
昨日の今日でその名を出すのはためらわれたが、おそるおそる告げた。――直政さまの、と。
ふたりの目が見開かれ、張りつめた沈黙が室内を満たす。それを破ったのはたまだった。
「い……いいかげんなこと言わないで！　なんであなたに聞こえたっていうの!?」
「わたしだって夢だと思ったわよ！　でもたしかに今朝聞いた声とおなじだったんだもの！」
たまの剣幕に押され、負けじと返す声は大きくなる。
「あの人があなたをここに呼んだとでもいうの!?　わざわざ結界を弱めてまで!?」
「そんなことわたしに聞かれたって知らないわよ！」
おたがい退かじとにらみ合っていると、遮る声があった。
「――たま」
感情を抑えこんだ低い声。裏を返せば、そうしなければ平静を保てなかったということだ。
主からの制止にたまは口惜しそうに視線を落とす。にらみつけるように畳を凝視していたが、やがて室内に溶けるように姿を消した。
「え、ちょ、ちょっと!?」
あまりに突然のことだった。しかしあこは、消える直前のたまの表情を見ていた。
（あの子、泣いてた……？）

直継とふたり部屋に取り残され、あこは「ごめんなさい」と頭を下げた。
その声が失われて三年、ずっと欲していた者がここにいた。なのに聞いたのが余所者の自分だったことに、たまが感情的になったのも理解できる。そして自分の一言がどれだけ直継の心を揺らしたかも。たとえ耳にしたのが事実だとしても、軽々しく口にしてよい名ではなかった。
だが直継は、ほどなくひとつ息をつくと、ぽつりと漏らした。
「――べつに、かまわぬ」
あこが「え？」と顔を上げると、そこには無理も気負いもない直継の眼があった。
「そなたはただこの地の歪みにはまっただけやもしれぬし、まこと父が必要としてこの時に呼んだのかもしれぬ。たしかに今朝あやつを退けられたのは元忠殿の力あればこそだった。まだそなたがここにいるということは、他に為すべきことがあるゆえかとも思う」
「なにか、わたしがお役に立てるかもしれないってこと？」
「さぁな。……だが今はそれを追究するつもりはない」
そこで直継は息を置き、あこを真正面から見つめた。
「今はただ、そなたのことを知りたい」
「……え？」
言葉の意味を取りそこね、あこはひとしきり呆けたあと、「えええええっ!?」と後ずさった。
（御家大事の人が先代さまをあと回しなんてどうしちゃったの右近殿!?　まだ夢のつづきなわけ!?　そう、きっとまだ寝てるのよわたし！　でなきゃ右近殿がこんなこと言うはずが

……！）

驚きのあまり魂が抜けそうになったとき、引き止める手があった。距離を詰めた直継の手が、あこの手の甲に重ねられる。

「う、ううううう右近殿……!?」

「話してくれないか――そなたの話を、聞かせてほしい」

その一言に、焦りが消えた。――三年前からあったはずだ。ずっと話したかったことが。もう必要のないことだと思っていた。無駄だったのだとも思ったこともあった。けれども直継は、失われた声より今ここにいる自分の話を聞きたいと言ってくれる。

時は、埋められるのかもしれない。

たがいが生きる時間の隔たりを越えて、いまこうして伝わるぬくもりがあるように。

「……あこ？」

笑みとともにこぼれ落ちた涙に、直継がとまどいの表情を見せた。

「ちがうの。……わたしも、右近殿とお話ししたかったの。ずっと」

姿を隠した月の下、やわらかく摑まれた手をつないだまま、たがいに流れた年月を埋めるように、あこはぽつりぽつりと言の葉を紡ぎはじめた。

あとがき

はじめまして、九月文と申します。

『佐和山物語　あやかし屋敷で婚礼を』をお手に取っていただき、ありがとうございます。

本作は、第六回角川ビーンズ小説大賞にて優秀賞および読者賞をいただいた作品を改題、改稿したものです。作品を世に出す機会を与えてくださった審査員の先生方、読者審査員の皆さま、選考関係者の方々に改めて御礼申し上げます。

さて、どのような巡りあわせか、お話の幕開けと同じ日にデビューすることとなりました。とはいえ本作の日付は旧暦ですので、新暦にすると三月下旬ですね。さかのぼること二年前、小説大賞の〆切に向けて作品を仕上げたのもこの日でした。

私は運命を信じるほうではなかったのですが、この作品に関しては二つ三つどころでなく多くの偶然が重なりまして、本当にこういうことってあるの？　とすこし怖さも感じています。

運命や奇跡といったミエナイチカラ系に関しては割とドライな、でも本当はあればいいな、あったら素敵だなとこっそり思っていた私ですが、作家は「魔法使い」だとずっと信じていました。だって、印刷しただけのただの文字が見たこともない国に連れていってくれたり、実在しない世界を見せてくれたりするんですよ？　ただ目で追っているときは印刷物にすぎないの

に、読みはじめた瞬間どこにだって連れていってくれる。これは文字を脳で認識するときに、作家の魔法がシナプスに割りこんで脳を乱しているせいにちがいない、そう思っていました。

じゃあその魔法の力の源ってなんなの？　と悩んで、探して、いろいろ試して、ずいぶん遠回りしましたが、やっとスタートラインに立つことができました。

まだ魔法使いＬＶ１、魔力が全然足りなくて、魔法理論も勉強不足で、生命力が低めなのはデフォルトで、パーティーの後ろで守ってもらわないと呪文も唱えられないような身ですが、皆さまにさまざまな世界をお見せできるようにレベルアップに励みたいと思います。

最後になりましたが、本作の制作に関わってくださった方々に御礼申し上げます。華やかな表紙で飾ってくださった久織ちまきさま。本文はどのような挿絵で彩ってくださるのか、私も一読者として楽しみにしております。また、出版の基本も知らなかった私を丁寧に指導してくださった担当さま。これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

そして本作を読んでくださった皆さまへ。読み終えられたあと、皆さまの心になにかひとつ届いていたなら作者としてこの上ない喜びです。

また皆さまとお会いできることを祈りつつ。

九月　文

〈主な参考文献〉

「国史大系」黒板勝美国史大系編修会・編（吉川弘文館）
「新修彦根市史」彦根市史編集委員会・編（彦根市）
「新編高崎市史」高崎市市史編さん委員会・編（高崎市）
「いわき市史」いわき市史編さん委員会・編（いわき市）
「壬生町史」壬生町史編さん委員会・編（壬生町）
「侍中由緒帳」彦根城博物館・編（彦根市教育委員会）
「研究紀要　第18号」彦根城博物館・編（彦根城博物館）
「井伊家傳記」（たちばな会）
「井伊軍志」中村達夫・著（彦根藩史料研究普及会）
「鳥居元忠」和田兼三郎・編著（鈴木正夫）
「水戸鈴木家の歴史」鈴木重一・編（鈴木重一）

BEANS BUNKO

「佐和山物語 あやかし屋敷で婚礼を」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「久織ちまき」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」までお寄せください。

佐和山物語（さわやまものがたり）　あやかし屋敷（やしき）で婚礼（こんれい）を
九月文（くつきあや）

角川ビーンズ文庫　BB68-1　15554

平成21年2月1日　初版発行
平成21年5月25日　再版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷　製本所――本間製本
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-454501-7 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2009 Printed in Japan

9784044545017

ISBN978-4-04-454501-7
C0193 ¥457E

定価：本体457円（税別）

1920193004571

BEANS BUNKO

佐和山物語
あやかし屋敷で婚礼を

九月 文

戦国の名残留める世の初め。大名・鳥居家の姫・あこは、三度も婚礼が延期になったせいで、お忍びで婚家に向かうことに。まだ見ぬ許婚に心ときめかせ、婚家の領地・佐和山に入ったあこ。そこで出会った許婚・直継は、想像以上の超美形!!　けれど、ため息つく間もなくあやかしに襲われ、直継に救われて!?
《第6回ビーンズ小説大賞優秀賞＆読者賞W受賞》